2020 年度博士学位論文

葉石濤作品における文学観の実践

お茶の水女子大学大学院
人間文化創成科学研究科
比較社会文化学専攻

迫田　博子

2021 年 3 月

目次

序章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第一章　　葉石濤の小説創作活動及び文学観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
　第一節　葉石濤の人物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
　第二節　小説創作活動の概略・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
　第三節　テーヌの文学理論――「種族・環境・時代」・・・・・・・・・・・・・１３
　　　（一）「三個の本源的な力」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
　　　（二）テーヌ理論が明治日本、中国、植民地台湾に与えた影響・・・・・１６
　第四節　葉石濤の文学観の形成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
　　　（一）葉石濤におけるテーヌ理論の受容のあり方・・・・・・・・・・・・１８
　　　（二）黄得時の台湾文学史観から受けた影響・・・・・・・・・・・・・・２２
小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４

第二章　　『台湾男子簡阿淘』論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０
　第一節　『台湾男子簡阿淘』の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１
　　　（一）戒厳令解除後の台湾文学界の動向・・・・・・・・・・・・・・・・・３１
　　　（二）『台湾男子簡阿淘』の先行研究及び本章の視座設定・・・・・・・・・３１
　第二節　他者の「死」の意味するところ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４
　　　（一）本小説の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４
　　　（二）三つの死の場面――第一の喪失体験・・・・・・・・・・・・・・・・３５
　第三節　無力な存在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
　　　（一）突然の逮捕と獄中生活・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
　　　（二）つぎなる喪失・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１
　第四節　再生の道のり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３
　　　（一）回復の契機・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４４
　　　（二）雨に負けつつ風に負けつつ生きてゐる柔らかき草人を坐らす・・・４６
　第五節　「個」と「全体」が連結する物語・・・・・・・・・・・・・・・・・・４７
小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８

第三章　　「獄中記」論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５４

第一節　葉石濤と「日本」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５４
第二節　回想の彼方にある「日本」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５６
（一）記憶として語られる「場所」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５７
（二）「場所」をめぐる解釈と意味づけ・・・・・・・・・・・・・・・・・・５９
第三節　主人公の心に響く「日本」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６１
第四節　集団記憶・個人記憶に存在する「日本」・・・・・・・・・・・・・・・６５
第五節　文学理念の実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６６
小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６９

第四章　『西拉雅末裔潘銀花』論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７４
第一節　台湾における「族群」と台湾の先住民族・・・・・・・・・・・・・・７５
（一）台湾における「族群」の定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７５
（二）台湾の先住民族について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７５
第二節　先行研究及び原住民族にむける葉石濤のまなざし・・・・・７７
（一）先行研究について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７７
（二）原住民族に寄せる関心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７９
第三節　『西拉雅末裔潘銀花』の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・８１
（一）作品概要及びシラヤ族の宗教・社会形態・言語について・・・・・８１
（二）主人公・潘銀花の半生の道のり・・・・・・・・・・・・・・・・・８３
第四節　五人の男たち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８４
（一）五人の漢人男性の形象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８５
（二）描出された「男性性」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８８
第五節　潘銀花の価値観に潜むダブル・スタンダード・・・・・・・・・・・９０
第六節　「種族」と文学観の接続性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９３
小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９４

第五章　「晴天和陰天」論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１００
第一節　先行研究及び創作背景について・・・・・・・・・・・・・・・・・１００
第二節　作品梗概及び小説世界の風土性・・・・・・・・・・・・・・・・・１０２
（一）物語の大要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０２
（二）風土性の表象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０３
第三節　笑いの淵源・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０６

（一）落差・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０６
（二）風刺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０７
（三）自嘲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０８
第四節　「かなしみ」のゆえん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１０
（一）時間標識としての「鬼月」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１０
（二）不条理の提示・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１１
第五節　絶望の彼岸にみえるもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１３
小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１５

終章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２２

参考文献一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２８

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３９

序章

本研究は、台湾作家・葉石濤（1925～2008）の小説作品を対象とし、作家が掲げる文学観に着目しつつ、その文学観をどのように文学創作に実践、反映しているのか、ということについての考察を試みようとするものである。

葉石濤は日本植民地時代に日本語による創作を開始し、戦後、創作言語を中国語に切り換えた台湾戦後第一世代の作家である。葉の執筆活動は、おもに文学評論と小説創作の二つのジャンルに大別できる。評論方面では、台湾の文学作品のみならず、日本や韓国、欧米、アフリカ文学をも取りあげ、発表した評論文は多数を数える。また、その文学評論において、とりわけ評価されている著述は 1987 年に上梓した『台湾文学史綱』[1)]（文学界出版）である。同書の「序文」で、葉はみずからが「台湾文学史のアウトライン（outliane）を書こうと決心した」最大な理由とは、「歴史のうねりの中で、台湾文学がいかにしてその強い自立願望をはぐくみ、かつ独自の台湾的性質を形成したかを闡明すること[2)]」だと声明している。葉は「台湾文学史のアウトライン」を描出したにすぎないと述べているものの、澤井律之が評するように、「台湾文学史観を構築したことに多大な意義」を持ち、さらには「台湾文学の自主性を宣言した[3)]」点において、多くの示唆を与える仕事となった。

他方、台湾文学史上において、葉の小説作品はどのように位置づけられてきたのだろうか。例えば、古継堂は、戦前と戦後を貫く息の長い創作活動に注目し、葉を「台湾小説史上を代表する作家のひとりである」との見解を提示している。なかんずく、「葉石濤は日本植民地時代末期より戦後初期、すなわち、台湾文壇に活発な動きが見られない時期に比較的多くの作品を発表」したことと、1960 年代の風刺小説を高く評価している[4)]。また、張良澤は、19 世紀フランス文学の短編小説の名手として知られるギ・ド・モーパッサン（1850～1893）と重ね合わせて、葉石濤を「台湾短編小説の王」と称えるが、その理由をつぎのように述べている。モーパッサンの特筆すべき功績は、その作品数にあるのではなく、彼が「文学の新しい領域を切り開いたことにある。（中略）同様に、葉石濤文学の最大な貢献は、台湾文学史上において短編小説というジャンルに独自の風格をうちたてたことではないか」と論じている[5)]。

張良澤のいう、葉石濤の「独自の風格」とは、いい得て妙な表現と思われる一方、たやすく説明できるものではないだろう。なぜなら、戸田一康の言葉を踏襲するならば、葉が描出する小説世界はきわめて多彩であり、「一口にその傾向や作風を論じる」のは決して容易ではないからだ[6)]。しかし、さらなる検討を重ねると、葉石濤作品に

はある「中核」が内包されていることが浮かび上がるのである。その中核とは、彼の小説作品に通底する「種族（エスニック・グループ）、風土（自然環境と社会構造）、歴史」という三大主題であり、すなわち葉石濤の標榜する文学史観でもある。葉の文学観は、フランスの哲学者・理論家のイポリット・テーヌ（Hippolyte Taine，1828～1893）の学説から強い影響を受けたものとされている。テーヌの理論についての詳述は次章に譲るが、葉はみずからの文学観・文学理論で意識し続けてきた観点を創作にも反映したと考えるのは適切であろう。その小説の題材の多くは、台湾の歴史や社会情勢など、すなわち、台湾の人々がこれまでに直面してきたさまざまな「現実」と緊密に結びついているのである。

つぎに、葉石濤の文学作品にまつわる先行研究を概観しておこう。従前、主として文学評論と小説作品についての研究がなされてきたが、前者は本論文の範疇ではないため言及せず、後者の先行研究を中心に述べることとする。廖淑芳が指摘するように、文学評論面と比較すると、小説作品に関する研究の蓄積は豊富とは言いがたいが[7]、かような現状の中で、まず、葉石濤研究を長年牽引してきた彭瑞金の研究をあげるべきだろう。彭は、「評伝」という形式を用いて、葉石濤の小説作品にみる文学手法を中心に詳細な分析を行い、葉作品に対する理解を全面的に深めた力作だといえる[8]。陳建忠は、小説作品を通して作家の思想の変遷に焦点をあて、「皇民化教育を受けて成長した皇国少年（an Imperial adolescent）」である葉の思想遍歴をたどりつつ、そのうえで、被植民者だった葉がいかにしてみずからの精神的主体を再構築したのか、という過程を抉りだしたのである[9]。郭漢辰は、ポストコロニアルの観点を用いて分析をし、葉石濤作品にみる政治形態や社会階層に関する叙述について整理した[10]。また、林鎮山[11]や陳玉玲[12]らのように、女性言説に主眼を置く研究があるほか、宋澤莱[13]や陳伝興[14]は、エスニシティのテーマを取りあげながら論述している。

以上の先行研究を通観すると、とりわけ①作品論（主題、作品構造など）、作家論②思想面③台湾人としてのアイデンティティをさぐる方向性から検討を行う研究が進められてきたと考えられる。また、葉石濤文学を台湾の社会的ないし政治的枠組みで分析しようとする言述が多いように見受けられる。むろん、提示されてきたこれらの論点は今日においても有効に機能するところは少なからずある。なぜなら、葉石濤作品の大半は、台湾の社会、政治情勢や歴史から切り離して読むことはできない側面を有しているからだ。一方、前述したように、葉石濤は「種族、風土、歴史」のテーマを積極的に小説世界内に描き出しており、また、私見ではあるが、葉石濤作品の特色は、三大要素を小説の主題としている点だけでなく、それらを作品の中でどのように練成

し、具体化されていったのか、という部分にも潜んでいると考えられる。だとすると、両者――作家の文学観と文学創作――はいかに呼応しあい、どのような接続性を見いだせるのだろうか。しかし残念ながら、この問題に関する検討がなされていないのである。

この点を補う研究として、馬嘉瑜と張文豊、林玲玲らの論考があげられるが、いずれも作家の文学史観と作品との関連性に言及している。馬嘉瑜は、殊に「歴史」や「種族」に着目したうえで、作中の両性関係の描き方を明らかにすることにより、社会構造や思考様式の変遷などを論じた[15]。だが、「風土」を議題として扱っておらず、それゆえに三要素をすべて網羅した考察とはいえないだろう。張文豊は、作品の主題、人物の造形、表現技法という三つの側面に光をあてながら、文学観と創作の両者間の結びつきについて分析したが、考察対象を戒厳令解除後に発表した小説作品に限定しているため[16]、他の時期の作品との比較が困難である。

馬論文と張論文に対し、林玲玲は評論、小説、随筆、翻訳の四ジャンルにわたる葉石濤作品を取りあげつつ詳細な整理を行い、さらに葉が台湾文学史観を確立した過程を丹念に追っていく論証を展開した。これらの検討を経て、作品の基底には、台湾文学の主体性や独自性を主張する作家の創作意識が読みとれるのではないかと、林は結論づけているのである[17]。だが、忌憚なくいえば、小説に関する論述部分を俯瞰すると、『西拉雅末裔潘銀花』という一作品のみ詳しい考察がなされているものの、総じて作品を過不足なく紹介した概説的性格が強い印象がぬぐえない。とはいえ、全期にわたる葉石濤文学に目配りをし、総論的にまとめた労作である。

ここまでみてきた馬と張、林の研究は、テーヌの概念が葉に影響を与えたことや、「種族、風土、歴史」の三大要素を小説の主題に据えている点に論及しているが、しかしながら、ある重要な側面を看過していると指摘せざるを得ないだろう。葉は、そもそも異質であるはずの西洋文学の理論をどのように受容したのか。従前、この問いについて十分な説明が尽くされているとはいえまい。はたして、葉はテーヌ理論を寸分たがわず受容しているのだろうか。あるいは変容しながら認識したうえで、みずからの文学観として再構築していったのか、という点が不明である（管見の限り、葉石濤はテーヌの三大基本法則から影響を受けていることを言明しているが、他方、テーヌ理論の内容について具陳する詳細な記述は確認できない）。葉石濤作品において三大要素が一貫した主題であり、なおかつそれらは葉の小説作品に敷衍できる概念であるとしたら、まずは、葉石濤におけるテーヌ理論の受容のあり方を明らかにすることが必要だと考えられる。

そこで、本研究では冒頭で述べた問題意識――作家は自身の文学観をどのように小説創作に反映・実践したのか――を闡明することを課題とするものであるが、まず、先述の受容のあり方を解明したのちに、個別の作品に関する具体的な分析・考察を進めることとしたい。それにより葉石濤文学を読み解く新たな視点を獲得し、作品の意義を再度見いだすことを目的とする。研究方法は、主としてテーヌの文学理論に加え、テクスト内部のメッセージをも抽出できるよう、各章ごとにて必須な概念等を援用しつつ論ずることとする。

本研究の論述展開は全五章からなり、以下には、章を追ってその手順を述べたい。第一章では、第二章から第五章の論議の理解に資するための導入部分として、葉石濤の経歴や三大法則の概略、作家の文学観の形成などについて述べる。この導入を経て、第二章より小説作品の検討が開始される。第二章では、二・二八事件や白色テロ時代を背景とする『台湾男子簡阿淘（台湾男子簡阿淘）』を取りあげるが、検討に際し、とりわけ、単に歴史上の出来事を作中に登場させただけでなく、それらをいかに描いたのか、という点に注目しつつ考察を進める。第三章では、日本植民地時代に生きる台湾人青年の物語「獄中記（獄中記）」に関する作品分析を行う。従前、さほど着目されていない文中の日本表象に焦点をあてながら論ずることとする。第四章においては、『西拉雅末裔潘銀花（シラヤ族の末裔・潘銀花）』について考察を加える。家父長制社会の漢族と対峙する母系社会の先住民族、という二元論を切り口とするのではなく、二項対立以外の観点で本小説を捉えなおし、「男性性」の概念をも導入したうえで、読みの可能性をひろげる試みをしてゆく。第五章では、ブラックユーモア小説と評されてきた「晴天和陰天（晴天と曇天）」にみる文学技法や主題を明らかにしたうえで、小説世界内に表出する風土性についても言及することにしたい。また、各章において、三大要素ならびに葉の文学観とテクストとの関連性をも分析してゆく。

検討作品の選択基準は、「歴史、種族、風土」のテーマが比較的顕著にあらわれているテクストを取り上げることとした。『台湾男子簡阿淘』、「獄中記」の主題はともに「歴史」であり、『西拉雅末裔潘銀花』は「種族」を主軸に展開する物語である。また、「晴天和陰天」は、小説世界の背景に濃厚な風土的色彩を帯びていると考えられる。ただし、一つの作品のなかに単一の主題だけが描かれているというのではなく、複数のテーマが重なりあう場合もある。上述の手順に沿ってテクストの分析を行う際、とりわけ、テーヌの三大要素を用いていかに表現したのか、また、みずからの文学観をどのように作品に反映しているのか、という点に留意しながら、葉石濤の文学的実践方法を明らかにできることを目標に論を進めてゆく。

【註】

（1）邦訳には、葉石濤著、中島利郎・澤井律之訳『台湾文学史』、研文出版、2000 年がある。

（2）葉石濤『台湾文学史綱』、文学界出版、1987 年、2 頁

（3）中島利郎・河原功・下村作次郎編『台湾近現代文学史』、研文出版、2014 年、298 頁

（4）古継堂『台湾小説発展史』、文史哲出版、2003 年、140 頁

（5）張良沢「短篇小説之王―葉石濤小説管窺」『葉石濤文学会議論文集』台北淡水工商管理学院、1998 年、52 頁

（6）戸田一康「葉石濤作品に見られる日本文学の影響―太宰治を中心に―」『日本台湾学会報』第八号、2006 年、109 頁

（7）廖淑芳「空間語境与歴史暴力――論葉石濤 1965 後復出階段的鬼魅書写」『台湾文学研究学報』十三期、2011 年、131 頁

（8）彭瑞金『葉石濤評伝』、春暉出版、1999 年

（9）陳建忠「従皇国少年到左傾青年　戦後初期葉石濤的小説創作与思想転折」『被呪詛的文学：戦後初期台湾文学論集』、五南図書出版、2007 年、283 頁―311 頁

（１０）郭漢辰「重建台湾殖民記憶――葉石濤小説特質探究」国立成功大学修士論文、2010 年

（１１）林鎮山「牡丹与雛菊的伝奇　葉石濤小説的女性／書写」『台湾新聞報』、2001 年 12 月 10 日

（１２）陳玉玲「葉石濤小説中的女性原型」『越浪前行的一代：葉石濤及同時代作家文学国際学術研討会論文集』、春暉出版、2002 年、293 頁―320 頁

（１３）宋澤莱「葉石濤的長篇小説《西拉雅末裔潘銀花》―公元 2000 年、浪漫文学潮流的到来」『鹽分地帯文学』、2018 年、211－217 頁

（１４）陳伝興「種族論述与階級書写」『従四十年代到九十年代：両岸三辺華文小説研討会論文集』、時報文化出版、1994 年、45 頁―59 頁

（１５）馬嘉瑜「葉石濤小説中的両性関係研究」国立中正大学修士論文、2013 年

（１６）張文豊「戒厳後葉石濤文学之研究」国立高雄師範大学修士論文、1999 年

（１７）林玲玲「葉石濤及其台湾文学論的建構」国立成功大学博士論文、2007 年

第一章　葉石濤の小説創作活動及び文学観

本章では、はじめに葉石濤の経歴を述べ、つぎに小説創作活動の時期を三つに分け、各時期の作風と作品数等を紹介しつつ整理しておく。さらに葉の文学観の背景を明らかにすべく、葉に影響を与えたことが想定されるテーヌの三大基本法則の要略について概説する。なお、テーヌの『英国文学史』に関し、葉石濤が具体的に言明している内容は、同書の「緒論」で述べた文学作品を生み出す三大基本法則――「種族、環境、時代」――のみである。したがって、本論では三大法則の要点を中心に述べ、葉石濤における西洋文学理論の受容のありかたをみてゆく。その際、とりわけ葉の文学観にテーヌの概念がどのように作用しているのか、ということに注目しながら、両者の共通点と相違点について検討することとしたい。

また、葉の文学観の全体像を理解するために、彼が 1977 年に提出した「台湾郷土文学」と「台湾意識」の定義に言及する。両者は、葉の台湾文学史観を考えるうえで重要なキーワードといえるからだ。これらの定義はテーヌのみならず、台湾の文学者・黄得時からも感化を受けたものとされ、それゆえに黄得時の台湾文学史観に関する論述をも紹介し、葉の文学観の形成過程を論じてゆく。

第一節　葉石濤の人物

まず、葉石濤の略歴を述べておこう。

葉石濤は、1925 年 11 月 1 日に日本統治下の台湾・台南市白金町（現・台南市民生路）の名望ある旧家に生まれた。「石濤」という名は、葉の伯父が清初に活躍した明末の遺民画家・石濤（(1642～1707）から取り、名づけたものである。実家は二千ヘクタールの土地を所有する地主階級であったため、八代目の長男にあたる葉石濤は衣食住に欠くことなく、たいそう裕福な生活を送っていた。

葉石濤が 5 歳になる頃（1930 年)、「漢民族のルーツを強く意識していた両親は慎重に考えたうえで、私を書房で漢文教育を受けさせよう[1]」と決め、幼少期は二年間ほど書房へ通うこととなった。そこでは、『大学』や『三字経』などの漢籍をひたすら暗記させられたが、しかし、幼かったためか、書房で学習した内容はほぼ記憶にとどめていないと述懐している。なお、「書房」とは、清朝より開始された民間の私塾（民学）である[2]。

1932 年、末広公学校［現・台南市立進学国民小学。また、公学校とは日本統治時代

における台湾籍学童のための初等教育機関である――筆者注］に入学し、日本語教育を受ける。入学当初、「私は日本語がまったくわからず困りはてていたが、しかし一学期が終わった頃には奇跡的に理解できる[3]」ようになったという。葉石濤は自身の学生時代を回想する際、わけても読書体験について多く語っている。公学校の高学年になると、読書の世界へといざなってくれた先生の影響を受け、トルストイの『戦争と平和』やファーブルの『昆虫記』、日本近代文学などさまざまな書籍を読み、読書の楽しさや奥深さに開眼した。

1938 年には台南州立第二中学校（現・台南第一高級中学）の試験に合格し、進学する。魯迅や郁達夫、郭沫若、林語堂など中国作家の著作（日本語訳）をはじめ、当時台湾で入手できる著名な世界文学作品をほとんど読破した。また、河上肇の『第二貧乏物語』やヘーゲルの『資本論』に出会い、弁証法的唯物論の立場で思考するようになったと述懐している[4]。

かくして、葉少年は文学好きが高じて創作活動を始めることとなり、1940 年、15 歳の時に処女作「媽祖祭」（佚文）を『台湾文学』、翌 1941 年には「征台譚」を『文芸台湾』に投稿するが、いずれも掲載にはいたらなかった。1943 年、「林からの手紙」を再度『文芸台湾』に投稿し、それが縁で西川満（1908～1999）の知遇を得ることとなり、1943 年、台南第二中学校を卒業後、『文芸台湾』雑誌社にて編集助手を務める[5]。一年後には退社し、帰郷して宝公学校（現・台南市立立人国民小学）の教師となる。1945 年、20 歳で陸軍二等兵として軍隊に召集されるが、戦地に赴くことなく終戦を迎え、帰郷する。終戦後は日本語から中国語への転換に努力し、小学校教師として勤務する傍ら、文筆活動を続け、新聞の文芸欄などで小説や随筆を発表していた。

しかし、五十年代の白色テロ時代に入ると、葉の人生は大きな災厄に見舞われることとなる。27 歳の時にある台湾共産党分子と知りあったことが原因で、1951 年に「検粛匪諜条例」違反（スパイと知りながら通報しなかった罪）により逮捕され、5 年の有期徒刑の判決を受ける。1954 年秋、恩赦による減刑で釈放されるが、その後も艱難辛苦を強いられた。政治犯の前科を持つ葉にとって、社会復帰は容易ではなく、また、国民党の農地改革により故郷の土地を失ったため、生活が立ち行かなくなってしまう。葉は田舎の小学校の代用教員を勤めながら、台湾各地を転々とし、1957 年には正式な教員資格を取得したものの、当局の執拗な監視がなおも続くなかで、再び投獄される恐怖に怯える日々を送っていた[6]。

1959 年、友人の紹介で高雄市出身の陳月得と結婚し、二子をもうけるが、しかし、暮らし向きが一向によくならず、文学にかかわる余裕はなかった。そのころを綴った

葉の回想をみてみよう。

> 1950 年代、私は徹底した傍観者であった。土地改革の施行により土地を失う没落した地主家庭の出身者で、貧しさにあえぎながら、社会の底辺で生きていかざるを得なかった。私にとって文学は贅沢な夢にすぎず、1950 年から 1960 年代の後半にかけて、私の文学生命は終わりを告げたのも同然であった。（中略）赤貧の生活のなかで夢をみることは決して許されない。私の日々の最大な関心事は、いかにして子供のミルク代を稼ぎ、そして、どのようにすればにっちもさっちもいかぬ行き詰まった生活を打開することができるのか、ということであった。[7)]

1965 年にようやく転機が訪れる。葉はこれまで続けてきた小学校の教師を辞し、台南師範学校特師科（現・台南教育大学）に編入学する。また、偶然、呉濁流が創刊した『台湾文芸』を目にしたことにより、文学創作への情熱が再燃したのである[8)]。約 15 年ぶりに短編小説「青春」（『文壇』第 64 期、1965 年）、評論文「論呉濁流「幕後支配者」」（『台湾文芸』第 2 巻第 9 期、1965 年）、「台湾的郷土文学」（『文星』第 97 期、1965 年）を発表し、台湾文壇に復帰することとなる。1966 年に台南師範学校を卒業後、小学校の教員をつとめる一方、本格的に創作活動を再開した。1968 年に初の小説集『葫蘆巷春夢』（蘭開書局）や評論集『葉石濤評論集』（蘭開書局）を出版し、それ以降、主として小説と評論の二輪で文筆活動を続けたが、70 年代より 80 年代頃までは評論方面、戒厳令解除後以降は小説のジャンルに創作の重点を置いている。

あまたの試練を乗り越えながら、葉は孜々として創作に勤しんだ。「没有土地、哪有文学（大地なくしては文学はありえない）」と語るように、文学的営為を通じ、一貫して真摯なまなざしで台湾社会や人々を見つめ続けていたといえよう。1999 年、成功大学において名誉博士を授与され、同校の台湾文学研究所にて教鞭を取る。おもな受賞歴は、「第一回巫永福評論奨」（1980 年）、第十一回塩分地帯文芸営「台湾新文学貢献奨」（1989 年）、「台美基金会人文成就奨」（1991 年）、「第一回高雄県文学貢献奨」（1994 年）、淡水真理大学「第二回台湾文学家牛津奨」（1998 年）、「第二十回行政院文化奨」（2000 年）、「第五回国家文芸奨文学類」（2001 年）などがある。2008 年 12 月 11 日、83 歳でこの世を後にした。次節では葉石濤の小説創作の時期区分や作品数をみておこう。

第二節　小説創作活動の概略

台湾文学界において、葉石濤はもっとも息の長い作家活動をしてきたひとりといわれる。一方、前節にてふれたように、葉の創作期間を概観すると、創作言語の切りかえ（日本語から中国語に）や政治犯として投獄され、生活苦のために生じたブランクなど、さまざまな複雑な内情が浮かび上がる。さらには、時期によって評論と小説の執筆活動の比重が異なっているため、年代ごとに小説作品の発表数にばらつきがみられる。本節では、これらの点に留意しつつ、葉石濤における小説創作時期の区分や作品数を整理し、そのうえで各時期の主題や作風の変遷をみることとする。なお、先述したとおり、葉石濤の文学創作は小説、評論や随筆、翻訳など多岐のジャンルにわたるが、本研究では小説作品を考察対象として取りあげているため、ここでは小説に限定して詳述することにしたい。

まず、創作の時期区分についてみておこう。彭瑞金は、葉の小説創作には顕著な三つのピーク期がみられると指摘している。[9)]

〇第一ピーク期：（第二次世界大戦終戦後の）戦後初期（1946 年～1950 年）
〇第二ピーク期：台湾文壇に再復帰をした時期（1965 年～1971 年）
〇第三ピーク期：戒厳令解除後以降（1987 年～2006 年）

この区切り方にならいつつ、発表した小説作品数、創作傾向等を整理してゆく。また、各ピーク期の詳細を述べる前に、日本植民地時代に掲載された作品のみを以下に記しておく。「林からの手紙」（『文芸台湾』第五巻第六号、1943 年 4 月）、「春怨――我が師に」（『文芸台湾』第六巻第三号、1943 年 7 月）、「夜明け」（『台湾芸術』第五巻第二期、1944 年 2 月）、「米機敗走」（『台湾文芸』第一巻第六号、1944 年 11 月）、以上の 4 編の作品を発表している。陳芳明によると、この時期の日本語小説の特色は、「耽美的で、ロマンティシズムと想像に溢れ」、かつ「台湾の風土の息づかいをうまくつかみ、そこはかとなく亜熱帯の香を漂わせていること[10)]」だと分析している。

例えば、「林からの手紙」では作家の出身地の台南を物語の舞台とし、「亜熱帯特有の強い日光」、「関帝廟」、「マンゴーの砂糖漬け」、「台湾風の農家にオランダ風の露台を加味した二階屋」など、文中、台湾に関する描写を散見する。ほかの 3 作についても同じ傾向がみられ、このころから早くも、自身にとって身近な台湾の風土、景色を小説世界に描出しているようすがうかがえよう。

【第一ピーク期】（1946 年～1950 年）

日本の敗戦により国民党政府に接収された台湾では、1946 年 10 月 25 日に新聞の文芸欄の日本語欄が廃止されることとなった。廃止されるより以前、葉石濤は日本語で創作した 3 編の短編小説、「幻想」(『中華日報』1946 年 3 月 28 日)、「瑠璃泥坊」(『中華日報』1946 年 8 月 16 日)、「旅芸人」(『中華日報』1946 年 10 月 7 日）を発表している。ところで、日本語欄廃止後の数年間、すなわち創作言語を転換する過渡期において、葉はどのようにして創作を続けていたのだろうか。この時期に発表した作品の多くは、まず日本語を用いて創作した小説を、第三者に翻訳を依頼したのちに発表していたのである。

戦後第一世代の作家のなかで、葉石濤は比較的早く中国語での創作に切りかえたひとりであると評されているものの、しかし、管見の及ぶ限り、「いつ、どの作品」から他者に翻訳を依頼することなく、中国語による創作に移行することができたのか、従来、この問題について明確にされていない。もとより、作家にとって創作言語の転換は大きなターニングポイントであるため、以下では発表年に沿って作品を列挙し、言語転換の過渡期における創作言語の使用状況をつまびらかにしたいと思う。なお、「副刊」とは新聞の文芸欄であり、また、翻訳された作品のみ訳者の氏名を明記する。

①「河畔的悲劇（河辺の悲劇)」(『新生報』「橋」副刊、1948 年 6 月 9 日・林曙光訳）

②「復讎（復讐)」(『中華日報』「海風」副刊、1948 年 6 月 25 日）

③「来到台湾的唐・芬（台湾にやってきたドン・フン)」(『新生報』「橋」副刊、1948 年 6 月 28 日）

④「娼婦（娼婦)」(『中華日報』「海風」副刊、1948 年 7 月 2 日）

⑤「澎湖島的死刑（澎湖島の死刑)」(『新生報』「橋」副刊、1948 年 7 月 21 日・潛生訳）

⑥「帰郷（帰郷)」(『台湾力行報』「新文芸週刊」第三期、1948 年 8 月 16 日・潛生訳）

⑦「汪昏平・猫和一個女人（汪昏平・猫とある女性)」(『新生報』「橋」副刊、1948 年 8 月 18 日・潛生訳）

⑧「三月的媽祖（三月の媽祖)」［媽祖とは、民間信仰で航海の平安を司る女神である――筆者注］(『新生報』「橋」副刊、1949 年 2 月 21 日・陳顕庭訳）

⑨「怜仃女（孤独な女)」(『新生報』「橋」副刊、1949 年 2 月 24 日・秦婦訳）

⑩「天上聖母的祭典（天上の聖母の祭典)」(『新生報』「橋」副刊、1949 年 3 月 29 日・林曙光訳）

⑪「莫里斯貝尼斯基的遭遇（モリスベニスキーの遭遇)」(『公論報』、1950 年 6 月 19 日、26 日）

⑫「画家洛特・莱蒙的信（画家ロット・ライモンの手紙）」（『公論報』、1950 年 12 月 5 日、12 日）。

上に示したとおり、⑩「天上聖母的祭典」までは、翻訳の依頼をしている作品が多数を占めているが、1950 年に発表した⑪「莫里斯貝尼斯基的遭遇」以降は、翻訳の記載が見あたらない。そのため、作家自身による中国語での創作に完全に切りかえられたのは、この作品以降ではないかと推察する。この時期の作品は、オランダ植民地時代など台湾の近代史から材を取る作品や、④「娼婦」と⑨「怜仃女」のように、封建社会のもとで非情な運命を生きる女性を描く傾向が際立つが、葉石濤作品を翻訳した陳顕庭はその作品に対し、「生き生きとした生命力を感じさせるばかりでなく、台湾社会や台湾の人々に根付いた創作である[11]」と評している。

【第二ピーク期】（1965 年～1971 年）

執筆活動を再開した 1965 年から 1971 年までの第二ピーク期は、精力的に小説創作に取り組む。この時期は、「烏秋村」を舞台にした「決鬪（決闘）」（『青渓』第 1 巻第 9 期、1968 年 3 月）、「群鶏之王（ニワトリの王）」（『徵信新聞報』、1968 年 3 月 19 日～20 日）「堕胎（堕胎）」（『徵信新聞報』、1968 年 6 月 2 日）など、従来、ブラックユーモア小説と称される作品が注目を集めているが、一方、多彩な小説世界が描出されていることを看過してはならないだろう。以下に小説作品を列挙しておこう。

① 「叛国者（反逆者）」（『台湾日報』、1967 年 9 月 23 日～25 日）、「俘虜（捕虜）」（『台湾日報』、1969 年 10 月 7 日～8 日）、「福佑宮焼香記（福祐宮へのお参り）」（『文芸』第 15 期、1970 年 9 月）等、オランダ植民地時代、清朝や日本統治時代の歴史に材を取る作品。

② 「黄水仙花（黄色い水仙）」（『文壇』第 80 期、1967 年 2 月 1 日）、「雛菊的回憶（雛菊の思い出）」（『小説創作』第 40 期、1967 年 9 月）にみるように、総じて封建社会で抑圧されている旧来の女性像ではなく、自我や主体性を求めて生きるヒロインの造形に変化が生じている。

③ 「行医記（ある医師の半生記）」（『純文学』第一巻第二期、1967 年 2 月）、「伊魯卡・摩莱（イルカ・モライ）」（『小説創作』第三十五期、1967 年 4 月）では、台湾先住民族の居住地の山間部を物語の舞台とし、また、先住民族の女性に焦点をあてつつ描いている。

④ ある台湾人家庭で起きたスキャンダルを描く「醜聞（醜聞）」（『中国時報』、1969 年 8 月 30 日）は、物語の前説として日本の女流作家・岡本かの子の逸話が語られ、後半で本題のストーリーが展開される、という二部構成となっている。葉石濤作品

ではほぼ例をみない創作技法だといえる。

⑤ 「墓地風景（墓地の風景）」（『中国時報』、1970 年 8 月 11 日）、「葬礼（葬儀）」（『台湾文芸』第七巻第二十九期、1970 年 10 月）などは、葉が多用するリアリズムの手法とは一線を画す作品である。現実世界なのか否か、判別のつかぬ空間設定と神秘的な登場人物らの造形が特色だと考えられる。

このようにみると、第二ピーク期も三要素を題材として用いているものの、文学手法に新たな試みがみられる時期といえるのではないか。しかし、1971 年に「鸚鵡和竪琴（オウムと竪琴）」（『台湾日報』、1971 年 4 月 10 日～22 日）を発表すると、その後約 16 年の間に発表された小説作品はわずか 4 編を数える。したがって、第二ピーク期と第三ピーク期の間には、小説創作の「寡作期」が存在していたのである。1971 年から 1987 年までに発表した 4 編の作品名と初出を記しておく。①「有菩提樹的風景（菩提樹のある風景）」（『台湾文芸』革新号第十七期、1980 年 12 月）、②「女人桃花（ある女性のいろごと）」（『台湾日報』、1984 年 4 月 5 日）、③「遊廓（遊郭）」（『自立晩報』、1985 年 6 月 3 日）、④「命田（命の稲田）」（『台湾時報』、1987 年 3 月 3 日～4 日）。発表作品数が減少した一因として、文学評論の執筆に創作活動の軸足を移したためと考えられる。

⑥ 【第三ピーク期】（1987 年～2006 年）

第三ピーク期は、これまでもっとも多くの作品を世に出した時期であるが、戒厳令が解除され、台湾社会の民主化・自由化というファクターが加わったことに起因し、これまでタブー視とされてきた二・二八事件などといった史実をも取り扱うことができるようになった。題材の広がりのみならず、晩年における小説創作は、官能的な描写が際立つ作品もみられる。存命中、最後に発表した小説は「頭社夜雨」（『塩分地帯文学』第三期、2006 年 4 月 1 日）である。長編小説は著しておらず、発表された短中編小説の作品数は、日本統治時代 4 作、第一ピーク期 15 作、第二ピーク期 39 作、第二から第三ピーク期間の間には 4 作、第三ピーク期 88 作。日本語と中国語で創作した小説作品すべてを合わせると 150 編を数える。

以上、葉石濤の小説創作における三つのピーク期の詳細と各時期の作品数について整理したが、彭瑞金はさらに、各ピーク期にみられる主要なテーマや創作傾向に関し、つぎのようにまとめている。第一ピーク期は、耽美的な作風が特色であり、第二ピーク期はブラックユーモアの創作技法を多用し、第三ピーク期の作品は政治体制への抗言やエスニシティの主題に集約できると分析している[12]。他方、廖淑芳は彭の分類方法に異論を唱えている。

作品に包含する重要な主題を列挙しておこう。それらは（1）ロマン主義かつ官能的な色彩に彩られた小説（2）葉石濤の出身地である台南を物語の舞台にしたローカルな趣を呈する小説（3）オランダ植民地時代、第二次世界大戦時代の台湾の歴史に取材した小説（4）イデオロギーや政治体制に対する異議の申し立て及び台湾のエスニック・グループの問題を扱った作品に分けることができる。だが、作品全般を通じ、葉の小説は往々に複数のテーマが重なり合っていることが大きな特徴だといえよう[13]。

廖は、作品の主題ないし作風を時期によって限定するべきではないと述べている。先述したごとく、葉石濤の小説作品には「種族、風土、歴史」という三大主題が繰り返し描出されているが、廖がいみじくも指摘しているとおり、それらは単一に取り扱われるのではなく、テクストにはしばしば「複数のテーマ」が重層的に内在しているのである。では、作家の創作活動の背景に存する文学観はどのように形成されたのだろうか。次いで、この問題について論じてゆくが、まず第三節でテーヌの説く三大基本法則を概説し、続く第四節では葉石濤におけるテーヌ理論の受容のあり方のほか、黄得時の台湾文学史観についても言及しておくことにしたい。

第三節　テーヌの文学理論――「種族・環境・時代」

本節では、まず、テーヌの措定した文学作品を生み出す三大法則の概略を述べ、つぎにテーヌの文学理論が明治日本や中国、日本統治期の台湾に与えた影響についてみておこう。

（一）「三個の本源的な力」

テーヌは 19 世紀のフランスの歴史家・哲学者・自然主義の理論家であり、実証主義の立場から文学作品を研究し、「種族、環境、時代」の三大要素を骨子とする方法論を展開した人物として知られるが、ここでははじめに、テーヌが『英国文学史』を発表した当時の時代背景について簡単に振り返っておこう。毛利郁子によると、十九世紀のフランス文学史において、ロマン主義の理想に取ってかわり、社会的な現実を描こうとするリアリズム文学の潮流が生じた。それは当時の諸科学の発展に伴い、より科

学的かつより客観的に描こうというムーヴメントでもあり、十九世紀後半までフランス文学の主流を占めることとなる。その写実主義・自然主義の理論的指導者がイポリット・テーヌであった[14]。なお、『英国文学史』は 1863 年～1864 年に 5 巻版行しており、1872 年にヴァン・ローンによって英訳されている。日本における邦訳状況はつぎのとおりである。1943 年に平岡昇が『英国文学史』の第 1 、2 巻（『英國文學史』、創元社）、1998 年に手塚リリ子・手塚喬介によって第 3 巻を翻訳、（『英国文学史　古典主義時代』、白水社）発刊されている[15]。

さて、テーヌの古典的名著『英国文学史』の「緒論」で、テーヌはみずからが掲げる文学理論をつぎのように述べている。テーヌによると、文化の発展を促し、文学作品を生み出す「三個の本源的な力」とは、すなわち「種族（la race）、環境（le milieu）及び時代（le moment）」である[16]。以下に三大法則の要点を整理しておこう。

まず、「種族」の定義とは、「人間がその出生と共にこの世にもたらしてくるあの生得的な遺傳的諸傾向であって、通常、気質と體格に著しく現れる差異と結合[17]」するものである。この傾向は民族によって差異がみられると指摘しているが、それはなぜだろうか。テーヌによれば、居住地の自然環境（気候など）の違いにより、おのずと異なった活動の系統、欲求などが生じるため、最終的には「異なった能力や本能の系統[18]」が生まれるからだ。また、「人間は、その周圍の事情と平衡を保ってゆかねばならぬので、それに適應した氣質や性格を習得する[19]」のである。

第二に「環境」を加えなければならない理由として、風土が人間性に影響を及ぼすことを原因にあげている。テーヌ曰く、人間はただ一人で存在するのではなく、自然や他者に囲まれ生活しており、そのため、我々は外在する物理的ないし社会的事情によって「人間の自然性を」損なわれ、または補われるのである。具体例としてゲルマン民族とギリシア・ラテン族をあげ、両者の気質や生活様式、社会構造に違いが生じているのは主として「兩者の定住した地域の差異に起因する」と結論づけている[20]。

第三の要素である「時代」の箇所で記したテーヌの文章を引用しておこう。

> そこには、或る種の支配的な概念が君臨していたのである。人々は二百年、或は五百年もの間、人間の或る種の理想型を心に描いていた。（中略）この創造的で普遍的な觀念は、行為と思想の全領域にわたって現われた。そして、この觀念は無意識的に一體系をなしてゐるところのその作物を以て世界を滿たした後、衰退、やがて消滅した。すると忽ち、同じように支配し、同じように多數の創造を行うべく豫定された、一つの新しい觀念が擡頭した。[21]

根岸宗一郎によると、テーヌの時代の概念とは、「ある時点における文化の所産が次の時点における所産の継承された影響を与えるというもの[22]」である。一方、前出の毛利は、テーヌの説く「時代」の内実とは、「特定の支配的概念が支配し、滅び、さらに新しい観念が出現するという表面的な内容でしかない[23]」と指摘している。

ところで、この三つの要素はどのように相互に作用し、浸潤しあうのだろうか。根岸の理解を通じてみておこう。

> 「文学」は「人種」「環境」「時代」の三つの要素によって規定される。「人種」は「内的源泉」であり、これに「外的壓力」である「環境」が作用して「所産」をもたらす。この「所産」が次の時点における「所産」に受け繼がれ、それに勢いを與えること（つまり「時代」の作用）により、その時点の「知性及び精神の傾向」が生じる。この「知性及び精神の傾向」が「文学」及び「文化」一般を生み出す。また、「人種」は「所産」を生み出す「永續的推進力」である[24]。

以上、テーヌの説く三大基本法則の概略について整理したが、他方、「種族、環境、時代」を文化発展ならびに文学作品を産出する原動力とする理論は不十分だという批判もみられる[25]。この問いを考える際、平岡昇の知見は傾聴に値するだろう。平岡は、テーヌ理論は哲学的思考方法を出発点としている、という視座を提示しながら次のようにことばを継ぐ。

> 哲学の任務は一見混沌とした複雑な現実を、分析と抽象によって、単純明瞭な要素の世界へ還元することであり、いかに複雑多様な文化的、歴史的現実でも、人間精神の機構（心理）と運動（歴史）を支配する少数の根本法則、幾何学の定理のような公式によって説明できると考えた。[26]

かような着想に基づき、テーヌは、「三大原動力や、精神的能力の根本形式としての主要機能や、一つの時代的環境内の諸事実の一般的特質を規定する相互依存の法則などの観念に到達し[27]」た分析しているのである。

ところで、葉石濤は「私は日本植民地時代からすでにフランスの哲学者であるテーヌの文学理論に注目していた[28]」と述べているように、テーヌの影響は、日本を経由し、中国や日本植民地下の台湾にも及んでいたとされる。では、テーヌ理論が明治日

本や中国、台湾の文学界に与えた影響とはどのようなものであったのだろうか。次項ではこの問題を中心にみてゆく。

（二）テーヌ理論が明治日本、中国、植民地台湾に与えた影響

繰り返しとなるが、テーヌ理論は日本を経由して中国や台湾に流通、伝播していったとされ、日本では坪井逍遥や島崎藤村、山路愛山、夏目漱石らに親しまれ、『英国文学史』は英文学専門家にとり重要な入門書であったという[29]。また、笹沼暁俊によると、1890 年に刊行された日本の最初の文学史である三上参次・高津鍬三郎『日本文学史』[30]は、テーヌ理論の手法に負うところが多く、『日本文学史』の特徴は、「「世界文学」を対概念として出発し」、なおかつ「そのナショナルな自己同一性と特殊性を、西欧の文学概念の普遍性との対比をとおして形成し、主張した」ことにあると分析している[31]。

次いで中国の状況をみてみよう。中国では、大きく影響受けた文学者として周作人の名があげられるだろう。前出の根岸の研究で示されているように、周は日本留学期間中（1906～1911）に大量の西洋文学理論を受容し、自己の文学観を形成していったが、その中にはテーヌの学説も含まれている。1908 年に「論文章之意義暨其使命因及中国近時論之失」（『河南』第 4、5 期）及び「哀弦篇」（『河南』第 9、12 期）を発表し、二編の文学論として結実している[32]。他方、テーヌ理論は創造社同人の郭沫若や成仿吾らにも認識されることとなるが、しかし、郭は、文学批評は作品の本質に着目すべきだと述べ、また、成は作品の芸術面を看過してはならぬと考え、科学の方法から文学を学ぶというテーヌの提言に対して批判的な見方を示していたようだ[33]。当時の中国文学界において、テーヌの概念は全面的に受け入れられたといえないまでも、他方で、「民族や国家の精神を確立せんとする中国文学史の主流的な言説」を導きだすうえで一定の影響力を持ちえたと、戴燕は指摘している[34]。

では、植民地台湾の状況はどのようなものであったのだろうか。林巾力によると、テーヌの文学概念は、1930 年頃から 1940 年代にかけて、台湾文学界にも多大なの影響を与えていた。林は、テーヌが受容される主な理由として、以下の二点をあげている。第一に、当時の台湾文壇では、旧来の文学評論方法は評論者の主観に依拠するきらいがあるとみなされていたため、代替する新しい体系的な評論方法を打ち立てようとする動きがあったとされる。第二に、テーヌの学説は文学解釈共同体という点に着目しており、すなわち、文学作品とは各民族の精神を再現し、なおかつその民族の特

質を克明に写実する、という見解を提示していることが受容される大きな要因として考えられる。なぜなら、「植民地台湾は「強大な他者」である日本の支配下にあり、台湾文人や知識人たちの多くは、みずからの文化的アイデンティティを追尋する課題を抱えていた」からにほかならない。それゆえに、彼らにとって、テーヌの説く「種族、環境、時代」という三大要素は、文学評論や研究方法として援用できるリソースであるばかりでなく、「文学作品に内包する民族性」を解釈するための具体的な視座を供与したのではないかと、林は分析している[35)]。

例えば、台湾の社会活動家・歴史家の葉栄鐘（1900～1978）は、当時台湾で叫ばれていたプロレタリア文学に対抗するものとして、台湾文学の目指すべき方向性は、世界文学としての「第三文学」であるとの主張を提出している。1932 年に発表した「巻頭言：第三文学提唱」（『南音』第 1 巻第 8 号、1932 年 6 月）では、「ある社会集団を構成する人種、歴史、風土、人情によって、ある種の共通の特性が形成されるものであり、このような特性は階級の存在を超越するものでもある」と述べている。ここでいう「ある種の共通の特性」を「台湾の独自性」とも言い換えられるが、台湾の独自性を陳ずる説明方法として、テーヌ理論の三大法則が引用されていることは明白であろう。また、日本に留学していた巫永福（1913～2008）は、文学の領域に科学的方法を導入するテーヌの学説は普遍性を備わるものとして捉え、文学批評の枠組みとしての効用を高く評価している[36)]。

さらに、黄得時（1909～1999）もテーヌ理論から大きく影響を受けていた文学者の一人だとされる。記者でもある黄は、植民地時代に台湾文学史観に関する論文を 4 編発表しており、すなわち、①「挽近の台湾文学運動史」（『台湾文学』第 2 巻第 4 号、1942 年 10 月）②「台湾文学史序説」（『台湾文学』第 3 巻第 3 号、1943 年 7 月）③「台湾文学史第一章――明鄭時代」④「台湾文学史第二章――康熙雍正時代」（③、④『台湾文学』第 4 巻第 1 号、1943 年 12 月）である。黄はとりわけ、「台湾文学は中国や日本の文学とは異なるものであり、独立した存在であるべき[37)]」と強調し、また、「台湾は種族、環境、あるいは歴史の観点からみても独特で固有な性格を有し」ているため、「清朝の文学や明治日本の文学とは異なる作品が生み出されるゆえん」だと述べた[38)]。黄の論述にも三大法則を援引している痕跡が読みとれよう。なお、葉石濤はテーヌのみならず、黄からも感化を受けていることはすでにふれたとおりであるが、次項にて、黄得時の台湾文学史観が葉に与えた影響を詳述することにしたい。

やがて時は流れ、戦後になると、前出の林巾力が指摘するように、テーヌ理論は葉石濤がみずからの台湾文学史観を構築するための架構となりえたのである。台湾にお

いては、戦前戦後を貫き、テーヌの概念は繰り返し引用され、台湾文学の独自性や特殊性をめぐる言説として再生産され続けたと考えられる。

以上、本節の前半では、テーヌの措定した三大原則の具体的な内容を概説し、また、後半部分においては、テーヌ理論が明治日本や中国、植民地台湾の文学界に与えた影響について整理した。それぞれの地での受容のありかたや感化力の度合いは一様ではないにせよ、「民族的特殊性」を表出・担保するするためのフレームワーク、あるいは文学論を構築するための方法論としての役割を担う側面を保有していたと解釈できるのではないか。一方で、葉はどのようにして、本来異質であるはずの西洋文学の概念を受容したのだろうか。次節ではこの問題について考えてみたいと思う。

第四節　葉石濤の文学観の形成

本節では、葉石濤の文学観の形成について論ずることとする。まず、テーヌが掲げる三大基本原則に対する葉石濤の見解を紹介するが、わけても葉はどのような独自の解釈を加えたうえで、テーヌの文学理論を取り入れているのか、という点に留意しながら受容のありかたをみてゆく。さらには、葉は日本統治期の文学者の黄得時からも影響を受けていたとされるが、その問題についても述べることにしたい。

（一）葉石濤におけるテーヌ理論の受容のありかた

前節にて、テーヌが掲げる三大基本法則である「種族、環境、時代」について概説したが、本節では三大要素に対する葉石濤の見解を紹介しておこう。繰り返すが、従来、葉石濤の文学作品とテーヌ理論の両者の関連性について論じた先行研究はあるが、しかしながら、管見の限り、葉における受容の過程に関する説明はなされていないのである。本稿では、とりわけ葉がテーヌの文学概念を認識する際にどのような独自の解釈を加え、みずからの文学観として再構築しているのか、という問題に留意しつつ受容のありかたをみてゆく。

まず、「種族」について、葉石濤は台湾の先史時代に遡り、つぎのように述べている。

> 遠く遡ること三万年前には、左鎮人（一九七〇年夏、台南県左鎮で発見された）が生存していた。その後、長浜郷八仙洞（台東県）にも旧石器時代の人類が生存した痕跡があり、何千点もの旧石器が残されている。台湾の旧石器時代の人

類がどのような人種であったのか、いまのところまだ答が出ていない。しかし、旧石器時代に一人種だけが存在したというより、さまざまな人種の人類が生存していたといったほうが理解しやすい。[39]

台湾におけるエスニック・グループの概況は、第四章にて後述するが、ここではまず葉石濤の論述を中心にみておくこととする。台湾の先住民族は南島語族であり、彼らは「それぞれ固有の母語があり、社会形態や文化も異なり、単一の民族とは認めがたい[40]」と葉は述べている。

また、南島語族を除けば、その他の民族はいずれも中国から台湾に入植した漢族ではあるが、「早くから来た河洛人、客家人と戦後来台した外省人[41]」を細分化すべきだと指摘する。なぜなら、「河洛人というと、彼らの間は泉州、漳州、福州に分かれる。客家人はまた福建と広東の各地に分かれる。外省人の構成はさらに複雑である[42]」からだ。この状況をふまえ、葉は、いにしえより台湾は多種族の移民社会であると結論づけし、また、異なるエスニック・グループは台湾社会を構成する雑多性・多様性の一因であると述べている。すでにみたように、テーヌは「種族」について、「生得的な遺伝的諸傾向」は気質や体格面に顕著に現れていると主張しているのに対し、葉石濤はこの論点にはふれておらず、台湾のエスニック・グループ間に存在する母語や文化の違いに注目したうえで、この相異によって多様性がもたらされることに主眼を置いている。

第二の要素の「環境」について、葉石濤は「環境」を「風土」と言いかえたうえで、風土には「自然環境」と「社会構造」の両者を含むと定義する。また、台湾の「自然環境」は、この島に住むエスニック・グループたちに少なからずの影響を与えてきたと述べる。

台湾は亜熱帯気候に属し、（季節により）台風が頻繁に通過する位置にあるが、四方を黒潮が渦巻く海洋に囲まれ、降雨量も多く、年間を通して常夏である。草木はあおあおと生い茂り、（中略）美しい大自然と亜熱帯気候は、まぎれもなくこの島に住むエスニック・グループたちにさし響き、彼ら独自の気質や情性を形作っていく過程で、なんらかの作用を及ぼしたであろう。培われた気質とは勤勉かつ率直で、正直な性格であり、屈することなく、忍耐強さと力強さが備わったものある。[43]

海に囲まれ、豊かな自然の恵みをうける一方、繰り返される台風などの自然災害により、台湾の地に居住する人々の独自の気風が培われたという。さらに、台湾の「社会構造」に関し、古くから台湾に「もっとも大きな影響を与えたのは大陸の中華民族[44]」であり、台湾は「漢民族の支流のひとつ[45]」であることも否めない事実だと葉は語る。しかしながら、地理的な条件（中国大陸と切り離された孤島）や歴史（外来政権による数度の植民地支配）などの諸要因が加わり、台湾社会は固有の独自性を醸成してきたと論述している。

> もしわれわれが台湾の社会や経済、文化、建築、絵画、音楽、伝説をつぶさに観察すれば、いたるところに、正統的な漢民族の文化とは異なる異国情調が潜んでいることを発見するだろう。すなわち台湾は孤立する状況にあって、一つのるつぼのなかに各エスニック・グループの文化が混じりあい、台湾独自の濃厚な郷土的な風格が築かれたのである。[46]

テーヌは「環境」の要素として、「気候」・「政治情勢」・「社会的諸状況」の三つを列挙しており[47]、一方で葉石濤は、「環境」にはその地域固有の「自然環境と社会構造」が含まれるべきだと考えているため、この点はほぼ一致し、テーヌの説が作用している痕跡がうかがえる。

第三の「時代」をみておこう。葉石濤は「時代」を「歴史」と表現する。葉は自身の代表作である『台湾文学史綱』の序文において、「文学は現実の環境に根ざすべきであり、歴史的記憶を忘れ去った文学作品は、どうしてあまねく人々の心の声を反映することができようか[48]」という問いを投げかけているが、彼が歴史を重要視するのは、台湾がたどってきた複雑な歴史に起因すると考えられる。

台湾の近現代史をふり返ると、度重なる外来政権によって統治された歴史だといえる。オランダ植民地時代（1624～1661）、鄭氏三代（1661～1683）、清朝の統治を経るが（1684 年に清国領・福建省台湾府となる）、清国が日清戦争に敗れると、1895 年に日本に割譲されることとなる。台湾の歴史はそのまま、台湾社会や文化、文学などさまざまな領域に刻印されており、それゆえに歴史を切り離しては語れぬと葉石濤は主張しているのだ。たとえば日本統治時代をとりあげ、台湾は日本を経由して欧米の近代文化や知識をも認識し、受容することとなったと指摘する[49]。

元来の漢民族文化を土台とする一方、文化が異なる台湾のエスニック・グループ

のめいめいの文化系統が融合し、さらには日本を主とし、欧米を副とする外来文化を吸収したため、台湾を主体とする独特な文化系譜が形成されていったのである。[50)]

葉は、台湾文化の独自性が育まれた要因として、「元来の漢民族」や各エスニック・グループの文化に加え、さらに外来政権の持ち込んだ文化をも主体的に受容したことを列挙している。再びテーヌの「時代」の概念についてみると、テーヌの説くそれは特定の支配概念の生成と消長の過程を強調しているのに対し、他方、葉石濤は台湾の歴史が内包する重層性だけでなく、歴史の副産物としての「異なる文化の融合」という点に台湾の多様性・雑多性を見いだしているのである。

まとめよう。本節では三大要素にまつわる葉石濤の論述を整理したが、葉はテーヌの文学概念の枠組みを用いて、台湾における「種族・風土・歴史」の実情と結びつけながら受容していることが読みとれるのである。葉によれば、台湾社会は、異なる母語と文化を有する先住民族、本省人や外省人といったさまざまな「種族（エスニック・グループ）」によって構成されているが、台湾の「風土（自然環境や社会構造）」は彼らの気質・性質を形作ってゆくうえで、軽視できぬ影響を与えてきたと指摘している。また、複雑な様相を呈す台湾の「歴史」背景のもとで、複数のエスニック・グループの文化が混ざり合い、さらに外来政権がもたらした文化の影響をも受けながら、かくして台湾固有の多元性が形成されていったと総括している。

以上、葉石濤のテーヌ理論の受容のありかたについて略述したが、葉はテーヌの説く三大法則をフレームワークとして援用し、おおむねテーヌと同じ方向性を志向していることが浮かび上がる。わけても「風土」の定義はテーヌの学説をほぼ踏襲しているといえよう。総じて、両者の言述にはきわめて大きな径庭は確認できなかったが、しかしながら、「種族」や「歴史」に関する解釈のように、違いがみられたものもある。先述したごとく、テーヌは「種族」間の先天的な差異に着目しているのに対し、葉はその点には言及しておらず、台湾の各エスニック・グループに存する相違（母語、文化等）の側面に光をあてている。また、「歴史」の項目では、テーヌは「特定の支配的な概念」の生成と消滅の反復、という視座に基づき論じているが、他方、葉は輻輳的な台湾の歴史がはらむ重層性に焦点を絞っているのである。

葉が「種族、風土、歴史」を求め、実践したことは、やがて 1977 年に提出した「台湾郷土文学」及び「台湾意識」の定義へとつながってゆく。葉の文学観の一部を占める台湾文学史観を考えるうえで、「台湾郷土文学」と「台湾意識」は重要なキーワード

といってよいだろう。前述したように、これらの定義はテーヌ理論のみならず、黄得時の文学史観からも少なからずの影響や感化を受けていたとされる。葉の文学観の全体像についての理解をさらに深めるために、次項ではこの問題を論じてゆく。

（二）黄得時の台湾文学史観から受けた影響

黄得時は、1934 年に台北帝国大学文学部東洋文学科を卒業し、記者、文学者、翻訳家であり、父・黄純青は台湾総督府評議員を務めた人物で、名高い漢詩人としても知られている。日本殖民地時代は、『台湾新民報』、『文芸台湾』、『台湾文学』などで編集者を歴任し、戦後は、台湾大学中文系で教鞭をとる[51]。すでにふれたように、黄得時は日本統治期において、台湾文学史に関する論文を 4 編発表しているが（本章第三節第二項参照）、戦後、葉石濤は「台湾的郷土文学」（『文星』第 97 期、1965 年 11 月）と題する評論文の中で、黄得時の台湾文学史研究について論じている。葉は、「テーヌ（Taine）の『英国文学史』という著書が、彼［黄得時――筆者注］に「台湾文学史序説」を著すきっかけを与えたのではないかと推測している。彼は文章の冒頭から郷土文学を形成する要因として、風土、種族、言語、歴史を例示している」からだという。そして、葉は後年、日本語で書かれていた黄得時の論文を翻訳することとなるが、黄得時に対する葉石濤の論評をみてみよう。

> 黄得時の 4 編の論文において、わけても重要なのは「台湾文学史序説」である。彼は、台湾文学の定義を三つの要素から定義づけできると考えていたが、すなわち、種族、歴史と風土である。この理論は、フランスの哲学者テーヌの著書『英国文学史』の序文に由来していると思われる。テーヌは殊に風土（環境）、言いかえれば自然環境と社会環境を重視していたが、一方、黄得時はテーヌの概念を受容したものの、おもに台湾を主体として論述していることが見てとれる。台湾の先住民族、外来政権の統治者、独自の自然やランドスケープなどといった、台湾文学に影響を与えうる重要な素因を軽視しない黄の知見はきわめて貴重なものといえるだろう。[52]

葉は、黄がテーヌの概念を援用する際、とりわけ「台湾を主体と」する論点に注目しているのである。さらに、葉は「台湾文学史序説」の特筆すべき特色として、黄得時が「台湾文学の範疇を規定した」ことをあげている。黄が提出した範疇とは、下記

の五項である。

① 作家は台湾出身であり、その文学活動（ここでは作品の発表及びその影響力をさし示す。以下同様）が台湾で行われている場合。
② 作家の出身地は台湾以外であるが、台湾で長く居住し、その文学活動も台湾においてなされている場合。
③ 作家の出身地は台湾以外であるが、一定の期間、台湾で文学活動を行った後、再び台湾を去った場合。
④ 作家の出身地は台湾であるが、その文学活動が台湾以外の地域で行われている場合。
⑤ 作家の出身地は台湾以外であり、かつ台湾を訪れたことはないが、台湾にまつわる作品を書き、台湾以外の地域で発表を行った場合。[53]

葉が指摘するように、黄得時はテーヌの三大法則を援用していることは明白であるが、しかし、台湾文学に関する五つの範疇は黄が打ち出したオリジナルの主張だといえる。葉石濤は、「この見方には異論もあろうが、だが、私たちは黄得時のグローバルで大局的な視点を感服せずにはいられない」と評している[54]。一方、葉は黄得時の台湾文学史観からどのような感化や影響を受けたといえるのだろうか。葉が提出した「台湾郷土文学」と「台湾意識」の定義に手がかりが伏在していると考えられるが、両者の定義をみておこう。

葉によれば、「台湾郷土文学」とは、「台湾人」すなわち、「台湾に居住する漢民族及び先住民族が書き記した文学」（下線部は筆者によるもの。本段落以下同じ）だと定義し、さらに、それは「台湾を中心とする」作品であるべきだという。むろん、前提として、「創作にかかわる題材や技法等は自由で制限されるべきではない」が、作品には「台湾意識」が内包されていることを「台湾郷土文学」の第一義とした[55]。では、「台湾意識」とは何か。葉は「台湾意識」を「台湾に居住する中国人に共有される経験」に基づく認識と定義する。いわゆる共有の経験とは、「自然と格闘し」、「植民地化によってもたらされ、抑圧された共同の経験」であり、また、「反帝国主義、反封建主義」を反映した意識だと説く[56]。

黄得時と葉石濤。かたや日本統治期、かたや戦後に台湾文学の定義を提出した二人の文学者だが、彼らの共通点はテーヌの三大原則を援引することにより、台湾文学の特色を導き出そうとしたことである。ここまでみてきたように、葉が、黄得時の台湾文学史観から影響を受けた部分があるとすれば、「台湾を主体」としつつ、「作者の出

身地と居住地」の範囲を画定する、という視座を継承したことではなかろうか。しかしながら、両者の言述には相違点もみられる。まず、黄は出身地や居住地を限定しないが、対し、葉は「台湾に居住すること」を必須条件としてあげており、さらには、「漢民族及び先住民族」のエスニック・グループにも言及しているのである。また、葉は台湾郷土文学の性格付けを施していくうえで、「台湾意識」をも含みこむことを主張している。

本節では、二つの論点から葉石濤の文学観の形成について整理した。二つの論点とは、テーヌ理論の受容のありかたと黄得時の台湾文学史観から受けた影響であるが、以上の論議を経て、次のように結論づけられる。第一に、受容の過程において、葉は三大法則の枠組みの中に台湾の「種族、風土、歴史」にまつわる事例をあてはめながら、論を展開していると考えられる。両者の論述には大きな隔たりは確認できないが、「種族」や「歴史」に関する項目では、葉は独自の解釈を加えていることから判断すれば、テーヌの概念を盲従的に受容したのではなく、変容をもしたうえで、みずからの文学観として再構築したといえる。第二に、葉は、台湾を主体に据えるという黄得時の観点を継承したと思われるが、黄が定めた台湾文学の範疇と比較すると、具体的には作者の出身地や居住地を制限するか否か、という点に双方の相異がみられたのである。

再度、葉が提出した「台湾郷土文学」と「台湾意識」の定義を見返すと、注目すべきは、その中に次の三点が必須要素として内含されていることである。①台湾に居住する各エスニック・グループ②自然との格闘③植民地化という共有の経験。これらはとりもなおさず、「種族、風土、歴史」という三大法則を包括しているため、テーヌの概念を色濃く反映した内容といえよう。葉が「種族、風土、歴史」を求めた先に、みずからの台湾文学史観としても結実させたのである。

小結

第二章以降の論議の理解に資するために、導入部分として本章を設け、それが第一章の役割である。本章ではおもに①葉石濤の経歴②小説作品の創作時期の区分及び作品数③葉石濤の文学観の形成、以上の三点について論じてきた。

まず、葉石濤の歩んだ人生の軌跡をたどると、言語転換や政治犯として投獄され、貧困にあえぐなど多くの困難に直面してきたことが浮かびあがる。台湾の歴史や政治情勢にみずからの人生を翻弄され、彼は身をもって生のはらむ不安定さと不条理性を

体験してきた、ということがいえるだろう。先走って述べてしまうと、次章で検討する小説作品『台湾男子簡阿淘』には作家の実体験が投影されている。

次いで、葉の小説創作活動の概略について整理したが、創作時期の区分及び作品数等を以下に記しておく。

〇日本統治期（1940 年～1945 年）：4 作

〇第一ピーク期（1946 年～1950 年）：15 作

※約１５年間筆を折る。

〇第二ピーク期（1965 年～1971 年）：39 作

※小説寡作期（1971 年～1986 年）：4 作

〇第三ピーク期（1987 年～2006 年）：88 作

作風に関し、第一ピーク期は耽美的な作風がみられる。第二ピーク期はブラックユーモア小説期と論じられてきたが、しかし、通観すると、さまざまに創作技法の試みを行っていたようである。第三ピーク期においては、台湾社会の民主化というファクターが加わったことにより、これまで明言することが困難であった題材をも取り扱うことができたため、創作空間の広がりがもたらされた時期といえよう。全期にわたり一貫する共通点は、作中、台湾の「種族、風土、歴史」にまつわる主題が繰り返し描出されていることである。

さらには、葉石濤の掲げる文学観の背景を明らかにするために、まず、テーヌが述べる文学作品を生み出す三大要素――「種族・環境・時代」の要点を概説し、また、明治日本や中国、植民地台湾におけるテーヌ理論の影響について整理した。影響や感化力の程度に違いはあるものの、文学史を構築するための方法論としての役割を有していたのではないか。次いで、従来、明確な説明がなされていない葉石濤の文学概念の受容のありかたを検討すると、ある特徴が浮かび上がる。葉は、テーヌが措定した三要素をみずからの文学観のフレームワークとして借用し、その枠組みの中に、台湾固有の「種族・風土・歴史」に即した諸様相や事象を引きあてながら、置き換える作業を行ったと考えられる。それが葉石濤におけるテーヌ理論の受容方法ではないか。一方、先述したごく、両者の論議には幾つかの相違点がみられたことに基づくと、葉はテーヌ理論を盲従的受容したのではなく、「認識―受容／変容」というプロセスを経た上で、みずからの文学観として再構築したといえるだろう。

さらには、葉石濤の文学観に対する理解を深めるために、作家の台湾文学史観について言及した。葉が提出した「台湾郷土文学」と「台湾意識」の定義を手がかりに検討すると、黄得時の論考から受けた具体的な影響は、「台湾を主体に論じること」と「台

湾文学の範疇の制定」、という観点を継承したことである。また、「台湾郷土文学」と「台湾意識」の定義には、三大法則が包摂されていることをも確認できた。葉が三要素に着目する理由は、台湾の独自性や多元性を考究しようとする作家の問題意識のあらわれだといえよう。本章での導入を経て、次章より小説作品の具体的な検討に入り、三原則という視座から実証的にテクストに関する分析を進めることとしたい。

【註】

（１） 葉石濤「不完美的旅程」『台湾新聞報』、1992 年 4 月 22 日

（２） 書房は当初、おもに読み書き能力（漢文書面語）の養成と科挙を受験するための準備教育を施していた。日本植民地時代には民間の識字機関として存続していたが、1943 年には私塾廃止令が発布された。詳しくは、洪郁如「読み書きと植民地：台湾の識字問題」『言語文化』49 巻、2012 年、75－93 頁を参照されたい。

（３） 葉石濤「説日語的那段童年生活」『中央日報』、1991 年 11 月 12 日

（４） 葉石濤「一個台湾老朽作家の幼・少年時代」『自立早報』、1989 年 10 月 18 日

（５） 葉石濤「『文芸台湾』及其周辺」『民衆日報』、1979 年 8 月 27 日～28 日

（６） 葉石濤「一個老朽台湾作家的五十年代――郷村教師」『民衆日報』、1990 年 4 月 19 日～20 日）

（７） 葉石濤「一個老朽台湾作家的告白」、彭瑞金編『葉石濤全集１０』、国立台湾文学館・高雄市政府文化局共同出版、2008 年、330－331 頁。

なお、本稿にて参照する、彭瑞金編『葉石濤全集』は全 23 巻刊行されているが、出版年等が異なるため、詳細を以下に記しておく。

○彭瑞金編『葉石濤全集１』～『葉石濤全集５』、高雄市政府文化局・国家台湾文学館籌備処、2006 年

○彭瑞金編『葉石濤全集６』～『葉石濤全集２０』、国立台湾文学館・高雄市政府文化局、2008 年

○彭瑞金編『葉石濤全集２１』～『葉石濤全集２３』、高雄市政府文化局、国立台湾文学館、2009 年

また、『葉石濤全集』第１～5 巻は小説作品、第６～12 巻は随筆作品、第 13～20 巻は評論作品、第 21～22 巻は翻訳作品、第 23 巻は翻訳作品及び参考資料が収録されている。

（８） 陳明柔「夢獣葉石濤」『台湾文学館通訊』第 5 期、2004 年、36 頁

（９）彭瑞金「食夢獣的文学旅程――葉石濤的小説創作」、前掲書『葉石濤全集１』、３８－39 頁

（１０）陳芳明著、下村作次郎・野間信幸・三木直大・垂水千恵・池上貞子訳『台湾新文学史』上巻、東方書店、2015 年、272 頁

（１１）陳顕庭「我対葉石濤作品的印象」『新生報』、1948 年 7 月 30 日

（１２）前掲文、彭瑞金「食夢獣的文学旅程――葉石濤的小説創作」、38－53 頁

（１３）前掲廖淑芳論文「空間語境与歴史暴力――論葉石濤 1965 後復出階段的鬼魅書写」、130～131 頁

（１４）毛利郁子「『こころ』における決定論と自由意志論――イッポリット・テーヌとポール・ブールジェとの関連で――」『九大日文』第 33 巻、2019 年、26 頁

（１５）テーヌ著、平岡昇訳『英國文學史』、創元社、1945 年。毛塚リリ子・毛塚喬介『英国文学史　古典主義時代』、白水社、1998 年。なお、瀬沼茂樹訳の著書『文学史の方法』には、『英国文学史』の「序論」のみを収録している。イポリイト・テエヌ著、瀬沼茂樹訳『文学史の方法』、岩波書店、1953 年（初版：1932 年）

（１６）前掲書『英國文學史』、25－26 頁

（１７）同上書、26 頁

（１８）同上書、27 頁

（１９）同上

（２０）同上書、28－31 頁

（２１）同上書、33 頁

（２２）根岸宗一郎「周作人におけるハント、テーヌの受容と文学観の形成」『日本中国学報』第四十九集、1997 年、212 頁

（２３）前掲毛利郁子論文、38 頁

（２４）前掲根岸宗一郎論文、209－210 頁

（２５）前掲書『英国文学史　古典主義時代』、480 頁

（２６）平岡昇『プロポⅠ』、白水社、1982 年、392 頁

（２７）同上

（２８）李昂「紛争的時代　葉石濤訪問記」、彭瑞金編『台湾現当代作家研究資料彙編　葉石濤』、国立台湾文学館、2011 年、202 頁

（２９）前掲書『プロポⅠ』、388 頁。また、夏目漱石は『文学評論』を著した際には『英国文学史』第三巻を参照したことは周知のとおりである。詳しくは、張芸「夏目漱石の「文学」という問い―東西文学の分離から新たな文学の創出へ―」『言語・地域文化研究』

第 23 号、2017 年、118 頁を参照されたい。

（３０）三上参次・高津鍬三郎『日本文学史』、日本図書センター、1982 年

（３１）笹沼暁俊「ドナルド・キーンと戦後日本――日本文学研究とアメリカの影」『文学研究論集』第 25 巻、2007 年、242－243 頁

（３２）前掲根岸宗一郎論文

（３３）林巾力「建構「台湾」文学――日治時期文学批評対泰納理論的挪用、改写及其意義」『台大文史哲学報』第八十三期、2015 年、12 頁

（３４）戴燕『文学史的権力』、北京大学出版社、2002 年、7 頁

（３５）前掲林巾力論文、13 頁。なお、本稿における、テーヌ理論が植民地台湾の文学界に与えた影響に関する論述内容のうち、とりわけ註（３５）、（３６）は林巾力論文の研究成果を踏まえながら、再考察を加えたものが多いのである。

（３６）同上 14－15 頁

（３７）黄得時「台湾文学史序説」『台湾文学』第 3 巻第 3 号、1943 年 7 月、3－4 頁

（３８）同上

（３９）葉石濤著、下村作次郎訳「台湾文学の多様性」、台湾文学論集刊行委員会編『台湾文学研究の現在』、緑蔭書房、1999 年、37 頁

（４０）同上、38 頁

（４１）同上、39 頁

（４２）同上

（４３）葉石濤「台湾郷土文学史導論」、前掲書『葉石濤全集１４』、11 頁。初出は『夏潮』二巻五期、1977 年

（４４）同上、12 頁

（４５）同上、13 頁

（４６）同上、12 頁

（４７）前掲書『英國文學史』29－31 頁。前掲根岸宗一郎論文、211 頁

（４８）葉石濤『台湾文学史綱』、文学界雑誌出版、1987 年、1 頁

（４９）葉石濤「台湾文学的困境」『首都早報』、1989 年、10 月 6 日

（５０）葉石濤「中国文学与台湾文学」『台湾時報』、1988 年 1 月 1 日

（５１）彭瑞金・藍建春・阮美慧・王鈺婷『台湾文学史小事典』国立台湾文学館、2014 年、154－155 頁。また、次の論文も参照した。張文薫「帝国アカデミーの知と 1940 年代台湾文学の成立―『台大文学』と「東洋学」を中心に―」『日本台湾学会報』第十四号、2012 年、108－121 頁

（５２）葉石濤「巨大的脚歩―黄得時未完成的《台湾文学史》」『台湾日報』、1998 年 9 月 17 日

（５３）葉石濤「台湾文学的多種族課題」『聯合報』、1997 年 12 月 24 日

（５４）前掲文「巨大的脚歩―黄得時未完成的《台湾文学史》」

（５５）前掲文「台湾郷土文学史導論」、13 頁。

（５６）同上、14－15 頁

第二章 『台湾男子簡阿淘』論

台湾では、第二次世界大戦終了後を「光復」とよぶ。「光復」は古くからある言葉で[1]、領土・統治権を回復するという意味であるが、敷衍すれば、「異民族統治の暗い時代から祖国統治の明るい時代へ戻った[2]」ことをさし示す。しかしながら、実情は反していた。1947 年に起きた「二・二八事件」では、本省人に対する残酷きわまりない、過剰な殺戮や粛清、鎮圧が行われた。それ以降も国民党政府一党独裁による強権政治の支配のもとで、「白色テロ時代」[3]とよばれる、不穏な期間が約 40 年以上に及んだ。

長らく、この時期に起きた出来事について明言することはタブー視され、台湾の言語空間で語られることは皆無に等しかった。このような時世のなかで、文学界においても創作や表現の許容度が極めて狭窄なものであったことは想像に難くない[4]。1987 年、戒厳令（1949 年施行）が解除され、民主化の動きと連動してようやく多くの記録書や回想録が刊行されるようになった[5]。

葉石濤の『台湾男子簡阿淘』は、まさしくこの年代に焦点を定めた作品であり、作中のエピソードの多くは作家自身の実体験にもとづいている。本小説は、二・二八事件や白色テロ時代にまつわる主人公の半生を前景化しているため、これまで、研究者の多くは政治的色彩を色濃く帯びる自伝的小説だと評してきた。主人公の簡阿淘はある日、突如逮捕されてしまうが、一介の小学校教員である彼は抗うすべもなく、国家権力の暴挙によってもたらされた受苦を負わされ、無力な存在として描かれている。ゆえに従来の先行研究において、主人公の直面する危機の性質はひとえに圧制政治に起因していると断じられてきた。

だが、小説世界内にさらに一歩踏み込んで目を凝らすと、その危機は異なる側面をも有しているといえまいか。すなわち、主体が瀕した危機や困難の本質を、生のはらむ「不条理性」によってとらえることもできるのではないかと考える。そして、この問いにアプローチするために、作中で叙述されている「喪失」に注目する。小説世界内で描出している喪失は二種あり、それらの具体的な内容について検討を加える。一連の喪失体験は主人公の人生に決定的な影響を及ぼし、かつ危機に陥れるが、人間は喪失とともに生きるよりほかないとしたら、何らかの方途を見いだすことは可能だろうか。さらに喪失だけでなく、投獄され、多くを失うこととなった主人公がたどる「再生」のプロセスは、本小説の主題のひとつであるにもかかわらず、従前、言及されていない。とりわけ、喪失を経たのちに遂げる自己回復の契機について考えてみたいと思う。以上のことを踏まえ、本研究では「喪失」と「再生」を手がかりとし、いささ

かなりとも『台湾男子簡阿淘』の新たな読みを促していくことを目的とする。

本章は四節から構成されている。第一節では本小説刊行時の台湾文学界の動向及び本作の先行研究等を概説する。第二節では第一の喪失体験、第三節では第二の喪失体験についての考察にあてる。第四節では前節の議論を引き継ぎながら、多くを失いつつも再生をたどる「個」の主体性について論ずることとする。以上の検討を経て、「個」の経験を描いた本小説と、台湾の現代史の一部である二・二八事件や白色テロ時代、すなわち台湾社会「全体」に共有される歴史、この両者の関連性についても検討することとしたい。

第一節　『台湾男子簡阿淘』の概要

本節では、まず『台湾男子簡阿淘』刊行時の台湾の文学思潮や本作の先行研究などを概観したうえで、本稿の視座設定について述べておきたい。

（一）戒厳令解除後の台湾文学界の動向

冒頭で述べたように、1987 年 7 月 15 日に戒厳令の解除が宣告され、台湾の歴史におけるさまざまな禁忌が解かれるなかで、歴史的記憶を再構築する文学作品が多く発刊された[6]。文学的営為を通し、台湾固有の歴史や文化の主体性に対する探求を展開するムーヴメントが起きたのである[7]。この潮流が起きた遠景には、どのような理由が考えられようか。戒厳令解除より以前、台湾社会を数十年も導いてきた主流の歴史記憶とは、国民党イデオロギー主導のもと中華文化の体現及び民族精神の発揚を主軸とした、いわば中華民族主義の大きな物語（grand narrative）によるものであった[8]。このことが素因のひとつとしてあげられる。

やがて、民主化の進展による台湾社会の言語・思想空間の拡張に伴い、周婉窈の表現を借りていえば、「埃に埋もれてしまった 3、40 年の歴史的記憶は、戒厳令解除の後、ついに伏流のように、出口を探し出して地面に湧き出た[9]」のである。そして、上述のごとく、文学界においても「歴史の現場」に再度回帰し、台湾人としてのアイデンティティや独自性をさぐる文芸思潮が生み出されていくこととなった。次項では本書の先行研究等についてみることとする。

（二）『台湾男子簡阿淘』の先行研究及び本章の視座設定

葉石濤は、かの二・二八事件や白色テロ時代について、「胸に迫るあまたの物語があり、それらはいまだ歴史の墓場に埋もれている。台湾文学において、この分野は未開拓の沃野」であるとし[10]、本論でとりあげる『台湾男子簡阿淘』執筆の構想を次のように述べている。少し長いが、引用しておこう。

> 戒厳令解除後には、二・二八事件や白色テロをテーマとする作品が多く刊行されているが、欠落している部分も少なからずあるように思われる。私は戦後の世相に目をむけるばかりでなく、かの暗黒な時代を生き、抗議した者たちの思想傾向や心理の深層に潜む恐怖、願い、悲しみをより明確に伝えたい。（中略）『台湾男子簡阿淘』では、戦後の出来事を断片的に取り上げるのではなく、時代の一連の流れを書き留めたい。（中略）それは同時に、台湾の若き一知識人の彷徨、葛藤から覚醒に至るまでの道程の記録でもある。（中略）むろん小説はフィクションであり、すべてが実話ではない。だが、主人公の簡阿淘がもがき苦しむ過程はすなわち私がもがき苦しんだ過程であり、彼は私自身を投射した人物だといってよい。作品中に描かれた簡阿淘の体験はすなわち私の実体験でもある[11]。

以上、作家自身が語った言葉を整理すると次の三点に集約することができる。
①歴史の表側に起きた事象だけでなく、登場人物らの精神面や思想面などの内面世界にも注視する。
②物語は二・二八事件から白色テロ時代に至るまでの流れに沿って時系列で進める。台湾戦後の一時代をより総括的に呈示する。
③みずからの実体験の一部を小説世界に投影、再現している。

つぎに、『台湾男子簡阿淘』に関する先行研究をみてみよう。たとえば、林玲玲は本書を回顧録に分類し、アイデンティティフィケーションという観点から論じている[12]。彭瑞金は、「極めて濃厚な政治性を持つ作品であると同時に、作中に書かれているのは台湾で生きる人々が共有すべき記憶[13]」だと述べている。彭瑞金と類似する見方として、張恆豪の論説があげられる。「創作の主眼は政治面に置かれており、歴史の観察者、時代の記録者としてのスタンスに立脚しながら、ポリティックな言説を深化[14]」して描かれた作品であると分析している。

また、陳芳明はつぎのような見解を示す。「葉石濤は一九八〇年以後、（中略）自己描出（self－representation）の方式を選択し、自伝的な文体の営みに力を尽くしてき

たが、そこには必然的に彼の追及する歴史的解釈と文化的アイデンティティが込められている[15]」。これらの先行研究が言明しているように、とりわけ自伝という叙述スタイル、歴史や政治面に材を取る作品として集約された見解が大多数である。

このようにやや定型的な読みをされてきた『台湾男子簡阿淘』だが、従来の諸説と一線を画しているのは、西田勝による論述である。西田は、トルストイの『復活』を引き合いに、簡阿淘の物語を「裁判小説」として位置づけたうえで、本小説の大きな特色について、斬新な切り口でつぎのように論を展開している。

> 日本の私小説の系統に属しながら、その取材が「私」の日常生活の範囲以外に出ない日本の伝統的な私小説（Ich Roman）を超えて、「私」の日常生活以外に及び、本格的な私小説（Ich Roman）を呈しているということです。つまり、小学校の（中略）教員としての日常が活写されているだけでなく、思わぬことから政治犯にさせられることによって、簡阿淘の政治的・社会的生活が問い直され、戦後台湾の白色テロ時代のさまざまな局面が見事に描き出され、その全貌に迫った作品となっている。[16]

西田のいう、「日本の私小説」と「本格的な私小説」にはどのような違いがあるのだろうか。「私小説」に関する小林秀雄の知見を補助線に用いて考えたい。安藤宏が述べるように、小林は「私小説論」[17]において、西洋近代文学の伝統と比較する形で、西洋と日本の私小説の概念を提示しているが、両者の大きな相違点として、「ルソーの『告白』（1770 年）以来、西洋近代文学の根幹をなしている社会と個人の対立が日本の私小説にはみられない」と指摘している[18]。また、本多遥は小林の論点を踏まえながら、日本の私小説の特徴をつぎのようにあげている。「作家としての「私」と作品内の「私」が密接に結びつき、作家の実生活を反映する[19]」のである。『台湾男子簡阿淘』は、作家自身の実体験を題材にする一方、一個人の枠組みにとどまらず、社会との相関性をも見いだすことができるため、西田は「日本の伝統的な私小説を超え」る、という解釈がなされたのであろう。「私小説」の視点から本作を理解する可能性を提示したことは重要な意味を持つといえるが、しかしながら、主人公の内面に関する言及がほぼみられないのである。

以上、『台湾男子簡阿淘』にまつわる先行研究をみてきたが、「政治」（国家権力）と「個」（主人公）の運命が重ね書きされており、両者は分かちがたく結び付けられている、という見解が大半を占める。また、独裁体制下における知識人・文化人の受難と

いう見取り図は、一面として正しいものであり、筆者はこれに異議を唱えるものではない。だがしかし、これらの見解には、つぎの二点が等閑視されていることを指摘しなければならないだろう。それは小説世界の基底をなす「喪失体験」の内奥について提起されておらず、また、多くの喪失を経てもなお生き延びてゆく「個」の主体性も論じられていない、ということである。

むろん、本小説は台湾の歴史的・社会的コンテクストから乖離したものではなく、むしろそれらは物語の背景として存する。しかしながら、これまでは国家権力と主体の関係性ばかりが嘱目されてきたきらいがあるのではないだろうか。本論ではひとたび従来の観点から離脱し、文中、叙述している主体固有の生の軌跡にみる「喪失」と「再生」について考察を行う。これらの検討を通して、不条理の生を生きざるを得ず、無力な存在とみなされてきた主人公の主体性を探ることを目標に論考を進めたい。

第二節　他者の「死」の意味するところ

本節では、まず作品の概要について整理し、つぎに本小説の幕開けであり、二・二八事件を背景に描くストーリーの梗概を述べてゆく。その際、単に事件を登場させるというのではなく、それをいかに描いたのか、わけてもこの点に留意しながら検討を行うこととする。

（一）本小説の構成

『台湾男子簡阿淘』[20]は全9編の短・中編小説により構成されており、タイトル及び初出はつぎのとおりである。

(1)「夜襲（夜襲）」（『新文化』第八期、1989年9月1日）
(2)「鋼琴和香肉（ピアノと狗肉）」（『自由時報』1989年4月22日）
(3)「紅鞋子（赤い靴）」（『自立晩報』1988年12月6日～19日）
(4)「牆（壁）」（『台湾時報』1989年1月14日）
(5)「鉄檻裏的慕情（鉄の檻のなかの慕情）」（『自立早報』1989年3月13日）
(6)「鹿窟哀歌（鹿窟に流れるエレジー）」）（『台湾時報』1989年3月20日）
(7)「吃猪皮的日子（豚の皮を食す日々）」（『台湾時報』1988年5月22日）
(8)「邂逅（邂逅）」（『自由時報』1989年7月2日）
(9)「約談（面談）」（『自立早報』1989年8月12日）

付録として、以下の 2 編が付け加えられている。

（10）「船過水無痕（船跡残すこともなく）」（『民衆日報』1989 年 9 月 18 日～20 日）

（11）「線民（密告者）」（『民衆日報』1989 年 7 月 18 日）

先述したごとく、本小説のバックグラウンドは二・二八事件及び白色テロ時代であり、物語時間は時系列に沿って漸進的に順行する。各編の主題を以下に記しておく。（1）は二・二八事件、（2）は中国本土からやってきた兵士たちとの交流、（3）は主人公・簡阿淘が政治犯として逮捕されるまでの顛末を記述する。（4）～（6）は獄中生活、そして（7）～（9）は阿淘が釈放され、出所後の日々を描く。なお、付録の 2 編、（10）「船過水無痕」と（11）「線民」は時代背景が同様ではあるものの、それぞれ独立したストーリーであり、簡阿淘の物語とは関連性をもたないため、本稿では言及しないこととする。次項でテクストの具体的な検討に入るが、冒頭で述べたように、小説世界内の「喪失体験」は二種類に大別できる。まずは、阿淘が臨む他者の「死」の場面――最初に描かれた喪失体験――についてみることとしたい。

（二）三つの死の場面――第一の喪失体験

物語世界の開幕は 1947 年に起きた二・二八事件である。事件の経過を整理すると、つぎのように説明できる。二・二八事件が起きた背景として、作中で、「光復後、民たちの生活は成り立たず、インフレで急増した失業者は街角にあふれ、首吊り自殺は日常茶飯事となった[21]」と叙述しているように、1945 年、接収された台湾では、国民党政権（台湾省行政長官公署）の官僚の貪官汚吏ぶりが横行していた。さらに、無策な施政により治安と経済状況の悪化に拍車をかけ、失業者の急増、食料危機の発生やインフレなどの問題を招く。そのため、社会の混乱や人々の不満は深刻化をたどる一途であった[22]。

二・二八事件は、1947 年 2 月 27 日、台北の闇市の煙草売りの寡婦が専売局の取締官に殴打され、負傷、それに抗議した民衆に対し、取締官が威嚇発砲し、市民の一人が死亡したことに端を発する。翌 28 日、行政長官公署の広場にデモ隊が集まり、軍はデモ隊に発砲、これをきっかけに、本省人による外省人への抗議活動や襲撃等が台湾全島に波及した。事態収拾のため、3 月 8 日には大陸から援軍が派遣され、徹底した弾圧が行われ、この約一週間の武力掃討の過程では、無差別の虐殺や誤殺が繰り広げられた[23]。

小説世界内では、二・二八事件をどのように描いているのだろうか。注目に値すべ

きは、事件に起因する四人の「死」の場面にフォーカシングして叙述していることである。そして、いずれも主人公・阿淘はその場に居合わせており、みずから四者の死を目撃しているのだ。

物語の舞台は台南であり、最初に二人の死が述べられているが、とりわけ、翁家の長男で台湾大学の医学生である徳銘のいまわの時がクローズアップして描かれている。翁家は、台南で代々名士を輩出している旧家であるにもかかわらず、徳銘の葬儀はひっそりと秘密裏に執り行われた。台北で起きた二・二八事件を知った台南の人々もざわついていた。正義感に燃えた総勢16名のメンバーが結成され、翁徳銘と簡阿淘もその中に加わっていた。仲間のうちで阿淘が顔見知りなのはリーダーの邱玉晨、翁徳銘や看護婦の葉秀菊の三人だけである。彼らの当初の目的は武力行使をせずに、邱が談判して軍隊所有の武器を譲渡してもらうことであった。しかし、作戦はあっけなく失敗に終わる。深夜にリーダーの邱玉晨に率いられ、広東省からやってきた兵隊の駐屯地に向かう途中[24]、奇襲にあってしまったからだ。邱玉晨と翁徳銘はその命を落とし、名前すらも知らぬ他のメンバーたちが一目散に逃げだすなかで、暗闇に身を潜める阿淘と葉秀菊は、流れ弾にあたり、出血が止まらない翁徳銘が息を引き取る最後の瞬間を看取る。

> あたり一面漆黒の闇に覆われ、荒涼としたサトウキビ畑の中で、彼［阿淘――筆者注］と葉秀菊の二人はなきがらを撫でながら慟哭せずにはいられなかった。ちぎれんばかりに溢れる悲しみは行き場がなく、目の前に迫る危険すらも忘れてしまうほどであった。ようやく、葉秀菊がきっぱりと言った。「今は悲しんでいる場合じゃない。何としてでも遺体を台南の翁家に送り届けなきゃいけないわ。そうしないと被害にあうのは亡くなった人だけでなく、彼の家族や私たちみなに累が及んでしまう。」[25]

翁徳銘の遺体を運ぶリアカーを貸してくれたのは、以前、邱玉晨から紹介され、面識がある虎崎郷の郷長の林貴男であった。だが、彼もまた連座させられ、罪状不明のまま公開処刑されてしまう。第二の死の場面は次のように述べられている。

> 彼［林貴男――筆者注］の顔色は蒼く、憔悴しきっていた。でも、力強さが漲っていた瞳はまばたきもせず、遠くの紺碧の空をずっと見つめて続けていたのだ。まるで、はるか彼方には解き明かせぬ自由と幸せの謎が隠されているかのように。

意外にも、死刑の執行を宣告するような大げさで悲劇的な儀式はなく、ひっそりと静まりかえったなかで、銃殺刑はいともあっさりと執り行われた。（中略）やにわに、右側にいた兵士がいつの間にか抜いたピストルを林貴男の後頭部にあてながら引き金をひいた。たて続けに三回の発砲音が聞こえ、林貴男の体は前方へと崩れ落ち、鮮血はあたり一面の芝生を染めた。[26]

第三の死の場面は、犠牲となった実在人物である弁護士の湯徳章が描かれている。湯徳章は、1907 年に日本人警官と台湾人女性の間で生まれ、中央大学を卒業後、台南に戻り弁護士を開業する。名士として活躍していたが、二・二八事件では一夜の拷問と市中引き回しされた後、公開処刑され、死体の収容も禁じられた。処刑のとき、湯徳章は兵士の命令を拒んで跪くことなく、直立して微笑みを浮かべ、毅然として死を遂げたといわれる。それから相当の日時を経て、台湾高等裁判所の無罪判決が届いた。[27]

簡阿淘は自分の目でしかと見た。台南の大正公園で、あの容貌魁偉な湯徳章弁護士が処刑されたところを。その血痕はいつまでも大正公園のセメントの地面に残り、水で洗い流すことはできなかった。[28]

以上、四人の「死」を取りあげてきたが、不本意に命を絶たれた登場人物たちは史実と同じく、台湾社会における良質な人材やエリート層である。失われたのは人命ばかりではない。彼らの死が台湾社会にとっても大きな損失を意味することは論をまたない。加えて、奇襲に遭ったがために絶命した邱玉晨と翁徳章をはじめ、「罪状不明のまま公開処刑されてしまった」林貴男、処刑後に「無罪判決」が届いた湯徳章、彼らの死の描写にはある種の不条理性が付随するばかりでなく、「なぜ命を落とさなければならないのか」、という疑問をも投げかけられているのではないか。

こうして、簡阿淘は同志の邱玉晨や翁徳銘、林貴男ら近しい人の「死」を間近で体験し、また、地元・台南の名士である人物の命が絶たれる現場にも居あわせてしまう。すなわち、他者の死という「喪失」を味わうこととなる。これが小説世界で叙述される阿淘の第一の喪失体験だと考える。彼の「喪失」をどのように解釈できるのだろうか。この問いを理解するために、精神分析の創始者ジークムント・フロイトの概念を紹介したい。フロイトは、喪失によって引き起こされる心の痛みとして、「悲哀」と「メランコリー」をあげているが、前者は失われたものを意識できるのに対し、後者は異

なると述べている[29]。

> 一連の症例で、メランコリーも愛する対象の喪失にたいする反応であることが明らかである。他の誘因についてみると、この喪失ということはもっと観念的な性質のものであることが分かる。（中略）また他の症例では、なにかこのような喪失のあったのはたしかに想定できるはずなのだが、何が失われたのかがはっきり分からない。（中略）というのは、患者は誰を失ったかは知っているが、その人について何を失ったかを知らないのである[30]。

メランコリーの誘因として、「死別（現実に死ぬ喪失）」や「別離（観念的な性質の喪失）」などによって愛する対象を喪失した場合が挙げられているが、喪失対象についてはっきり自覚できない場合もあるという。さらには、たとえ喪失対象を自覚できていても、それによって自分が何を失ったのか分からない場合もあるのだと続く[31]。大井奈美によれば、メランコリーの中核とは、「それまで続いてきた関係性の喪失による後悔や無力感にとどまらず、自己否定感まで生じさせてしまう」ことだと指摘している[32]。

四人の死をまのあたりにした阿淘は平然としていられようか。おそらく彼の内面に何らかの揺れは生じていたはずであろう。しかしながら、たて続けに（近しい間柄も含めた）他者の死という喪失を体験したにもかかわらず、文中、みずからの心情を吐露し、あるいは感情をあらわにする叙述はほぼ見あたらない。唯一、一人目の死者・翁徳銘の末期に際し、「慟哭」、「ちぎれんばかりに溢れるかなしみ」という記述のみをみることができる。では、なぜ阿淘の内面に関する描写がないのだろうか。

考えてみるに、二・二八事件という非常事態のさなか、僅か数日の間に複数の他者の死に直面し、その事実を冷静に受け止めるほどの思考力、精神力を保持することは不可能に近いものと思われる。だとすれば、阿淘の場合、喪失対象――「誰を失ったかは知っている」ものの、「その人について何を失ったかを」十全に理解していないのではないか。逆説的ではあるが、阿淘自身ですらも捉えることができないような、得体の知れぬかなしみを表現するために、あえて彼の内なる感情を文字化・言語化することなく、空白部分を生み出したと推察するのである。また、この「空白」は、阿淘が受けた衝撃や喪失感の大きさを暗喩するために存在しているのではあるまいか。

さらに、二・二八事件に関する主たる語りの内容は「阿淘が臨む他者の死」であるが、阿淘は事件の目撃者としての役割を担っているものの語り手ではない、という点

にも留意しておきたい。なぜ彼は語り手として選択されていないのだろうか。死の場面を述べる際、物語論（narratology）でいう「焦点化ゼロ」というパースペクティヴが用いられている。ジェラール・ジュネットの定義によると、「焦点化ゼロ」とは「いかなる制限的な視点も採用せず（絞りを解放の状態にする）、「神の視点」あるいは「全知の語り手」により語られる視点[33]」をさし示す。小説世界では、目撃した当人（阿淘）に語らせるのでなく、全体を俯瞰する全知視点で、他者の死という事実や物事の継起の報告を前提に述べている。そうすることによって、目撃者の主観や感情が入り混じることなく、記述内容の客観性を高める効果をもたらすと考えられる。

本節では、二・二八事件を背景にした物語についてみてきたが、文中、とりわけ阿淘が目撃した四者のいまわの時――生の断固たる停止――の描写に比重が大きく傾斜していることが明らかとなった。これを阿淘が面した第一の喪失体験と考える。他方、喪失感に襲われたであろう彼の思いには触れておらず、感情面に関する描写も皆無に等しい。それはなぜか。フロイトの説く「メランコリー」の概念を援用しながら検討すると、主人公みずからも明確に認識することのできないかなしみや虚無感、絶望感などといった負の感情にさいなまれている状態を表すため、彼の内側についての叙述を保留したのではないかと推論した。

実際のところ、事件後、無差別の虐殺と粛清に怯えた台湾社会は、極度の恐怖の闇に覆いつくされた。1949 年に戒厳令が実施され、1950 年以降、厳しい住民監視体制の下、国民党政府は共産党スパイの取り締まりを行い、白色テロ時代が到来する[34]。阿淘も時代の荒波に翻弄されることとなるが、一介の市民にすぎない彼がなぜ政治犯として逮捕され、囚われの身となってしまうのか。また、それにより人生がどのように変容していくのか。次節ではこれらについて検討し、つぎなる喪失の相貌を明らかにできるよう試みたい。

第三節　無力な存在

国民党政府の強権政治のもとで、二・二八事件に続く災厄――白色テロの嵐が吹きすさぶ時代が到来し、簡阿淘はより多くを失うこととなる。本節では、小学校教師を勤め、平凡な日常を送っていた主人公が投獄されるまでのいきさつや獄中生活などを通し、小説世界に記されている第二の喪失体験について論じてゆく。

（一）　突然の逮捕と獄中生活

いったい、阿淘はどのような罪で逮捕されてしまったのだろうか。事の顛末はこうであった。光復間もないころ、阿淘はかつての同級生、許尚智に上海で出版された一冊の雑誌を手渡される。日本語教育をうけた世代の阿淘たちにとって、いつまでも「かつての統治者の言語で文章を書くのは台湾人として恥ずべきことであり、魯迅のような口語文で文学創作に勤しむ[35]」ことを目標として、中国語の習得に懸命に取り組んでいた。ある時、阿淘は許尚智から中国本土で刊行されている書籍を取り扱う「阿才老頭（阿才おじさん）」を紹介される。

阿才老頭は、戦時中から反政府的な活動家で、総督府のブラックリストに載っていた人物である。中国へ亡命し、「大陸から戻ってきた後は、流暢な北京語が話せるようになっただけでなく、なんでも多くの書物をかなり勉強した[36]」そうだ。その阿才老頭の家には偽名を使う紳士や小学校教師、大工など様々な職業の人々が出入りしていた。阿淘はそこで中国で出版された数冊の雑誌を手に入れ、台湾を再解放する話などを耳にするが、数回、阿才老頭の家に出入りしただけで、それ以上交流を深めることはなかった。

それから六年あまりの歳月が流れ、1951 年の秋のある日、阿淘はイギリス映画「紅鞋子（赤い靴）」を観るが、ヒロインのプリマバレリーナは芸術と恋愛の間で揺れ動き、苦しみの果てに赤いバレエシューズを履いて投身自殺するという悲劇的な結末を迎える[37]。観終えた阿淘は深い感動の余韻に浸りながら帰宅すると、夜更けに突然逮捕されてしまう。そして、言い渡された罪名は「知匪不報（スパイと知りながら通報しなかったこと）」であり、かつて知り合った阿才老頭たちは台湾共産党の一派だと告げられる。面識があるとはいえ、数冊の書籍を購入したにすぎず、特段深い付き合いはないと必死に無実を訴えても聞き入れてもらえない。阿淘は「まるで千斤ある重い鉛の塊で押しつぶされそうになり、立っていられないほど[38]」の絶望感で打ちのめされてしまうのだった。

五年の実刑判決を受け、過酷な獄中生活が待っていた。「簡阿淘はこの便器で用を足すだけでなく、便器から絶え間なく漏れている水で洗顔や入浴、歯磨き、うがいを済ませていた[39]」。また、あるときは新たな収監場所に移送すると聞かされ、阿淘はほかの囚人たちとともに連れ出され、レンガ壁の前にうずくまるよう命じられる。背後には銃を構える兵士たちが立っていた。

不吉な予感が脳裏をよぎり、簡阿淘はぶるぶると震えだした。彼は弾丸の痕が残

っている赤レンガの壁をまのあたりにし、たちまち死が間近に迫っていることを悟った。「やつらは［特務警察――筆者注］ここで俺たちを銃殺しようとしているんだろう。きっとそうに違いない。さもなければ、この銃弾の痕をどう説明するんだ」。（中略）悲壮感を抱きつつ彼が勇敢にも頭をあげたそのときに、内容がはっきりと聞き取れない号令が発せられた。（中略）すると、引き金を引く音が部屋中にこだまし、その後は静けさに包まれた。同じことが何度も繰り返され、その間彼らはずっと床に伏せたままであった。ついに弾が飛んでくることもなく、政治犯たちは命拾いをした。「ちくしょう、人でなしの野郎どもめ！こんなにも残虐なまねをしやがって！俺たちはもてあそばれていたんだ。」[40]

劣悪な環境のもとで囚人たちは人間以下の扱いを受ける。それは死よりも生きる方が楽とはいいがたい日々であり、多くの屈辱を耐え忍びながらの生であった。このような境遇のなかで生きる主人公の人物像について、陳芳明は次のような見解を提示する。

蒼茫たる歴史の水域で、簡阿淘は一度たりとも英雄を演じることはなかった。それどころか、葉石濤の歴史小説において、毅然としている人格が出現したことはない。だからこそ、物語はより歴史の真実に迫っている。「アンチヒーロー」言説に基づき描かれた登場人物は、決定的な行動力を持たない理想主義者でもある。[41]

陳の指摘は的確だといえる。暴虐な国家権力に対し、無抵抗な一市民にすぎない阿淘に何ができるというのだろうか。作中では苦難を負わされ、みずからの非力を嘆くことしかできぬ存在として描かれている。そして物語世界の進行もまた、この「無力さ」によって牽引されているのだ。強権政治を前になすすべもない阿淘は逮捕されることにより、自由を剥奪され、家族との別離、不衛生な環境、飢え、愚弄、暴力、屈辱など、みずからの日常生活や社会の一員としての営みはおろか、およそ人間としての尊厳の一切を奪われてしまうのだった。これらにより、いったいぜんたい彼は何を失ってしまったのだろうか。次項ではこの問いについて考えてみたいと思う。

（二）つぎなる喪失

現にみてきたように、第一の喪失は、他者の死の場面がクローズアップして描写されており、漠然とした名状しがたい「かなしみ」が小説世界の内部に浮遊しているようであった。それに対し、本節で検討している喪失は、阿淘の人生を襲う数々の危機や困難の場面に焦点をあてているが、一連の受難はまぎれもなく人生の土台を揺り動かすものである。のみならずして、阿淘は自己の喪失・分裂、すなわちアイデンティティクライシスに陥ることとなったのではないか。窪寺俊之の表現を借りていえば、「個人的孤独感というような感傷的なものではなく、自分の全存在が社会もろとも崩れて、自分の存在が消えてしまいそうな[42]」心境を抱いたものと思われる。

周知のとおり、アイデンティティは自我同一性、自己定義、存在証明と言いかえることができ、岡本祐子はその定義をつぎのように述べている。

> 「自分であること」、「真の自分」などの意味をもち、他者のなかで自分が独立の存在であることを認めると同時に、過去から現在、未来に至る時間の流れのなかで一貫した自分らしさの感覚を維持できる状態を示す。[43]

しかしながら、たとえば青年期に獲得されたアイデンティティがそのまま後の人生を通じて永続的に保たれるわけではなく、人生にはアイデンティティが揺らぐ時期がいくつか存在することも指摘している[44]。

再び小説世界に注目すると、逮捕により、阿淘の人生は非常にきびしい局面をむかえてしまう。これまでの人生が破綻し、そのうえ、人間を人間とも思わない扱いを受けながら、ただひとり立ちすくむような苦渋に満ちた状況のなかで、はたして彼は「一貫した自分らしさの感覚を維持」できようか。多くを奪われたあげく、肉体こそ残っているものの、自己の中核をなすアイデンティティを失う危機を招くこととなったのではないだろうか。これを阿淘に訪れた第二の喪失体験と考えるのである。

さらには、本章の冒頭の言を繰り返すなら、従来、阿淘の身に降りかかったあまたの苦難と災厄は圧制政治の暴挙に起因すると断じられてきたが、他方、「不条理性」という見地からも解釈できるのではないかと筆者は考える。不条理とは「道理に反すること、不合理なこと、背理」であるが、戦争、テロ、疫病、事故、自然災害などにみるように、われわれの住む世界は実に不条理だといえよう。あるいは、「生老病死」という仏教用語が示すごとく、人間の存在そのものが不条理性に満ちているとみなせるのではないだろうか。

「生老病死」とは生苦、老苦、病苦、死苦をさし、「四苦」とも呼ばれる人間の四種

の苦しみである。ただし、浜渦辰二が指摘しているように、「苦」という語の意味に注意しなければならない。「苦」はもともとサンスクリット語の「duhkha」の訳語であり、単に「苦しみ」や「苦痛」という狭量な解釈ではなく、本質的には「思うようにならない苦しみ」、「思うようにならないこと」という意も含まれているのだ。また、「できれば避けたいが、避けようとしても避けられない」ありさまをも示すと述べている[45]。「生も苦であり、老いも苦であり、病も苦であり、死も苦である」とブッダが説くように、人間の条件とは、苦に満ちた現実にすみからすみまで支配されており[46]、そのうえ、それらは不可避であるとされる。「四苦」は、人間の生を取りまく不条理性を露呈する概念のひとつといってよいだろう。

それでは、小説世界内の主人公の身に及んだ不条理とはいかなるものか。まず、彼が直面したのはいわれなき罪を問われ、投獄されたということである。その結果、社会面や環境面、身体面にとどまらず、精神面の喪失――みずからを失う体験をもたらされたと考えられる。だが、次から次へと降りかかってくる不幸に対し、彼は全くもって抗うことができずにいるため、主体の受苦には、「避けようのないもの、逃れようのない生の苦しみ」という不可避性が表出しており、さらには、生のはらむ不条理性を浮き彫りにしているといえよう。

以上、政治犯として逮捕・投獄された主体に襲う危機や困難をはじめとする、作中にみる第二の喪失体験の内容について整理した。第二の喪失は、自己の全存在が瓦解するかのような体験だといえよう。加えて、主体固有の生の軌跡を特徴づけるものとして、圧政の被害者という側面のほかに、「不条理性」を帯びていることが読みとれる。刑期を終え、釈放後もいばらの道は続く。だが、阿淘は与えられた生を生きるよりほかはなく、いかんともしがたいところで生きていかざるをえない。多くを失ったみずからの人生を再建することは可能だろうか。本節の議論を引き継ぎながら、次節では再生の過程について考察する。

第四節　再生の道のり

前節において述べたとおり、逮捕によりもたらされた喪失体験は、主人公の人生に決定的な影響を与え、危機的な状況に陥れてしまうが、彼は不条理を受け入れつつ生きながらえてゆく。この先、彼はいかにして喪失とともに生き、自己を回復していくのだろうか。以下では、回復の契機や個の主体性について検討することとしたい。

（一）回復の契機

5 年の刑期を終え、出獄直後、阿淘を取りまく状況はどのようなものであったか。

> 五十年代は閉塞かつ恐怖にみちた社会である。簡阿淘のような軍人監獄［政治犯専用の監獄の呼び名――筆者注］から戻ってきた者には残酷そのものだった。台南は彼が生まれ育った故郷なので、知人友人も多くおり、誰もが阿淘のことをよく知っていた。しかし、彼が帰ってきた頃から、街中を歩いていても、あたかも無人地帯に足を踏み入れたように、知り合いは全て消え去ってしまった。（中略）彼を見かけると、まるで幽霊を見たかのように慌てて顔をそむけて路地に入っていく人。また、ある人たちはじっと彼を直視しながらも、一言も発せず、そのそばを通り過ぎていくのだった。[47]

元政治犯の烙印を押され、郷里の人々からは疫病神のように敬遠される。かつては小学校教員の阿淘であったが、再就職はままならず、ようやくありつけた仕事は雑用をこなす臨時採用の用務員である。「ここまで落ちぶれたら、もはや他人に踏みつけられる[48]」ながら生きるよりほかないと考える彼の苦しみと疎外感はやり場がなく、周囲の保身的な利己主義の冷たさが胸に突き刺さる。この世界に存在する言葉では言い尽くせぬほどのかなしみや憤りを抱えながら、自堕落な日々をやり過ごす阿淘は、酒をあおることでしか鬱憤をはらすほかなかった。「私はいつも酔いつぶれるまで飲んでいた[49]」。傷つき、生きる目的をも失い、自己否定をする阿淘の姿である。

ある晩、屋台で家業を手伝うかつての教え子と偶然再会する。阿淘が投獄された時に危険を顧みず、クラスからカンパを集め、生活用品を送ってくれた教え子であった。彼女は、今の自堕落な生活から抜け出すよう力説し、その励ましは、人生の暗い隘路をとぼとぼと独行する阿淘にとって一筋の光明となる。

> 「先生、うちの父さんが言っていたけど、先生はお酒を飲みすぎです。それに、今の仕事は先生の身分にあっていません。このまま続けるのではなく、何か他の道を探すべきです。」秋霞［教え子の名前――筆者注］は静かに話しながらも、その口ぶりはきっぱりとしていた。（中略）先生は上を目指さないと。今のまま落ちぶれていくべきではないでしょう。」私は涙で目の前がぼやけ、おぼろげな下弦月を見つめていた。ずっと何も言い出せぬままでいたが、秋霞と別れた後、迷わず

前に向かい歩き続けた。翌日、私は用務員の仕事を辞めた。[50]

阿淘自身さえも解せない罪状で投獄されたにもかかわらず、刑期を終えた後も、彼の苦難は終わるどころか、新たな試練が立ちはだかり、再び奈落の底へと突き落とされることとなる。だが、かつての教え子との再会により、みずからの現状を変えようと思い至る。「迷わず前に向かい歩き続けた」という一文は、負のスパイラルから抜け出そうとする、主人公の決意を語っていよう。こうして、阿淘は自暴自棄な生活にピリオドを打ち、かすかな光に導かれるかのように、新たな一歩を踏み出していく。では、阿淘はいかにしてその契機を獲得することができたのか。この問題を考えるに際し、つぎの論考が大きな示唆を与えてくれる。

前出の大井奈美は、フロイトが説く「喪失の苦難の本質は意味の喪失」という定義を踏まえつつ、喪失体験からの回復の契機となるのは、「過去の意味を反転させて新たな意味を創出・構成していく」ことであると指摘する[51]。すなわち、苦難や挫折など、一見否定的な体験や出来事であったとしても、主体自身が「新たな意味」を付与し、再定義を行うことで、それは単なる苦難ではなくなり、意味ある苦難となりうるのである[52]。さらにいえば、大井は「その力は自分にしかないと知ること」だと述べている。他方、これは意味回復が自力のみで達成されることを必ずしも意味しない。たとえば、喪失の絶望にある時、共に泣いてくれるような助け人に恵まれ、その結果、少しずつ意味への意志を回復し、行動できるようになることもあるかもしれない。そのうえで、「喪失の苦難の意味や価値は何度でも新たに反転されうるし、最も無駄と思えるような絶望的な結果が、それなくしてはありえなかった共同体性をもたらす連帯の源に変わることさえある」と分析している[53]。

ひるがえって小説世界をみるに、かつての教え子との再会や彼女から受けた励ましは、阿淘の再生を促した契機の一因だと考えられるが、しかし、新たな一歩を踏み出す行動は、他者ではなく、あくまでも阿淘自身の意思決定によるものにほかならない。また、この行動は主体性に基づくばかりでなく、みずからの再生を促す原動力ともなるため、彼の苦難に「新たな意味」が上書きされるといえるのではないか。

すでにふれたように、主人公は投獄され、出所した後も喪失とともに与えられた生を生きざるを得ない局面にいる。仮に不条理の生を生きる主体の人生に自由が入り込む余地があるとしたら、それは、みずからの喪失の苦難に異なる価値を与え、「新たな意味を創出・構成していく」ことではなかろうか。なぜなら、この行為は、主体自身の意志や選択に依拠するものであるからだ。喪失の苦難そのものを十全に是認できな

いにせよ、己の能動的な意志によりその意味を変容させ、再定義することで、たとえわずかながらでも、苦難に肯定の光を照射することができるのではないかと考えられよう。

（二）雨に負けつつ風に負けつつ生きてゐる柔らかき草人を坐らす[54]

その後、阿淘は小学校教師の採用試験を受け、必死に人生を建てなおし、家庭を持つことができた。二十年ほど時が流れ（1970 年代）、以前ともに政治犯として服役した友人が再度逮捕されたと聞き、その家族を心配した阿淘は様子を見にゆく。ところが、親切心から出たこの行動は再び災難を招いてしまう。特務警察たちは相変わらず監視の目を光らせていたため、阿淘は「警備総司令部」に出頭を命じられる。尋問官を見た時、「やつは太っていて、まるで布袋様のよう。足は短く、歩く姿はボールが転がっているみたいだ[55]」と、阿淘は嫌悪感や皮肉をこめ、尋問官をデフォルメして描写している。

特務警察たちから身体的暴力を受けるなど、屈辱的な事情聴取であった。ようやく無実であることが判明し、阿淘は釈放される運びとなる。

> 尋問の部屋から出ようとした時、布袋様は満面の笑みを浮かべ、恭しく、再三にわたって阿淘に言った。「もしも尋問の内容に関して何か言い忘れたことがあれば、すぐ戻ってきて教えてくれたまえ。いつでもお待ちしていますよ。」これを聞いた簡阿淘は、あきれ果ててしまい、布袋様は頭がいかれているのではないかと思った。彼はさっさと外へ出ていき、チラッと時計を見たら、ちょうど十一時半だった。今から勤務先の小学校へ戻れば、まだお昼に間に合う。[56]

このような不愉快で苦痛な思いを強いられ、阿淘の心中はいかばかりか。それでも、いささかのためらいを見せることなく、素早く気持ちを切りかえてゆく。現在の職場に急いで戻ろうとする様子からは、釈放された安堵感の表れというよりも、「今」を生きる主人公の静かな強さが滲み出ており、苦難に鍛えられ、何事にも執着しない潔さが彼の内側に備わっている。これまで、数多の喪失に直面してきたが、人生の隙間に自己決定権や主体性を持たせる意思表明だとも捉えられよう。憎悪ではなく、理性を力として。

本節では、二つの時期――出所後と 1970 年代――に分け、主人公がたどる再生の

過程を具体的にみてきた。ここでいう「再生」とは、主人公は投獄により多くを失った挙句、みずからの人生が危機的な局面に陥ってしまったことに加え、釈放後もなお困難に見舞われ、喪失とともに生きていかざるを得ない、という状況からの再生を意味する。彼の回復の契機として、主体自身の意思決定と他者の助けが再生を可能にした源だと考えられる。また、フロイトの定義した「喪失体験の本質は意味の喪失」という概念を参照したが、喪失の苦難そのものを肯定できずとも、主体みずからが新たな意味を創出・付与することにより、苦難の意味や価値を変容させることは可能であろう。こうした行為こそが、ままならぬ生を生きる主体が持ちうる自由であり、主体性のあらわれではないだろうか。与えられた生を自分の生として受け入れ、誠実に生を紡ぐ主体の姿には、粘り強く生き延びてゆこうとする人間の持つレジリエンス（resilience）[57]を垣間みることができよう。

第五節　「個」と「全体」が連結する物語

以上、『台湾男子簡阿淘』で述べられている「喪失体験」と、主人公がたどる「再生」の過程を中心に論じてきた。これまでの論議を振り返りながら、本章を閉じる前に、台湾の現代史の一部――二・二八事件と白色テロ時代――を描いた本小説と、テーヌ理論及び葉石濤の文学観との関連性についてみておこう。また、そのスタンドポイントから検討した際、本テクストの特殊性をどのようにとらえることができるのだろうか。

前述したごとく、『台湾男子簡阿淘』をみるに、作家は歴史を描く方法として、作家の個人的体験を物語の下地とし、自伝的小説という叙述スタイルをとりながら、台湾の現代史を描出したのである（あるいは、戒厳令解除以前は語ることのできなかった自身の記憶を掘り起こしつつ語り直した、と表現した方が適切といえよう）。小説世界の後景には二・二八事件や白色テロ時代という台湾の史実が存しており、主人公・簡阿淘の固有の生の軌跡が物語の骨格をなしている。

では、『台湾男子簡阿淘』において、三大要素や葉の文学観を読み取れるかどうか、この点について具体的にみてみよう。繰り返しとなるが、テーヌは文学作品を生み出す「三個の本源的な力」として「種族、環境、時代」を列挙しているが、彼が主張する「時代」の概念とは、「ある時点における文化の所産が次の時点における所産の継承された影響を与える」ことに主眼を置いているのである。照らし合わせると、「時代」の概念は、必ずしもテクスト内の歴史の描き方に作用しているとはいえないだろう。

むしろ、テーヌが規定した「環境」に関する定義、すなわち、「気候、政治情勢や社会的諸状況」という内容が合致すると考えられる。作中には、二・二八事件と白色テロ時代の政治的・社会的情勢が取りあげられているからだ。

対し、葉石濤は「歴史」について、度重なる外来政権によって支配されたがために、「台湾の歴史の内部に宿す複雑性や重層性」に着目しており、さらに、歴史の副産物としての「異なる文化が生み出される」現象に言及している。本小説では、後者――異なる文化の産出に関する記述は確認できないが、だが、複雑な台湾の歴史を重視する作家の創作意識を読み取ることができよう。では、葉が『台湾男子簡阿淘』を通して提示する「台湾の歴史の複雑さ」とは何か。外来政権によって統治された日本植民地時代。その支配はやがて終焉を告げたものの、国民党政権による一党独裁体制下で起きた二・二八事件やその後に続く非民主的な白色テロ時代。時の為政者は変わったものの、「支配者―被支配者」という構図は不変であった。葉は、その点に台湾の歴史の複雑さや重層性の一端を浮かび上がらせたい思いがあったのではないだろうか。

しかしながら、事件や白色テロ時代をめぐるテクストの描写は、声高に国民党の暴挙や圧政を糾弾する記述とはいえまい。これまでの論議からも示されているように、本小説は作家の「個」の体験に寄り添いながら、かの時代で非情な運命をたどる台湾人の生のありようを描出している。二・二八事件の犠牲者や政治犯として投獄された主人公のように。換言すれば、台湾の現代史が物語の後景に存しているものの、不条理の中を生きざるを得ない「個」に力点を置いた作品として捉えることができる。また、無力な「個」を際立たせることによって、独裁政権の残虐さを浮き彫りにしているのではないか。

では、『台湾男子簡阿淘』は、「個人的な体験」を描いた物語にすぎないのだろうか。おそらく答は「否」であろう。テクスト内には、「個」の生の軌跡と台湾社会「全体」に属する現代史が共存しており、それゆえに、喪失と再生を内包する一個人の物語が世代記憶や歴史状況を映し出す大きな物語として、台湾の人々に共有されるという普遍性を備わるのである。この共有性こそが本作の特徴だと考えられる。

小結

本稿では、「喪失」と「再生」を端緒として、『台湾男子簡阿淘』の解釈の可能性を広げる試みをした。小説世界で叙述している「喪失」を二種に区分し、まず、第一の喪失体験では二・二八事件を背景に起きた四人の「死」の場面が大きく取りあげられ

ていることに注目した。近しい間柄も含めた他者の死という喪失を体験したにもかかわらず、文中、阿淘が自身の心情を述べる内的独白や感情に関する叙述はほぼ確認できまい。察するに、あまりにも大きな衝撃や喪失感、名状しがたい内なるかなしみを表現するため、あえて空白部分を作り出したのではないかと推論した。また、阿淘は目撃者であるが、語り手の役割を担っておらず、四者の末期は全知視点の語り手によって語られている。

つぎに、政治犯として投獄されたがためにふりかかる第二の喪失体験についてみたが、日常生活や社会生活のみならず、人間としての尊厳をも奪われるなど、彼を襲った数々の危機は既存の人生の土台を崩壊させるものであり、自身の中核をなすアイデンティティを失わせるものと考えられる。主人公が直面する過酷な現実は生のはらむ不条理性をあらわにしているといえよう。また、第一の喪失では「他者の死」、すなわち、生の断絶――生は死によって終わる――が鮮明に描出されているが、一方、第二の喪失においては、生命こそ奪われていないものの、みずからの全存在が瓦解するような体験だったと解釈できるのではないか。

これらの喪失体験の論議を引き継ぎつつ、主体の再生にみる回復の契機について検討すると、主体自身による意思決定や他者からのサポートが源であり、ひとつの転回点となったのである。そのうえで、「喪失体験の本質は意味の喪失」とするフロイトの概念を援用し、主体が喪失の苦難の意味や価値を変容、再定義することにより、みずからの喪失体験に肯定の光をあてることが可能となるのではないかと論じた。むろん、阿淘がもがき苦しんだ先には、安易に明るい見通しを見せてくれてはいない。しかし、慟哭ののちに人生の奥底に横たわるのは諦念や哀惜だけではあるまい。再び自らの足で立ち上がるその姿にはレジリエンスが備わっており、ほのかに救済の可能性が見え隠れする。葉石濤は個人史のみならず、不条理な人間世界で苦闘する魂の輝きをも描き出した。また、本書は、「個」に寄り添う作品でありながら、台湾の非民主的な時代情勢を映し出し、かつ人権や尊厳を求めながらも抑圧されてきた人々を記憶する営みも含まれているがゆえに、台湾社会に共有される普遍性をも含有すると考えられる。

【註】

(1)『晋書』巻 98、列傳第 68「桓温傳」。中華書局、1974 年

「誠宜遠圖廟算，大存經略，光復舊京，彊理華夏，使惠風陽澤洽被八表，霜威寒飆陵振無

外，豈不允應靈休，人齋契。」（下線部は筆者によるもの）

（２）何義麟『台湾現代史――二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』、平凡社、2014 年、10 頁。なお、台湾では 1946 年より 10 月 25 日を「光復節」と制定し、「光復」という表現を用いることが定着しているため、本稿もそのようによぶ。

（３）「白色テロ」は台湾に限った呼称ではないが、台湾では一般的に「白色テロ時代」とよぶため、本稿もそれに従う。また、周婉窈によると、20 世紀の世界史では、「白色」は「赤色」に対抗して用いられている。すなわち、赤色が共産主義を表すのに対し、白色は共産党に対峙する陣営を表すのである。この二つの陣営の信奉者が権力闘争を行う時、往々にしてテロリズムに訴えたがために、「白色テロ」と「赤色テロ」という呼称が生まれたとされる。この点については、つぎの文献を参照されたい。周婉窈著、濱島敦俊監訳、石川豪・中西美貴・中村平訳『増補版　図説　台湾の歴史』、平凡社、2007 年、223 頁

（４）台湾文学の高名な作家である呉濁流は、1970 年に事件体験を含む自伝小説『無花果』（林白出版社）を発表したが、この本はただちに発禁処分を受けた。詳しくは、前掲書『台湾近現代文学史』、194 頁などを参照されたい。

（５）中央研究院近代史研究所『口述歴史』編輯委員会編『口述歴史』、中央研究院、1989 年。林双不編『二二八台湾小説選』自立晩報、1987 年。李敏勇『傷口之花』、玉山社、1997 年、などがある。

（６）呉濁流著、鍾肇政訳『台湾連翹』、台湾文芸社、1987 年。李喬『埋冤一九四七埋冤』、海洋台湾出版、1995 年。鍾肇政『怒濤』、前衛出版、1991 年、などがある。

（７）前掲書『増補版　図説　台湾の歴史』、253 頁。また、張原銘「台湾におけるポストコロニアル研究の現状と課題の一考察」『立命館産業社会論集』第 39 巻、2003 年、70 頁もあわせて参照されたい。

（８）陳芳明『後殖民台湾　文学史論及其他』、麦田出版、2011 年、75 頁

（９）前掲書『増補版　図説　台湾の歴史』、258 頁

（１０）葉石濤「談二二八文学」、『台湾文学的困境』、派色文化出版、1992 年、48 頁

（１１）前掲書『台湾男子簡阿淘』自序、3－4 頁

（１２）林玲玲「戒厳後「台湾意識」的重塑――以葉石濤『紅靴子』等回憶性小説為例」『黄埔軍報』第五十六期、2009 年、135 頁

（１３）彭瑞金「府城之星・旧城之月――葉石濤的文学歳月」、前掲書『葉石濤全集２３』、413－449 頁

（１４）陳萬益、余昭玟、張恆豪、鄭清文、藍博洲。記録者心平「台湾苦難的反芻―葉石濤『台湾男子簡阿淘』討論会紀実」、同上書『葉石濤全集 23』、359 頁

（１５）陳芳明著、井手勇訳「植民地主義と民族主義――台湾作家葉石濤的苦境、一九四〇～一九五〇」、台湾文学論集刊行委員会編『台湾文学研究の現在』、緑蔭書房、1999 年、160 頁

（１６）西田勝「葉石涛の私小説（Ich　Roman）」、葉石涛著、西田勝訳『台湾男子簡阿淘』所収、台湾国家人権博物館・台南市文化局・法政大学出版局共同出版、2020 年、223 頁

（１７）小林秀雄「私小説論」『小林秀雄全集』第 3 巻、新潮社、2001 年、378－408 頁

（１８）安藤宏『「私」をつくる　近代小説の試み』、岩波新書、2015 年、178 頁

（１９）本多遥「小林秀雄「私小説論」考（上）:「リアリズム」と「文学的リアリティ」をめぐって」『日本文芸論叢』第 23 号、2014 年、36 頁

（２０）葉石濤『台湾男子簡阿淘』、草根出版、1996 年。本稿で使用するテクストは、前掲書『葉石濤全集４』に拠る。作品名及びページ数は以下の引用箇所にて明示する。また、日本語訳はすべて筆者によるものである。邦訳には前掲書、註（１６）にて記載の『台湾男子簡阿淘』がある。なお、付記するものとして、1990 年に前衛出版社より同じタイトルで刊行されているが、しかし収録されている作品が異なっており、また、作品で描かれている時代背景は第二次世界大戦にさかのぼる。前衛出版社より出版された『台湾男子簡阿淘』の収録作品を以下に記す。①「抓草薬」②「零戦墜落記」③「飢餓的兵隊」④「脱走兵」⑤「夜襲」⑥「鋼琴和香肉」⑦「鉄檻的慕情」⑧「鹿窟哀歌」⑨「邂逅」⑩「約談」⑪「船過水無痕」⑫「線民」

（２１）「紅鞋子」、前掲書『葉石濤全集４』、107 頁

（２２）伊藤潔『台湾』、中公新書、1993 年、76 頁

（２３）李ハイ蓉（LII　Peijung）「国内植民地としての台湾と台湾二・二八事件」『Core Ethics：コア・エシックス』第４巻、2008 年、497－498 頁

（２４）史実では、同年 3 月 11 日に高雄要塞司令の彭孟緝の部隊が台南市に進駐し、100 名余りの逮捕者が出たとされる。前掲書『台湾現代史――二・二八事件をめぐる再記憶』、101 頁

（２５）「夜襲」、前掲書『葉石濤全集４』、319 頁

（２６）同上書、322 頁

（２７）前掲書『台湾』、155－156 頁

（２８）「夜襲」、前掲書『葉石濤全集４』、319 頁

（２９）「「悲哀」はきまって愛する者を失ったための反応であるか、あるいは祖国、自由、理想などのような、愛する者のかわりになった抽象物の喪失にたいする反応である」とも

述べている。フロイト著、井村恒郎・小此木啓吾ほか訳『フロイト著作集』第 6 巻、人文書院、1970 年、137 頁

（３０）同上書、139 頁

（３１）大井奈美「意味の回復による喪失体験の価値の反転――心的システムの発達モデル」『社会情報学』第 8 巻 1 号、2019 年、52 頁

（３２）同上

（３３）ジェラール・ジュネット著、花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール：方法論の試み』、水声舎、1985 年。土田知則・青柳悦子・伊藤直哉『現代文学理論　テクスト・読み・世界』、新曜社、2013 年、54－55 頁。また、以下の文献も参考した。陳平原『中国小説叙事模式的転変』、北京大学出版社、2010 年、3－4 頁

（３４）詳しくは、前掲書『台湾現代史――二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』、118 頁―121 頁を参照されたい。

（３５）「紅靴子」、前掲書『葉石濤全集４』、105 頁

（３６）同上、108 頁

（３７）同上、126 頁。「赤い靴」（原題：「The Red Shoes」）、1948 年に製作されたイギリス映画である。監督をつとめたのは、マイケル・パウエル、エメリックプレス・バーガン。（https://cinepare.iinaa.net　2020 年 10 月 14 日筆者最終閲覧）

（３８）前掲書『葉石濤全集４』、131 頁

（３９）「牆」、同上書、144 頁

（４０）同上、150－151 頁

（４１）陳芳明「葉石濤与陳映真――八十年代台湾左翼小説的両個面相」『台湾文学学報』第十七期、2010 年、39 頁

（４２）窪寺俊之「自己喪失とスピリチュアリティ：自己を求めて」『先端社会研究』第 4 号、2006 年、6－7 頁

（４３）岡本祐子「中年のアイデンティティ危機をキャリア発達に生かす―個として自分・かかわりの中での自分―」『Finansurance』第 40 号、Vol.10、No.4、2002 年、16 頁

（４４）同上

（４５）浜渦辰二「グリーフケアのために――臨床哲学からのアプローチ――」『グリーフケア』第 4 号、2015 年、4 頁。詳しくは、以下の文献も参考されたい。湯田豊『宗教学入門』、南窓社、1977 年、235－236 頁。三枝充悳「生老病死と仏教」『東洋学術研究』第 37 巻 1 号、1998 年、5－19 頁。聖厳法師『四聖諦講記―随身経典 18』、法鼓文法、2000 年。陳沛然『佛家哲理通析』、東大出版、2014 年、153－189 頁

（４６）アンヌ・チャン著、志野好伸・中島隆博・廣瀬玲子訳『中国思想史』、知泉書館、2010 年、345 頁

（４７）「邂逅」、前掲書『葉石濤全集４』、248 頁

（４８）「吃猪皮的日子」、同上書、428 頁

（４９）同上

（５０）同上、431－432 頁

（５１）前掲大井奈美論文、53 頁

（５２）同上、59 頁

（５３）同上、53 頁及び 61 頁

（５４）伊藤一彦『月の夜声』、元阿弥書店、2009 年、152 頁

（５５）「約談」、前掲書『葉石濤全集４』、299 頁

（５６）同上、304－305 頁

（５７）レジリエンスとは回復力、乗り越える力。例えば、Grotberg(1999)は次のように定義している。「逆境に直面し、それを克服し、その経験によって強化され、また変容される普遍的な人の許容力」。詳しくは斉藤和貴・岡安孝弘「最近のレジリエンス研究の動向と課題」『明治大学心理社会学研究』第 4 号、2009 年、72－84 頁を参照されたい。

第三章「獄中記」論

1895 年、日清戦争で敗れた清朝は下関条約により台湾を日本に割譲し、以降 50 年間にわたり、日本統治時代が続くこととなった。第一章においてすでにふれたように、葉石濤は植民地時代の台湾で生をうけ、自我形成期を送ったというバックグラウンドを持っているためか、みずからの植民地体験を作品に投影する傾向があることは多くの研究者がつとに指摘するとおりである[1)]。したがって、葉石濤及びその作品を考えるうえで、「日本」はひとつのキーワードとなりうるだろう。

本章では、日本植民地時代を背景に描いた「獄中記」[2)]をテクストとしてとりあげ、文中の日本表象について論じることとしたい。「獄中記」は 1966 年に発表され、初出は『幼獅文芸』である。また、『中国現代文学大系』[3)]にも収録されている。本小説は、日本にまつわるイメージを多用した作品であるが、管見のおよぶ限り、従来の先行研究において、日本自体の表象のされ方に着目した論考はないと思われる。また、主人公の持つ抗日意識に焦点をあて、ナショナリズムの視座から考察を加える傾向が多く見受けられるが、他方、主人公に関する両義的な感情描写があることを看過してきたと指摘せざるを得ないだろう。

先行研究の詳述は次節に譲ることにするが、本稿では特に作品中にあらわれる日本の地名、場所や『万葉集』の「和歌」に光をあてながら考察を進めてゆく。両者の共通点は、主人公の内在化した記憶であり、また、「場所」と「和歌」を着目する理由として、単に日本を表出する象徴的な意味を担うだけでなく、主人公が日本に対するアンビバレンスな感情を端的にあらわす側面を示していると考えるからだ。

以下に本章の構成を述べる。第一節では、葉石濤と日本（日本語）とのつながりを概説する。第二節では、描かれた日本の場所についてみることとする。第三節では、一首の和歌を通して、主人公の精神世界を探るべく試みたい。第四節においては、以上の検討内容を総括して、テクストに宿す両義性について述べる。以上のような構成をもって論を展開し、小説世界に描出している「日本」はどのように表象され、また、それらをいかに解釈し、意味づけすることができうるのか。これらの問いを明らかにしたうえで、第五節にてテーヌ理論を含む葉石濤の文学観と作品の関連性について論ずることとしたい。

第一節　葉石濤と「日本」

先に述べたように、葉石濤の経歴を特徴づけるものとして、台湾文学史において戦後第一世代作家ということがあげられる。日本統治期に日本語教育を受け、かつ日本語による創作を行っていたが、やがて敗戦とそれに伴う中華民国への復帰後、言語転換をしたのち、中国語作家として台湾文壇に再び登場した世代である[4)]。「言語を跨ぐ世代」とも称される彼らが直面した現実について、陳芳明は「言語、精神、政治」の三つの側面から論じ、つぎのような見解を提示している。

> 一九四〇年代に文学活動に携わった作家は、文学史上では厳しい試練に遭遇した世代である。彼らが受けた試練はさまざまである。第一に、言語面では当局による政策、すなわち一九三七年の中国語禁止と一九四六年の日本語禁止を経験した。だから、言語能力は想像できないほどの損害を受け、彼らの思考や創作に大きな影響をもたらされた。精神的には、まず大和民族主義に駆りたてられ、つづいて戦後に膨張する中華民族主義から差別と打撃を受けた。二つの民族主義は、いずれも彼らの内面から出てくるアイデンティティではなく、強勢権力からの吹き込みと洗脳によるものである。政治的には、太平洋戦争と二二八事件を経て、精神的幻滅や落魄、絶望が生まれた。[5)]

陳が指摘しているように、「言語を跨ぐ世代」の作家たちは歴史の変動期にあって、言語面のみならず精神面においても大きな転換を迫られることとなった。当然、その過程で多くの艱難辛苦に直面したことは自明であろう。では、この世代に属する葉石濤は日本や日本語に対し、いかなる認識を持っているのだろうか。以下では、作家自身の言語環境、とりわけ日本語の使用状況を中心に、この点についてみておこう。

先述したごとく、葉石濤は植民地時代に日本語教育を受けており、「八歳から二十歳まで、私はもっぱら日本語の書籍を読み、日本語ばかりを話していた（中略）。そのため母語［閩南語――引用者注］の会話力は著しく低下し、ごく簡単な日常会話だけ話すことができた[6)]」と、彼自身が回想するように、日常会話以外、彼の言語生活はすべて日本語によるものであった。

それゆえ、戦後、文学創作の歩みは言語のハンディキャップを克服することから始めなければならなかった。葉は中国語の学習に励み、1947 年に新聞の文芸欄に中国語の小説や随筆を発表し始める。しかしながら、創作言語を切り換えたのちも、つとめて戦後の日本文学界の動向や作品を把握し、また、翻訳にも従事しており[7)]、意識的に旧宗主国の言語である日本語とのつながりを保ち続けていた。実際、「私にとって日

本語は非常に親しみを感じる言語である。なぜなら日常的に用いる言葉であり、母語ともいえるからだ[8)]」、との発言もみられ、生涯にわたり、日本語は母語[9)]に準じる言語であったといえよう。

さらには、日本に対する理解は、「単に書籍やメディアを通して得たものばかりではない。それらは私の人生の一部を織り成し、血肉にもなっている[10)]」」とも述べている。いうなれば日本経験は地下水脈化されていき、みずからの人生を一貫したものとして認識するうえで欠かせない要素であろう。また、自身のアイデンティティと日本に対する思いを次のように語っている。

> 私の国家は台湾だが、精神のよりどころは日本であり、心の故郷は日本である。しかし、それは私が日本人だということを意味するのではない。私が受けてきた教育、読んだ本、学んだ芸術、すべては日本を通して獲得したので、ゆえに精神面や思想面は日本人によって与えられたといってよいだろう。心の故郷は日本であるということは、日本が好きだという意味でもない。日本からは多くのものを得ることができたので感謝しているが、（中略）だが私の国家は台湾であり、これはまぎれもない事実である。[11)]

心の故郷は日本であっても、日本人ではない――彼のアイデンティティは統一されておらず、重層性を含有していると考えられる。渡辺絢夏の表現を引用すれば、「台湾の人々は様々な外来政権によって支配され、近代化の中で「日本人」や「中華民国人」として生きざるを得ず、やがて「台湾人」としてのナショナリティを選びとっ[12)]」た、という解釈を加えることができよう。

一方で、葉は「日本を通して獲得した」精神世界をみずから主体的に構築したゆえ、文学創作の源泉をさらに豊かにする契機を得たのではないだろうか。葉石濤の思想の変遷を論じた陳建忠は、葉を「二つの故郷（a double home）の持ち主[13)]」だと指摘しているが、確かに首肯できる見解である。また、三須祐介が述べるように、台湾の複雑な歴史は、そのまま個人のアイデンティティ形成に影響を与えている[14)]。葉石濤は二つの言語、二つの文化を内部に抱え、統一されたアイデンティティを持たぬ作家だといえるだろう。次節では作品の具体的な検討に入ることにする。

第二節　回想の彼方にある「日本」

本節では、まず先行研究の概略について述べ、次いで、作中の日本の「場所」をめぐる解釈と意味づけについて論じてゆく。

（一） 記憶として語られる「場所」

まず、「獄中記」のあらすじをみておこう。時代背景は日本統治期から敗戦直後に設定されている。主人公は台湾人のエリート青年・李淳であり、彼の父親は日本兵が起こした不慮の事故によって命を落とし、李淳は幼くして両親を亡くす。地方の名士の林賓に引き取られ、東京帝国大学医学部を卒業する。ほどなく相思相愛であった林賓の娘・銀娥に日本人との縁談が持ち上がる。最愛の人たちを奪われた李淳は復讐を誓い、1939 年にアモイに渡って抗日組織の工作員となるが、1944 年に逮捕されてしまう。

つぎに、「獄中記」の先行研究を概観しよう。本作に関する論考は、主人公である抗日青年の悲運と彼が抱くナショナリズムに集約されたものが大多数である。計璧瑞は、物語の主題は「支配者と被支配者の対立」であり、主人公の回想シーンと心理的描写によって、「台湾人が植民地時代に受けた痛ましい傷跡」を浮き彫りにしていると述べる[16]。黄文成は、主人公が帝国日本にむける反日精神に言及する一方、創作手法に注目したうえで、「主人公の感情面の起伏や牢獄の情景描写に用いた技法は、葉石濤作品の多くを占めるリアリズムの作風と一線を画す」との見解を示している。また、本小説は自伝的作品ではないものの、作家は自身が白色テロ時代に逮捕された際の獄中生活を投影し、みずからの実体験を小説創作に昇華していると分析した[17]。さらに、張素貞は作品構成や登場人物らの造形に注目しながら考察し、葉石濤の小説作品において、「獄中記」は最も「深みかつ含蓄のある表現、豊かな含意を内包し、作品構成がきわめて綿密」な小説作品だと評している[18]。

むろん、本小説を考えるうえで、主人公の抗日精神やナショナリズムは重要な視点であることは否めないが、他方、その側面に傾斜するのは妥当ではないだろう。なぜなら、前述したように、「獄中記」には植民地支配に抑圧された側の負の記憶だけでなく、「日本」に対する主人公の両義的な感情をも描かれているからだ。そこで、本稿では、作中の日本表象を通して浮かび上がる主人公の内面と感情描写に焦点をあてつつ、考察を加えることにしたい。

さて、物語の幕開けは囚われの身となり、台湾に押送された「牢獄につながれている現在」から始まる。四畳ほどの独房で、「李淳は日がな一日じめじめとしたタタミの

うえ[19]」に座り、長期にわたる栄養失調により、心身ともに極度に衰弱していた。悲しみと憂いに蝕まれていた彼は、「辛うじて息をしている屍そのものであり、彩られた過去を引きずる亡霊[20]」のごとく生きながらえている。唯一、独房から出ることが許されるのは尋問を受ける時だが、この日も検事室に入るやいなや、恐怖のあまり失禁をしてしまう。「生ぬるい尿は太ももをつたってぽたぽたと足首まで濡らし、絶望[21]」で心が折れんばかりであった。

そんな彼を待っていたのは新しく赴任してきた検事で、「顔の輪郭は近衛文麿に似ており、典型的な日本貴族の顔立ちだ。（中略）すらりとした長身にイギリス製のスーツを身にまとい、黄色の水玉模様のネクタイ[22]」をし、紳士的な振舞いはその家柄のよさを物語っている。その検事とは、東京帝国大学の同窓の菊池薫であり、かつてふたりは懇意な間柄であった。李淳の思い出を呼び起こそうと、菊池は懐かしさに満ちた声で語り出す。（引用文の下線部は筆者によるもの）

①李君、どうやら私のことを忘れてしまったようだね。菊池薫です。ま、無理もないか。君と別れてから七年も経ってしまったからな。（中略）思い出したかい？ぼくたちは不忍池の柳の下で手を携えて春を訪ね、浅草の三文劇場でぶらぶらして、午後も夜も楽しい時間を過ごしたよね……。東京のすべては素晴らしかったな！[23]

②我々は同じく赤門で教育を受けたもの同士じゃないか。君の悪行のせいで、我らの赤門の輝かしい伝統を汚して欲しくないんだ……[24]

だが、菊池が懐かしんでいるのは、東京なのか、それとも二人でともに過ごした時間だったのか、李淳には見当がつかなかった。なぜ、エリートの道を歩んだ君が国家を裏切るのかと詰問する菊池に対し、「国を裏切るとは？私はどの『国家』を裏切ったというのか[25]」、と言い返しながら、李淳もまた往時の思い出を脳裏に浮かべた。

③李淳から恐怖が遠ざかっていく。この部屋の静けさは彼の錯覚を引き起こしてしまった。まるで自分はまだ自由を失っておらず、濃厚でかぐわしいコーヒーの香りがただよう東京の「青い鳥」喫茶店の一角で、気心の知れた友としゃべり続けているかのようだ。[26]

④この夏に台湾へ帰ろうと決めた時に、李淳は桜が咲き誇る隅田川へ行き、こっそりと日本に別れを告げた。三月のうららかな春の午後、花見を楽しむ人々の群れの中から、なにやら彼の心の琴線を震わすようなメロディーが聞こえてきた。[27]

わけても注目したいのは情景描写に関する部分である。李淳が現在いるのは、「独房」や取調べを受ける「検事室」といった、外界との接触を閉ざされた絶望感ただよう牢獄である。他方、思い出として語られている「日本」はどうだろうか。二人がよき友であったころ、春の楽しいひと時を過ごした「不忍池や浅草の三文劇場」。ともに学んだ「輝かしい伝統」を持つ母校――東京帝国大学。また、「東京の『青い鳥』喫茶店」は、李淳に目の前の恐怖や不安をしばし忘れさせるほど、くつろぎに満ちた場所として描かれている。隅田川で見た桜は美しいメロディーとともに思い出される。それらの記憶の語り手を務めるのは、①や②は菊池、③や④は李淳であるが、日本の情景や出来事を思い出す際に、具体的な地名や固有名詞が使われている。また、この場面で列挙した記憶はどれもネガティブなイメージを伴わず、両者の語る日本そのもののイメージは美しく、よきものである。では、記憶を収めたものとしての場所をどのように解釈できるのだろうか。

（二）「場所」をめぐる解釈と意味づけ

前項での論議を引継ぎ、ここで、「場所」の概念について確認しておくことにしたい。日常言語において、「場所（place）」と「空間（space）」は混用されがちであるが[28]、人文地理学者であるイーフー・トゥアン（Yi－Fu Tuan）はつぎのように述べている。「場所すなわち安全性であり、空間すなわち自由性である」とし、「われわれは場所に対しては愛着をもち、空間には憧れを抱」くと説明したうえで、「われわれがそこをよく知り、意味を与えたとき、空間が場所になる」と定義した[29]。換言すれば、「場所」が成立するための必要条件として、「物理的な空間は意味を与えられて場所となる」と理解することができよう[30]。では、「意味を与える」とは具体的にどのような行為をさすのか。トゥアンがあげた例をみてみよう。われわれは、リビングなどにある「先祖伝来の家具の一つはもとより、壁の汚れですら歴史を語り」うる。したがって、「大人にとって場所というものは、長年に渡る感性の着実な成長の結果として、深い意味を獲得する可能性」を持つと述べている[31]。さらに、人間と「場所」のつながりにつ

いて、場所はある種の休止を意味し、人間の逃避の対象にもなりうるとも分析している[32]。

では、作中において、これらの「場所」はどのような意味を生成し、いかなる役割を有しているのだろうか。「不忍池」や「浅草の三文劇場」、「赤門」、「東京の『青い鳥』喫茶店」、「隅田川」――いずれも思い出の舞台であり、在りし日の生活や友情を喚起させてくれる「場所」だといえる。そして、記憶を語るうえで欠かせない「場所」であると同時に、感情移入ができる「場所」でもある。それゆえに、それぞれ個人的意味を付与されているばかりでなく、これらの特定の「場所」は、ふたりの心理的、情動的なつながりを示す役割をも果たしていると考えられよう。

また、前項で例示した情景の描写方法に、ある特色がみられることにも留意すべきだろう。喫茶店の室内にただよう「濃厚でかぐわしいコーヒーの香り」、「気心の知れた友」とのとめどないおしゃべり、美しい「桜が咲き誇る」「うららかな春の」昼下がりに聴いた「心を震わす」旋律など、追想に浮かぶこれらの場面は、視覚的イメージだけでなく、嗅覚や聴覚などの五感を伴う記憶として呼び起こされているのである。かように感覚に訴える描写を通して、思い出と五感を対照しながら、李淳の感情を表現しているのではないだろうか。

さらには、どちらにとっても「場所」――意味づけられた空間、という点においては同じだが、しかし両者が語る「場所」に付加されている意味に違いがみられる。李淳の場合、自身が訪れた「場所」だけを想起し、そこはかとなくノスタルジックな色彩を帯びている。端的に言えば、青春のひと時を過ごした留学先を懐かしむ追憶とよぶべきものであろう。他方、菊池が語るのは二人が共有している記憶に介在する「場所」である。そのうえ、李淳に語りかけるように話すのだが、なぜ菊池はそうするのだろうか。思い出のなかに存在する「日本」を呼び起こし、すなわち観念上、海を隔てた日本へと回帰することによって、李淳に日本人としてのナショナル・アイデンティティを惹起させようとする意図を抱いているように思われる。

また、菊池は思い出を話し終えるやいなや、再三にわたって、「天皇陛下の御心は内地人や台湾人、朝鮮人あるいは満州人の区別はなく、みな分け隔てず一視同仁でいらっしゃる。それなのに君は陛下の慈悲深く、尊い御心を裏切ってしまった[33]」と、李淳を激しく責め立てる。双方には「場所の記憶」という共通点はあるものの、菊池が語るそれの先には天皇制があり、しかし李淳にはないのだ。語り手である主体の意識の相違がクローズアップされた部分である。すなわち、両者が帝国日本に抱く従属意識の違いを示唆しているのではなかろうか。そして、ふたりの意識の交錯は、支配者・

被植民者とラベリングされた彼らの隔たりをより鮮明に呈すのである。

付記するものとして、葉石濤が初めて日本の土を踏んだのは、「獄中記」を発表してから 25 年隔てること、1991 年である[34]。ストーリー展開のための舞台として描写したであろう作中の「場所」は、作家は発表当時において訪れてはいない。描かれたそれらは、彼がシミュレーションし、創作という行為によって小説世界内に現出させたランドスケープである。では、「獄中記」で描かれた日本の場所は、単なる舞台背景にすぎないのだろうか。前出のトゥアンによれば、「文学は、われわれが気づかずに過ごしてしまうかもしれない経験の領域に注目する[35]」ことがあると指摘しているが、作中の場所に関する記述は、いわば主人公みずからが日本に滞在した「経験」に基づくものである。彼の「経験」にまつわる記憶を掘り起こし、語りなおすことにより、日本に留学した台湾人青年という経歴のリアリティを高める効果が期待できると考えられよう。あるいは主人公の造形を具現化するために、作家はあえて未知の地である日本の「場所」を描出したのではないか。

本節では、イーフー・トゥアンの措定した「場所」理論を参照しつつ、文中に登場した日本の「場所」の叙述について整理した。記憶のまにまに想起される幾つかの「日本」の情景は、「牢獄」とは対照的であり、楽しさや安らぎなどの感情が溢れる「場所」として描かれている。また、登場人物らの心理的、情動的なつながりと連動する機能を有するものである。とりわけ、主人公・李淳の追想は、五感を伴う記憶として呼び起こされているが、彼はその情景を思い出しながら、「恐怖が遠ざかっていく」、「まるで自分はまだ自由を失っておらず」などの叙述からもわかるように、みずからの身体感覚を同化させつつ、記憶の中に存在する「場所」に親和的に融合していく様子が読み取れるのである。

総じて「場所」は、二人の記憶を再現する装置として作用することがみてとれるが、両者における「場所」の意味づけには差異があるようだ。李淳にとっては、私的な記憶に属する「場所」であり、個人的な意味合いが強い。それに対し、菊池の場合は、天皇制にも言及しているため、彼の語る「場所」にはナショナル・アイデンティティの含意があると推認できるのではないかと考えられる。

第三節　主人公の心に響く「日本」

前節では、主人公らの記憶のなかにある日本の「場所」に焦点をあて、その意味づけと機能について論じた。「場所」は「日本」であることが強く意識化されたものとし

て描かれている、という理解に収斂できるだろう。先述したとおり、作中の日本表象として描出している「場所」と『万葉集』の古典和歌、これらの共通点はいずれも主人公の内在化した「記憶」ということである。ここでははじめに、本章で述べる記憶――「自伝的記憶」の定義について簡単にふれておきたい。

佐藤浩一によると、「これまでの生活で自分が経験した出来事に関する総体」を「自伝的記憶」として分類でき、また、自伝的記憶を定義する特徴とは、「それが「自己(self)」と関わること」と指摘している[36]。われわれは自伝的記憶を思い出す際に、しばしば「ある記憶が別の記憶を引き出し」、あるいは、会話中に「一連の出来事が次々と想起される」というケースもみられるという。さらに、集積された自伝的記憶の「多くの出来事は、あたかも物語のなかの隣接するエピソードのように、時間的に接近し文脈情報を共有し、因果関係をなしている[37]」のである。

前節で検討した日本の地名や場所に関する叙述では、主人公・李淳は菊池との会話を通して、自身が日本留学中に訪れた場所やそれにまつわる「出来事が次々と想起され」たのである。本節でとりあげる古典和歌という日本文化表象も、李淳にとって「自伝的記憶」に分類できるが、ある時、獄中にいる主人公は偶然『万葉集』の和歌を耳にし、その記憶を呼び起こしまうのだった。和歌は、彼の内側にある「日本」との結びつきを示すトリガーとなりうるのではないかと考えられる。本節では一首の古典和歌を手がかりに、主人公の精神性や人物像に接近する試みをしたいと思う。

> 隣室から朗々と和歌をそらんずる声が聞こえ、（中略）李淳は思わず耳をそばだてて聞き入ってしまう。それは日本の古典和歌集『万葉集』に収録されている、額田王作の恋歌「防人の歌」であった。
> 君が行く道のながてを繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがな
> 人生のみじめさと寄る辺なさ、そして、いかんともしがたい思慕がすべてこの短歌に凝縮している。その悲しみや憂いは李淳の心を締めつけていた。[38]

文中、「額田王作の「防人の歌」」とあるが、正しくは『万葉集』巻第 15（3724）に収められている「中臣朝臣宅守と狭野弟上娘子との贈答の歌」である[39]。作者は狭野弟上娘子であり、別れを前にして、心のうちのやるせなさや悲しみを詠んだものである。

主人公の内面世界を考える前に、まず日本統治期における国語（日本語）教育と日本語短詩文芸との関係について説明する必要があろう。台湾総督府は植民化初期の段

階において、まず漢詩により、次の段階では短歌や俳句により日本人と台湾人の融和を導きだそうとした[40]。磯田一雄によると、当時、台湾人が俳句や短歌に接したのは、主として旧制中学校や高等女学校などの国語教育を通じて習得したとされる。とりわけ、中等国語教育の果たした役割は大きいという。また、植民地教育において俳句よりも短歌の方が重視されていたようだ。「敷島の道」と言われるような「日本精神」を植えつけるには短歌がふさわしいと思われており、短歌による皇民化教育が行われていたと指摘している[41]]。こうして日本語短詩文芸は台湾で受容されることなるが、「それは言語だけではなく、日本的な「ライフスタイル」や「態度」あるいは「価値」に深くかかわるものであり、単に日本語が上達したというだけに留まるものではない」とも述べている[42]。

主人公はかような時代背景のもとで教育をうけ、また日本への留学経験を持つエリートであり、おそらく日本古典文学に関する素養の持ち主であろう。日本のいにしえ人が詠んだ一首の和歌が彼の心の奥に分け入り、「心を締めつけ」られるほどの感動を覚える、というくだりは理解できる。だがここで留意したいのは、李淳は古典和歌に深く共鳴する一方、その言動は反日的であるということだ。愛する銀娥が日本人に嫁がされると聞き、李淳は抗日組織の工作員となる決意をする。

> 「運命とは残酷だ。最初は父さんが日本人によって殺され、今度は君までも奪われてしまうのか。だが、私は決して屈しない。生きている限り必ず戦い続ける……。人生の支えとなるすべてをみすみす奪われてたまるものか！」李淳は天を仰いで、涙を飲み込んだ。[43]

また、李淳は尋問する菊池に疑問を突きつける。「私はあなたがたの神話教育をうけて育ったが、まさか君は『古事記』に書かれているあの真っ赤な嘘を信じているのか？日本人のエリートである君の理性はいったいどこへ行ってしまったんだ[44]」。帝国日本への反発や懐疑をあらわにし、被植民者でありながら支配者に屈服しない精神を備わる人物として造形されている一方、「神話教育」に向ける批判にみられるように、みずからの抵抗の拠りどころとして支配者の近代言説に依拠するよりほかない、という側面が浮かびあがり、植民地知識人の限界を示唆しているのではないか。一見、彼の言動は整合性が取れず、読み手にある種の違和感を感知させていると考えられる。

ここでいう日本の「近代言説」について、子安宣邦の知見を通してみておきたい。子安によれば、「日本民族」という概念の成立は、アジアにおける帝国日本による戦争

の始まりとほぼ時期を同じくすると指摘している。

> アントニー・D・スミスがナショナル・アイデンティティの西欧的モデルという、「共通の歴史的記憶、神話、象徴、伝統」によって構成員を結びつける文化共同体としての「ネイション」概念が、いま日本の「民族」の語に転移されているのである。『大言海』が成立し、刊行される一九二五年から三〇年末にかけての時代は、神話と言語と歴史的記憶を共有する日本人という日本の「民族」概念、すなわち「日本民族」概念が、日本帝国を支える理念として構成されていった時代であったといえるだろう。[45]

さらに、主人公の複層的な内面についての理解に資するために、松永正義の議論を紹介したい。松永は台湾の世代を生年によって区分し、日本時代以来の世代を八つに分類している。主人公の李淳は 1910 年生まれと設定されているが、松永によれば、1905 年～1920 年代は「抗日の世代」であり、その特徴は次のとおりである。[46]

① 日本の支配体制は確立したものとして感じられるが、物心ついたころから中国は「中華民国」であり、そのナショナリズムの影響も受けている。
② 知識人は近代教育を受けており、日本語のリテラシーがある。また漢文教育を受けている場合が多く、中国語リテラシーもある場合が多い。
③ 中国ナショナリズムと内部化した「日本」との間にある。

むろん、この見解がすべてあてはまるとはいえないが、大変興味深い指摘である。とりわけ、③は李淳の人物像を解釈しているかのようだ。民族意識と抵抗心が強まり、復讐心に燃える主人公は、「もしも台湾が日本人の植民地でなければ、もしも強大な力で歴史を変えて、再び中国人となることができるのならば、あまたの苦難は解決されるだろう[47]」と、中国ナショナリズムを抱く。しかしながら、他方では和歌に感動するように、徹頭徹尾日本を排斥しているわけではない。内面では、日本古典文学の世界に接合されるもうひとりの自分が存在し、和歌という媒介を通じて「日本」と感情的な結びつきを持つ。

繰り返すが、抗日組織の工作員である主人公は、覚醒する民族意識の高まりとともに増幅する日本への憎しみを宿しながらも、ゆくりなく耳にした一首の和歌に共鳴する感受性を具有する。相反する感情が共存し、きわめてアンビバレントな人物である

といえよう。また、感情面のみならず、李淳のような経歴をたどった台湾人青年の文化アイデンティティにも留意すべきだろう。先述の「自伝的記憶」の果たす機能のうち、何よりも重要視とされるのは、「自己」及び「同一性」の基盤になっていることである[48]。主人公は、「和歌」にまつわる記憶が引き出されたと同時に深い感動を覚えるのだが、彼の記憶と連動する内面や心の動きに、台湾知識人の文化の「日本化」を垣間みることができるのではないか。

本節では、『万葉集』という日本文化表象を通じて、主人公・李淳の精神性及び人物像についてみてきたが、燃えたぎる日本への復讐心を持つ反面、古典和歌に聞き入り、心を強く揺さぶられるという描写から、多層的な屈折を内包した人物であることが明らかとなった。おそらく彼の感性は、日本統治期に受けた教育とは不可分な関係にあり、作中に和歌を引用することによって、その日本的な感性を秘める内面世界を際立たせている。

第四節　集団記憶・個人記憶に存在する「日本」

本小説のエピローグをみておこう。やがて、終戦をむかえ菊池は切腹自殺をする。世を去る直前に、彼は人質として拘束していた銀娥を釈放する。尋問中には激しく罵りあう二人だったが、李淳は菊池の死を心から悼んだ。

> 菊池よ、なぜ君は死を選んだのか。死をもって償うべき人はほかにも大勢いるのに、彼らは再び復活して歴史の舞台に舞い戻ってくることだろう。恥知らずの輩どもだ。君はその中で最も人間性を失っていない一人であり、君の罪はいたって軽く、死ぬ理由などないのに死んでしまった。それは君が明晰な理性を持ち続けていたことの証である。君こそが最も秀でた日本人だ！（中略）戦のたえない時代では、あらゆる基準や価値観はことごとく変容を遂げてしまうものだった。[49]

また、菊池は日本社会の犠牲者であるとし、「歴史という名の巨大な車輪は菊池男爵の細い体を轢き、あたかも牛車の重い車輪が李淳の父親のがっちりとした体を轢いてしまった時と同じように[50]」と、哀切な思いにかられる。先述のごとく、主人公は強い復讐心を抱く抗日工作員として描かれている。だが、李淳はみずから命を絶った菊地に対して憎悪ではなく、むしろかなしみや同情、賞賛などの感情をあらわにしてい

る。かつて青春時代をともに過ごしたよき友であったにせよ、工作員という設定とは矛盾するかのような感情描写が随所にみられる。

そのうえ、断罪するのではなく、菊池もまた父親と同じく戦争の犠牲者であるという視点は何を意味するのだろうか。「（支配者の）日本人と（被支配者）の台湾人の間にも友情を育む可能性がある[51]」と彭瑞金が指摘するように、植民地支配のなかでの人々の関係は、支配者と被統治者という二項対立的な構図では捉えきれない側面があると示唆しているのではないかと考えられる。

ここまでみてきたように、「獄中記」は日本統治期に抗日組織の工作員となった台湾人青年の物語である。それは同時に台湾の歴史記憶の一部を再現したものでもある。実際、文中には「皇軍」、「大東亜共栄圏」、「特高警察」、「皇民化運動」、「万世一系的天皇」など、植民地時代を想起させる語彙がちりばめられている。だがそればかりでなく、作中に表象されている「日本」は、往年の思い出を喚起する場所や、主人公に深い感動を与える和歌も含まれている。そして、エンディングで主人公が吐露した思いからもわかるように、両価的な感情や観点が述べられた作品である、というひとつの結論に達する。繰り返しとなるが、本作は台湾の近代史の一部であった日本植民地時代の集団記憶ばかりでなく、作家自身が受容したであろう個人記憶をも包含している。それらを縦糸にし、時代の流れに絡ませ、この作品を紡いだ。小説世界のなかで述べられた日本表象によって、植民地時代の歴史記憶が重層的に可視化されたといえる。

しかるに、前述したごとく、「獄中記」は 1966 年に発表した作品であるが、本作を分析するうえで、時代のコンテクストを忘れてはならないだろう。次節では、テーヌの三大要素や葉石濤の文学観をふまえながら、この問題について述べてゆく。

第五節　文学理念の実践

六十年代の台湾という場において、このように両義的に「日本」を描いた本小説をどのようにとらえることができるのか。本節ではこの問いについて考えることとしたい。まず、台湾の社会状況を再度確認しておこう。六十年代の台湾では国民党政権による一党独裁政治が続き、一元的な言語政策が施行されていた[52]。また、国民党の「中国化」教育で日本への思いは「皇民意識」として克服すべき対象であり[53]、日本統治期を歴史の負の遺産として一掃しようとしたため、自明のことながら、「日本」を直接的に表現するには制約を伴う時代であった。かような時代情勢であるにもかかわらず、

なぜ作家はあえて「日本」を描いたのだろうか。

葉石濤はかねてより、「土地なくしては、文学はない」と述べており、彼の文学観の精華を凝縮した言葉ともいえる。後年、葉は六十年代の台湾文学界の主流を占めるモダニズムについて、「台湾の現実社会とはかけ離れた根無しの文学[54]」と評したうえで、「歴史的記憶を忘れ去った文学は人々の声を反映できず[55]」、それゆえに、「台湾の郷土文学は歴史的事実に根ざすべきだ[56]」と指摘している。「獄中記」は台湾近代史の一部である日本植民地時代を描出しているが、とりもなおさず文学的営為を通じ、台湾の「土地」に堆積した歴史や現実を反映する、という作家みずからの信念や主張を体現した作品だと考えられる。

では、「獄中記」において、葉は自身の文学的主張をどのように反映、実践したのか。上述したように、本作の主人公は植民地台湾で「日本人」として教育を受け、日本にも留学するが、のちに工作員となり抗日活動に身を投じる、という経歴をたどった人物である。主人公の造形に関していえば、極端ではあるものの、完全に実在しない人物とはいえまいだろう。このように造形された人物像に、葉が重視する「種族、風土（自然環境と社会構造）、歴史」の三要素が投影されているのである。外来政権による植民地支配という「歴史」や「社会構造」。そして、その支配下で帝国臣民として生きるよりほかない台湾人という「種族」の生のありよう。小説世界で語られた李淳のライフストーリーによって、これらが浮かび上がるよう構成されているのである。

一方、テーヌ理論との関連性はみられるのだろうか。テーヌは、「人間の歴史の機構」の変遷を分析する視座の一つとして、つぎのような見解を提示している。サクソン民族の例をあげ、「民族が征服されると、新しい政治機構によつて、その民族は、從來持たなかつた種々の慣習や能力や傾向が強要される」という。そればかりでなく「外來の大きな力」が加わることにより、ある民族や社会、地域に古い要素と新しい諸要素が混ざり合い、変化をもたらすと指摘する[57]。

> この傾向が、生得的のものであつて、本来種族と結び附いてゐることもあれば、又習得的あつて、種族に作用する何らかの事情によつて作り出されることもある。これらの大原動力が一度與へられると、それらは徐々にその効果を及ぼしてゆく。つまり、この原動力が、數百年を經た後には、國民を宗教的に、文學的に、或は經濟的に、新しい狀態に入らしめ、この新しい條件は、これらの諸原動力の新たな努力と協同して、或は善い、或は惡い他の條件を、或は徐々に、或は急速に、生み出し、以下同様に生み出してゆく。[58]

第一章にて述べたとおり、葉石濤は「歴史」に関する解釈の中で、主として「植民地支配による台湾の歴史の複雑さ」と、その歴史の副産物としての「異なる文化の融合」の二点の主張を提出している。ここで引用したテーヌの説と照合すると、「植民地支配」＝「外來の大きな力」によって異なる要素が混合し、当該種族ないし社会に何らかの影響を及ぼす、という眼目に両者の類似点を見いだすことができる。

では、テーヌの述べる「外来の力による影響」は、作中のどのような部分で看取することができようか。たとえば、物語世界で登場した『万葉集』の事例で考えておこう。繰り返しとなるが、『万葉集』は植民地台湾で皇民化教育の一環として用いられ、特殊な役割を担っていたとされる。前出の磯田が指摘するように、当時植民地教育を受けた台湾の人々に及ぼした影響は看過できないものといえるだろう。他方、戦後台湾において、『台湾万葉集』[59]を上梓した孤蓬万里（本名：呉建堂。1926～1998）のような歌人も存在する。孤蓬は日本統治期に生まれ、旧制台北高等学校在学中に『万葉集』の研究として知られる犬養孝に師事して以来、短歌の創作に取り組み続けている。彼のペンネームは、李白の「送友人」の一節にみる「孤蓬万里征」に由来し、その名にこめた思いについて、「日本語のすでにすたれた台湾において、日本独特の短歌を詠むのは、孤蓬すなわちみなし草が万里を行くようなもので、幾多の苦難を伴うものであるが、その万難を排して命の限り歌をつづけていこうとする決意[60]」の表明だと述べている。

『万葉集』による皇民化教育は、植民地支配下の台湾人に日本人としての国民統合の意図を有する側面は否めないが、他方、『台湾万葉集』の刊行が示すように、戦後もなお、文学としての感化力を持ち続けているようすが浮かび上がる。先にふれた、テーヌの説く外来的な力がもたらす影響、すなわち、「又習得であつて、種族に作用する何らかの事情によつて作り出され」た文学的事例の一つとして捉えることができるのではないだろうか。

本節では、六十年代の政治的文脈を踏まえながら、日本統治期を両義的に描いた葉の創作意識について検討したが、時代的制約があるなか、「獄中記」は作家みずからの創作信念と文学的立場を表明した作品といえるのではないか。また、主人公の造形には葉が重視する三大要素が内包されていることが明らかとなった。さらに、『万葉集』の事例を取り上げて述べたが、植民地支配などのように外来的な力がある民族、社会に与える影響を説く部分に、葉とテーヌ両者の論述の共通点がみられたのである。

小結

本論の主たる関心は、「獄中記」に表象されている「日本」について明らかにすることであり、文中に登場する「日本の場所」と「古典和歌」を手がかりとした。両者はいずれも登場人物らの「自伝的記憶」に大別できるが、具体的な地名や固有名詞を織りまぜて描かれた「日本の場所」は、作中人物の心理的、情動的なつながりを示す働きを有する。また、「場所」には個人的な意味を付与された空間である以外に、ナショナル・アイデンティティの含意を帯びるのではないかと推論した。

次に、『万葉集』の和歌に深く共感する主人公の精神性について検討すると、抗日組織の工作員という設定に反するかのように、古典和歌に対して感情的な結びつきがみられ、日本的な感性を内に秘める人物だということが明らかとなった。作中に和歌を引用することで、主人公のアンビバレントな特徴を浮き彫りにしている。また、極端な経歴をもつ主人公の造形を通じて、作家が重視する台湾の「種族、風土、歴史」に関する三要素が浮かび上がるように構成されているのである。だが、主人公の意識形態のみならず、小説世界内には二律背反な描写が随所に点綴されており、日本的なるものに対する否定だけでなく、肯定をも述べられている。描出されている「日本」は輻輳的なものであり、単純に「支配への抵抗」、あるいは「日本文化への愛着」と等号で結ぶことはできないだろう。なぜなら、重層性を帯びた歴史が物語の背景をなし、底流として伏在しているからだ。

そのうえで、台湾の六十年代、すなわち非民主的な時代のコンテクストから、両義的な叙述で日本統治期を描いた本小説を検討すると、葉石濤はみずからの文学創作の信念と主張を「獄中記」に反映したのではないかと考えられる。さらには、『万葉集』の事例を通し、テーヌの説く「歴史」の概念との関連性を検討した。日本統治時代の植民地教育において、『万葉集』は同化教育の理念のもとで特殊な役割を有していたが、一方で、戦後の台湾では『台湾万葉集』の刊行にみるように、文学的感化力を持つ側面があったといえるのではないか。この点を鑑みると、テーヌの説く「外來の大きな力」によって、新たな要素が混ざり、生み出された文学事例として解釈できよう。

【註】

（1） 彭瑞金『植民地経験与台湾文学』、遠流出版、2000 年、195－281 頁。前掲廖淑芳論文「空間語境与歴史暴力―論葉石濤 1965 後復出階段的鬼魅書写」、128－166 頁、などがある。

（2）葉石濤「獄中記」。本稿で使用するテクストは、前掲書『葉石濤全集１』、293－335 頁に拠る。また、日本訳はすべて筆者によるものである。なお、邦訳は、中島利郎訳『シラヤ族の末裔・潘銀花　葉石濤短篇集　台湾郷土文学選集Ⅳ』、研文出版、2014 年に収録されている。

（3）朱西甯編『中国現代文学大系』第 1 巻、巨人出版、1972 年

（4）黄意雯「台湾作品に見る日本語借用現象の量的推移」『計量国語学会』28 巻 5 号、2012 年、168 頁

（5）前掲書『台湾新文学史』上巻、東方書店、2015 年、264－265 頁

（6）葉石濤「我与《紅楼夢》」『台湾日報』、1977 年 8 月 24 日

（7）文学作品や学術論文のみならず、多岐にわたるジャンルの翻訳を手がけ、詳しくは、前掲書『葉石濤全集２１』～『葉石濤全集２３』を参照されたい。

（8）陳芳明「一個耽美左派的一生」『中国時報』、2000 年 2 月 18 日。しかしながら、葉石濤にとって日本語は旧宗主国の言語であり、作家が抱える葛藤や矛盾について、今後も議論すべきであろう。

（9）織世万里江は「母語」について次のように定義している。「ある個人が幼少時に習得した言語で、かつ高度な運用能力を持つ言語とし、その数は一つだけの場合と複数ある場合がある。母語は必ずしも人生の中で最初に接触した言語とは限らず、また常にもっとも運用能力が高い言語とは限らない」。本稿もこの定義に従う。織世万里江「リーガルエイリアン」郭南燕編『バイリンガルな日本語文学』、三元社、2013 年、356 頁

（１０）葉石濤「東京物語」『自立晩報』、1992 年 1 月 27 日

（１１）荘紫蓉「自己和自己格闘的寂寞作家：専訪葉石濤」、彭瑞金編『台湾現当代作家研究資料彙編 15　葉石濤』国立台湾文学館、2011 年、309－310 頁

（１２）渡辺絢夏「台湾におけるナショナル・アイデンティティ：日本統治下における「台湾」の萌芽」『国際日本研究』第 11 巻、2019 年、27 頁

（１３）前掲陳建忠論文「従皇国少年到左傾青年　戦後初期葉石濤的小説創作与思想転折」、87 頁

（１４）三須祐介「漂泊するアイデンティティと台湾の文化―台湾で考えたこと、台湾を考えるということ―」『広島経済大学研究論集』第 34 巻第 2 号、2011 年、103 頁

（１６）計璧瑞『被殖民者的精神印記：殖民時期台湾新文学論』、秀威資訊科技、2014 年、260 頁

（１７）黄文成『関不住的繆思：台湾監獄文学縦横論』、秀威資訊科技、2008 年、265－272 頁

（１８）張素貞『細読現代小説』、東大図書、1986 年、259－274 頁

（１９）「獄中記」、前掲書『葉石濤全集 1』、294 頁

（２０）同上書、293 頁

（２１）同上書、297 頁

（２２）同上書、298－299 頁

（２３）同上書、299 頁

（２４）同上書、327 頁

（２５）同上書、302 頁

（２６）同上

（２７）同上書、317 頁

（２８）陳培豊「植民地体制下の台湾の民謡――民謡に見る「場所」と「空間」」所澤潤・林初梅編『台湾のなかの日本記憶』、三元社、2016 年、76 頁

（２９）イーフー・トゥアン著、山本浩訳『空間の経験』、ちくま学芸文庫、1993 年、11 頁

（３０）大谷華「場所と個人の情動的なつながり―場所愛着、場所アイデンティティ、場所感覚―」『環境心理学』第 1 巻第 1 号、2013 年、58 頁

（３１）前掲書『空間の経験』、65 頁

（３２）松田純子「イーフー・トゥアンの「場所」理論について」『文化女子大学紀要・服装学・生活造形学研究３０』、1999 年、146 頁。また、以下の文献も参照した。宋秀葵『地方空間与生存：段義孚生態文化研究思想』、中国社会科学出版、2012 年。大城直樹「「場所の力」の理解へむけて――方法論的整理の試み」『南太平洋海域調査研究報告』第 35 巻、2001 年、3－12 頁

（３３）前掲書『葉石濤全集１』、304 頁

（３４）前掲文葉石濤「東京物語」

（３５）前掲書『空間の経験』、290 頁

（３６）井上毅・佐藤浩一『日常認知の心理学』、北大路書房、2002 年、70 頁。鈴木宏昭『教養としての認知科学』、東京大学出版会、2016 年、65－103 頁もあわせて参照されたい。

（３７）同上書、76 頁

（３８）前掲書『葉石濤全集１』、311－312 頁

（３９）高木市之助・五味智英・大野晋校注『日本古典文学大系　万葉集四』、岩波書店、1962 年、97 頁。口語訳は次のとおりである。「あなたのいらっしゃる長い長い道を手繰って折りたたんで、焼き尽くしてしまいたい。その天の火がほしいことよ」。市古貞次・小田切進編『日本の文学古典編　万葉集三』、ほるぷ出版、1987 年、97－99 頁参照。

（４０）陳培豊「日治時期的漢詩文、国民性与皇民文学――在流通与切断過程中走向純正帰一――」『跨領域的台湾文学研究学術研討会論文集』、国家台湾文学館、2006 年。後掲磯田一雄論文、80 頁より転載。

（４１）磯田一雄「戦後台湾俳句小史（一）　戦前期台湾の国語教育と俳句・短歌――生活表現の「日本化」・「近代化」」『成城文藝』239 号、2017 年、77 頁及び 84 頁。

（４２）前掲磯田一雄論文、73 頁

（４３）前掲書『葉石濤全集１』、320 頁

（４４）同上書、328 頁

（４５）子安宣邦『日本ナショナリズムの読解』、白澤社、2007 年、135 頁。また、以下の文献も参照もした。姜海守「「同義」言説と植民地におけるナショナル・アイデンティティ」『国際基督教大学学報３－A・アジア文化研究』第 43 号、2017 年、49－66 頁。清水正之『日本思想全史』、ちくま新書、2014 年、11－60 頁

（４６）松永正義「戦後台湾における日本語と日本イメージ」、前掲書『台湾のなかの日本記憶』、57 頁―60 頁。①には全体的特徴を、②には教育の状況を、③にはその日本イメージを示した。なお、「日本時代に書かれたことは、知識人に限定して考えられるべき」とのことである。また、生まれ年の上限と下限は厳密に決めておらず、便宜的なものであるにすぎない、としている。

（４７）前掲書『葉石濤全集１』、322 頁

（４８）前掲書『日常認知の心理学』、78 頁

（４９）同上書、334 頁

（５０）同上書、335 頁

（５１）彭瑞金「鍾肇政与葉石濤的殖民地経験小説比較」『駆除迷霧找回祖霊　台湾文学論文集』、春暉出版、2000 年、292 頁

（５２）野嶋剛『台湾とは何か』、筑摩書房、2016 年、75 頁

（５３）中川仁『戦後台湾の言語政策―北京語同化政策と多言語主義』、東方書店、2009 年、13 頁

（５４）前掲書『台湾文学史綱』、114 頁

（５５）同上書、142 頁

（５６）同上

（５７）前掲書『英國文學史』、24 頁

（５８）同上書、24－25 頁

（５９）孤蓬万里編著『台湾万葉集』、集英社、1994 年。孤蓬万里編著『台湾万葉集　続編』集英社、1995 年。また、次の論文も参照した。松永正義「台湾の日本語文学と台湾語文学」『一橋論叢』第 119 巻第 3 号、1998 年、326－343 頁。河路由佳「日本統治下の台湾における日本語教育と短歌――孤蓬万里編著『台湾万葉集』の考察――」『人間と社会』第 11 号、東京農工大学、2000 年、47－64 頁。

（６０）孤蓬万里『「台湾万葉集」物語』、岩波ブックレット、1994 年、63 頁。ほかに、次の文献も参照した。孤蓬万里『孤蓬万里半世紀』、集英社、1997 年。

第四章『西拉雅末裔潘銀花』論

本章で考察する短編連作『西拉雅末裔潘銀花（シラヤ族の末裔・潘銀花）』（以下、『西拉雅末裔潘銀花』）は、ある台湾の先住少数民族の女性の半生を描いた物語である。主人公の潘銀花の出自は母系社会のシラヤ族であるが、十六歳の時に漢人家庭で奉公し、その後、五人の漢人男性と結ばれ、家父長制の漢族社会の周縁で生きることとなる。だが、彼女は結婚や出産などのライフイベントに際しては、みずからの価値観にもとづき主体的に行動する傾向がみうけられる。マイノリティに属する銀花は、作中、漢民族の伝統的な思考様式や文化の枠組みに収まらない異質な存在として描かれているのである。

のちに節を改めて詳述するが、本作に関する先行研究を概観すると、主として台湾先住民族のエスニシティにフォーカスした研究がなされてきた。また、二元対立、すなわち家父長制社会対母系社会、文明対未開などといった論述を散見する。しかしながら、結論めいたことを述べてしまえば、物語の終盤は、先住民族や漢族らが一つの屋根の下で肩を寄せあいながら大家族としてともに暮らす、という大団円を迎えるのである。それゆえに、作品を貫く基調が異なる二つの社会の対立で結論づけしてよいかどうか、なお検討の余地があるのではないだろうか。また、主人公の人生に影響を及ぼした五人の男性（夫、恋人など）の相違点に関し、先行研究ではすでに取り上げられているが、いささか語りつくされていないように思われる。そこで、本稿では新たに「男性性」の概念を導入し、彼らの差異について分析することとしたい。以上に述べた問題意識から出発し、シラヤ族である主人公のエスニシティに焦点をあてるだけでなく、主人公と関わりあった漢人男性たちの「男性性」や両性間の関係性、さらには母系社会で育った主人公の価値観の矛盾点にも着目しながら検討を進めてゆく。

具体的には以下の順序で論述を展開する。まず、本章の理解に資するため、台湾先住民族の歴史（第一節）や『西拉雅末裔潘銀花』の創作背景（第二節）などについて概説する。つぎに、主人公の歩む半生の道のり（第三節）及び彼女と五人の男性の関係性を個別に整理しながら、作中における彼らの「男性性」を明らかにする（第四節）。そのうえで、結婚や親権にまつわる主人公の判断基準について述べてゆく（第五節）。これらの議論を通じて、本小説を二分法以外の視点で捉えなおす試みをしつつ、文中において、テーヌ理論や葉石濤の文学観がいかに反映されているのか、という側面にも言及することとしたい（第六節）。

第一節　台湾における「族群」と台湾の先住民族

（一）台湾における「族群」の定義

本論に入る前に、現代台湾における「族群」の定義及び先住民族の歴史を説明する必要があるだろう。本節では、この二点について一通り概観してみることにする。

現在の台湾を構成しているエスニック・グループを示すものとして「四大族群」という表現が用いられているが、まず、「族群」の定義について確認しておこう。王甫昌によると、「族群（ethnic groups）」という言葉が欧米圏で普遍的に使用されはじめたのは、およそ 1950 年～60 年代頃であり[1]、「族群」の定義を以下のように述べている。

> 族群とは共通の起源、あるいは祖先・文化・言語を有する集団である。そのために、その集団の成員は自ら、あるいは他者から、独自の社会集団を構成する一員であると認識し、また認識されている状態を指す。[2]

また、他の集団アイデンティティに比べ、「族群」はある特異な点を有する。その特異な点とは、自集団と他集団を区別する際に用いる基準として、「構成員の「共通の起源」あるいは「共通の祖先（common descent）」を強調すること」である[3]。

台湾では 1980 年代末期から「族群」という言葉が使われはじめ、当初は台湾の人類学者と社会学者らによって、英語の「ethnic groups」を意味する表現として「族群」と訳され、「ethnic groups」に関する現象の叙述と解釈に用いられた[4]。そして、「四大族群」という分類は、1993 年に民進党の立法委員である葉菊蘭と林濁水によって提出されたものである[5]。いわゆる「四大族群」とは先住民、客家人、閩南人（福佬人）、外省人（新住民）を指すが、前出の王甫昌の表現を踏襲すれば、現代の台湾社会における主流的な人間集団の分類概念ともいえる[6]。なお、台湾では 1991 年に外国人労働者を導入して以来、東南アジアや中国大陸などからの移民が急増しているため、「新移民」という新たな呼称が生まれている。

（二）台湾の先住民族について

つぎに、『西拉雅末裔潘銀花』の主人公のルーツである先住民族の歴史について、清代、日本統治時代、中華民国政府に接受された戦後、という三つの時代に区分したう

えで概説しておこう。中国大陸南部からの本格的な漢人移住は、1624 年オランダの植民地時代に始まるが、漢民族の台湾来往以前から台湾に居住していた先住民族は、言語学上はオーストロネシア語系（Austronesian，フィリピンやインドネシアの諸文化と近隣関係にある文化）に分類されている民族である[7]。

1684 年より 1895 年、清朝は統治下の先住民を「熟番」、統治外の先住民を「生番」、統治に入って間もない漢化の度合いが低い先住民を「帰化生番（化番）」と呼んだ。八橋木伸浩によると、「番」は「蕃」と同意であり、野蛮であることを意味する。そして、「生」と「熟」は「教化」（漢化）したことと、「服属して納税する」か否かの判断の基準として示すものである[8]。しだいに漢人に圧迫された平地の先住民は、漢人社会に同化するか、僻地への離散を余儀なくされていき、やがて清代中期にいたると、先住民らは少数民の位置に転落していったのである[9]。

1895 年、清国は日清戦争に敗れ、台湾を日本に割譲したため、台湾は日本の植民地となった。日本統治当初、台湾総督府は清朝の二大カテゴリーを踏襲しつつ統治下の先住民を「生蕃」、「熟蕃」として区分し、行政的な扱いに差異を設けていたが、名称の侮蔑的な印象を避けるため、1935 年になって「高砂族」・「平埔族」と変更した[10]。「高砂族」は日本人が作り出した名称であるに対し、「平埔族」は、清代に漢人が平原部に住む先住民を指して呼んだ「平埔番」から由来している[11]。なお、「平埔」とは平地、平坦な地形を意味する単語である。

中華民国政府に接収された戦後の台湾において、「山地同胞」・「高山族」などの名称で呼ばれてきた。1980 年代から高まった先住民権利促進運動のなかで、こうした呼称に対して異議を唱え、みずからの手で民族としての呼称を定めようとする「正名運動（民族名承認要求運動）」が起きる。その結果、1994 年には第三次憲法改正によって「台湾原住民」が公式呼称として定められた。さらに、1997 年には「台湾原住民族」に改称されたのである[12]。本稿ではこのような経緯をふまえ、これ以後は「原住民」もしくは「原住民族」の表記で統一する。

今日の台湾の族群概念において、原住民族の二大分類として「高山族」と「平埔族」に区分されており（表 1 参照）[13]、後者の平埔族は漢化の進んだ原住民族を意味する。通婚などにより、その子孫の圧倒的多数は漢人と同化、融合してしまっているため、現在ではグループの大半は消滅に至り、個別の言葉や文化をほとんど残していない[14]。なお、本作の主人公の潘銀花は平埔族の一支族シラヤ族である。

表１　高山族、平埔族の分類（2021 年 2 月現在）

高山族	アミ、パイワン、タイヤル、タロコ、ブヌン、プユマ、ルカイ、カナカナブ、ザキザヤ、ツォウ、サイシャット、タオ（ヤミ）、サオ、クヴァラン、セデック、サアロア
平埔族	ケタガラン、カバラン、タオカス、バゼッヘ、パポラ、ホアニャ、シラヤ、バブザ、マカタオ

出所：台湾原住民全球資訊網ウエブサイト上のデータに基づき筆者作成

第二節　先行研究及び原住民族にむける葉石濤のまなざし

前節では、おもに台湾の原住民族の歴史についてみたが、文学の世界では彼らはどのように表象されているのだろうか。以下に、『西拉雅末裔潘銀花』と同様に、漢人作家が描くシラヤ族の作品を紹介したうえで、本作の先行研究について概観する。さらには、葉石濤が原住民によせる関心や執筆動機について述べることにしたい。

（一）先行研究について

王幼華（1956～）の『土地与霊魂』[15]は、宜蘭地区における漢人移民と平埔族の人々の交わり（通婚、信仰など）にスポットをあてた長編小説である。葉怜芳（1961～）の『鴛鴦渡水』[16]では、泉州出身の漢人女性が台湾に渡り、奮闘する移民生活を主題に据えた物語が展開されているが、この二作の主人公はシラヤ族ではなく、漢民族である。また、王家祥（1966～）の『倒風内海』[17]は、オランダ植民地時代に生きるシラヤ族の人々の命運を描く。だが、作中ではシラヤ族独自の母系社会形態については触れられていない。

上にみた三作との相異点として、『西拉雅末裔潘銀花』にはつぎの特色があげられる。まず、主人公がシラヤ族の女性であることと、母系社会の価値観に沿った主人公の生き方が物語の中核をなすということである。たとえば、陳秀卿や林玲玲らは、「台湾の小説作品において、これまでになく平埔族シラヤ社会の実態をより多く表現し、かつ整った内容が盛り込まれている[18]」との見解を提示している。また、彭瑞金は「シラヤ族の女性潘銀花を描いたストーリーは、多種族文学の創作の先陣をきったといえよう。（中略）台湾文学界における新たなジャンルの出現でもある[19]」と述べたうえで、台湾文学史上における本書の位置づけをつぎのように評している。

台湾文学史上において、最初に平埔族に材を取る文学作品は、葉石濤の『西拉雅末裔潘銀花』である。従前、文学界では原住民をひとくくりにして語り、また、文化的な論議を展開する場を見回しても、平埔族に言及している文献はごく少数にすぎない。ところが九十年代に入ると、平埔族にまつわる言説や研究する風潮がさかんとなるが、明らかに『西拉雅末裔潘銀花』が及ぼした影響といってよいだろう。[20)]

如上の見解が言明しているように、シラヤ族の存在のみならず、彼らの言語、風習、価値観、社会形態等をより詳しく描出した点が高く評価されている。戒厳令解除後の台湾では、台湾の文化や歴史を見直し、台湾人としてのアイデンティティを模索する「本土化」現象が起きるが、九十年代以降に起きた平埔族に対する研究のムーヴメントも「本土化」の一つといってよいだろう[21)]。しかしながら、筆者のみるところ、その多くはナショナルな民族主義を主張するために重点が置かれているのではなく、小林岳二が指摘しているように、「台湾の各地方の歴史や文化の多様性を示す象徴として[22)]」平埔族を語っているものと考えられる。

本土化現象と多元化を尊重しようとする思潮があいまって、『西拉雅末裔潘銀花』に関する先行研究は、とりわけ作中に表象されているエスニシティに注目する論考が多数を占めている。李貞元の「葉石濤の小説作品では、階級やジェンダーよりもエスニシティを重視する傾向がある[23)]」という言述に代表されるように、杜偉瑛や呉達芸もまた、物語世界内の平埔族の文化や風習、言語などにまつわる論考を展開している[24)]。陳玉玲はシラヤ族の女性としての生き方に注目し、主人公は包容力と生命力を兼ね備える「大地の母」の原型であると論じた[25)]。さらに、葉瓊霞は平埔族のエスニシティの描写や表象を通して、台湾文学の主体性の構築についての可能性を提出した[26)]。

むろん、エスニシティは本小説の主柱であり、それに加え、主人公の生のありようは、母系社会であるシラヤ族の思考様式や精神性を大いに体現しているものといえる。だが、従来、主人公を客体化し、相対的に考察する視点が欠落しているのではないだろうか。前述のごとく、潘銀花はシラヤ族として生まれ育ったものの、16 歳以降は漢人社会と関わりあいながら自身の人生を展開してゆく。アイデンティティとは他者や社会との結びつきの中で形成されるものだとすれば、彼女がみずからの出自とは異なる制度・構造の社会、あるいはその社会の成員から受けた影響について再考する必要があるのではないか。殊に、銀花は母系社会独自の価値観を固持しているか否か、と

いう問題を第一に提起しておきたい。結婚と子の親権に関する判断基準にフォーカスを合わせ、第五節にてこの問いを述べることとする。

第二に、五人の漢族男性は主人公の人生に影響を与えたにもかかわらず、彼らについてはさほど言及されておらず、検討の余地があると考えられる。この点を補強する論述として、徐国明と馬嘉瑜の先行研究があげられるが、徐国明は、主人公と男性たちとの関連性に言及したうえで、主人公の性欲や身体性に焦点をあてながら論じた[27]。前出の馬嘉瑜は、五人の男性の差異に着目し、同じく漢族の出身である一方、彼らの間には階層やエスニック・グループ等の違いがみられる点について詳細な整理を行った[28]。本稿において、五人の男性に対する視座の獲得は徐と馬の先行研究に負うところが多いが、しかしながら、従前論じられてきた階級や職業などの側面ではなく、彼らの内側に存し、可視化のできぬ差異を抉り出す試みをしたいのである。そこで、本研究では、「男性性」に関する分析観点を新たに導入し、第四節でこの問題を検討することにしたい。次項では、葉石濤が原住民族に注目したいきさつなどについて述べることとする。

（二）原住民族に寄せる関心

葉石濤は学生時代より晩年にいたるまで、台湾の原住民族に多大な関心を抱いていた。さかのぼること、台南第二中学校二年に在籍中（1939 年）、博物学の授業を担当する金子壽衛男先生と出会う。地質学者でもある金子は「博物同好会」を主宰しており、毎週日曜日になると、葉と数名の生徒は発掘調査に同行していた。遺跡の陶器のかけらや石器、化石などを発掘し、「この遺留物は「生番」や「熟番」の祖先が残したものなのだろうか。それとも古代の台湾には別の種族が存在していたのか」などと疑問が尽きず、好奇心をかきたてられたそうである。葉は、この野外調査で原住民に興味を持つきっかけになったと述懐している[29]。

その頃、葉はアメリカの文化人類学学者である L.H.モルガンの『古代社会』を読み、原始共同体社会における母系氏族や原始共産主義的基礎の確立を説くモルガンの理論を知ることとなる。その知見に触発を受けた葉は、古代台湾の歴史の出発点においては、差別のない「原始共産主義的な母系社会が成り立っていたのではないか」と、いにしえの原住民族にさまざまに思いめぐらしていた[30]。

成人後、葉石濤は書物の知識だけでなく、実際に原住民族らの居住地域で生活をするという実体験を得ることとなる。第一章でふれたように、白色テロ時代に葉は政治

犯として投獄されるが、出所後、小学校の臨時教師の試験に合格したものの、政治犯の前科があったため、原住民族の住む辺鄙な山奥の分校に配属されたからだ。貧しいながらも素朴な原住民たちとの交流を後年、「太白酒，乾杯（太白酒で乾杯)」、「我和泰雅族（私とタイヤル族)」、「流浪的小学教師（さすらう小学校教師)」[31]などのエッセーに記している。

晩年になってもなお、原住民族に向ける注目は途切れることなく続いていたようである。九十年代には司馬遼太郎の『台湾紀行』（朝日新聞社、1994 年）や『アジア読本　台湾』（河出書房新社、1995 年）をはじめ、葉は自身の創作以外にも台湾原住民族に関するエッセーや論文を翻訳している[32]。

ここまでみてきたように、葉石濤は長年台湾の原住民族に注目していたが、中島利郎によると、「台湾社会の「多種族移民社会」という視点を通して、次第に台南の地に住むシラヤ族一女性に収斂していき[33]」、本書のヒロイン潘銀花として結実したのではないかと指摘している。かつて、作家は自身の小説作品のなかで「もっともわが意を得たりと思わせる主人公は潘銀花である。なぜなら、彼女は歴史、文化、種族を一身に象徴しているからだ」と言明している[34]。また、潘銀花という人物の造形にこめた意図について、つぎのように述べている。

> 潘銀花は伝統的な母系社会の象徴であると同時に、台湾の豊饒なる大地の象徴でもあった。彼女は大地の母である。彼女はあらゆる時期に台湾にやってきた移民を受け入れ、彼らと結ばれることにより無数の台湾人の子孫を残したのだ。また、潘銀花はみずからの意志で阿豊［銀花の長男――筆者注］を抱いて龔家を離れるが、これはシラヤ族伝統の母系社会にもとづく考え方がそのような行動を取らせたのであり、彼女はすべての子供は母親に属すが、父親はさほど重要ではないと考えていた。潘銀花は豊穣な台湾大地の母であるばかりでなく、漢民族の伝統的な封建制度に反抗する強くたくましい女性でもあった。彼女は福佬人［第二次世界大戦終結前までに対岸の福建省から入台した漢族、閩南人――筆者注］の性的道具となるのではなく、女性が主体となる自由な性を求めたのである。銀花は戦前戦後あわせて生涯に五人の男を経験した。戦後は新移民の外省人を入り婿とし、二人は仲睦まじく暮らすが、夫に対する態度は横暴であった。これも母系社会の特徴を明確に反映したものである。このほかにも、戦後の歴史的段階を描出するために、作中に二・二八事件や白色テロが台湾人の生活に与えた影響を反映させた。この小説を通して、平埔族が歴史から消失してしまった経緯が理解できるで

あろう。[35]

作家が主人公に付与したのは「台湾の豊饒なる大地の」母や封建社会に立ち向かう反抗者としてのシンボルだけではない。同時に、「平埔族が歴史から消失」したいきさつ、すなわち、シラヤ族が漢人と同化していく過程を彼女の人生に投影していることも明らかであろう。だが、ここで注意せねばならないことは、「消失」ということばの包摂する深意である。それは単に、通婚により「平埔族が歴史から」その姿を消し、漢族と同化したことを言い表しているだけなのか。それともほかの含意を有するのだろうか。この問題については、本章の第五節で再び論ずることとする。次節より作品の概要を具体的にみておこう。

第三節　『西拉雅末裔潘銀花』の概要

本節では、作品の内容構成と文中に描かれているシラヤ族固有の宗教や社会形態、言語使用状況について述べることとする。

（一）作品概要及びシラヤ族の宗教・社会形態・言語について

ここでは、はじめに『西拉雅末裔潘銀花』[36]の作品構成及び初出を以下に記しておくことにする。

①「西拉雅族的末裔（シラヤ族の末裔）」（『台湾春秋』1989 年 8 月）
②「野菊花（野菊の花）」（『中央日報』1989 年 3 月 31 日）
③「黎明的訣別（黎明の永別）」（『台湾時報』1989 年 8 月 6 日）
④「潘銀花的第五個男人（潘銀花の五人目の男）」（『民衆日報』1989 年 8 月 6 日）
⑤「潘銀花的換帖姐妹們（潘銀花の義姉妹たち）」（『台湾時報』1990 年 8 月 11～12 日）
付録　彭瑞金「葉石濤文学年表」

また、1942 年 2 月 1 日『台湾文学』春季特集号に掲載されていた大道兆行の「飛番墓」を葉石濤が翻訳し、タイトルを「西拉雅族的故郷（シラヤ族の故郷）」に改めたうえで本書の「代序（序に代えて）」としている。大道兆行は作者のペンネームであり、本名を呉新栄といい、本業は医師である。「西拉雅族的故郷」の内容は、シラヤ族固有の信仰の儀礼について叙述しているものである。

つぎに、シラヤ族の宗教・信仰や母系社会の史料について概説しながら、主人公・潘銀花の半生の軌跡を摘記しておこう。物語の時代背景は、日本統治時代にはじまり、戦後をむかえ、二・二八事件を経た 1950 年代初頭頃までと設定されている。物語時間は時系列の流れで順行するが、文中、時間や年代を明示する標識として五つの史実が記されている。すなわち①日本植民地時代末期②台湾の中華民国復帰（1945 年）③二・二八事件（1947 年。詳細は本稿第二章第二節を参照）④国民党政府台湾への撤退（1949 年）⑤台湾農地改革条例の施行[37]である。

さて、十六歳のシラヤ族の少女、潘銀花は新店（現・台南県新市区新和村）にある全人口八十人余りの小さな部落に住む。一族は「この二、三百年来キリスト教を信仰しており、祖廟さえも建てていない。九月十六日になると厁姨（巫女）に率いられ、知母義部落（現・台南県新化区虎頭埤）へ行き阿立祖の生誕祭典に参加[38]」する。同族はみなキリスト教徒で、日曜日には村の集会所で礼拝を行うが、しかし何か悩み事がある時には、村の巫女である阿春厁姨をたずねて占ってもらうのだ。「厁姨」とは、阿立祖と人間の仲立ちをする役割を担うシャーマンである。

台湾のキリスト教伝道は十七世紀にさかのぼるが、その後約二百年間の中断を経て、十九世紀後半にイギリスとカナダのプロテスタント長老教会がそれぞれ南部と北部で伝道を開始した[39]。小説世界では銀花一族は集団改宗したが、独自の信仰も保ち続けているという設定である[40]。

ある日、自分の将来の運勢を知りたい銀花は、母親を伴って阿春姨のところへと出向く。「祭壇の上には水がなみなみと入った陶の壷が三つあり、中にはカルカヤの葉が挿されていた。そのほかに豚の頭蓋骨も置かれており、陶の壷の前には米と強い酒が供えられていた[41]」。やがて、阿春姨に神霊が憑依し、彼女は目を大きく見開きながら、大声で泣きわめき始めるのだった。なお、厁姨に関する場面の描写は、葉はオランダ植民地時代の行政長官、フレドリック・コイエット（F.Coyett，1615 頃～1674）の著書、『閑却されたる臺灣』[42]を参照したとのことである。

シラヤ族は古来より阿立信仰を持ち、ご神体の壷を祀る。「阿立」は神また祖先のことを指し、「阿立祖（alidzo）」、「阿立母（alidbo）」などと呼ばれ、多数の神がおり、序列がかけられている[43]。上述したように、オランダ植民地時代にキリスト教の布教により、シラヤ族の多くはキリスト教に教化されてしまったが、一方では独自の信仰を守っている場合もあるようだ。呂依屏は阿立信仰の特徴について、つぎのように論じている。

阿立信仰の特徴としては、神を象徴する像はなく、壷や瓶を使って神の居場所としている。家の祭壇や床に置いている壷の中に水を入れ、下にバナナの葉（あるいは金紙）を敷いている。壷に入れた水には「向（Hyan)」という霊が宿るとされており、厁姨（Ang-i）（巫女）などの人によって「開向（Kwi-Hyan)」の術を施したうえで壷に入れた水が「向水(Hyan-tsui)」になる。[44]

文中にある「金紙」とは、神様に捧げるために作られた紙の銭である。「開向」の術を行うのは、神が壷の中の水にいられるようにするためであるという。[45]

また、シラヤ族の社会形態は母系だといわれているが、はじめに母系社会の定義について確認しておこう。たとえば人類学でいう場合は、遠藤央によれば、「親族集団への成員権が「母」を通じて継承されるというのが最低限の定義」としたうえで、「あくまでも成員権の問題であり、母性や父性、父との関係といった点は問われない」と述べている[46]。

シラヤ族が母系社会であることを示す証左として、清朝の史料にもその記述をみることができる。『裨海紀遊』には、「男を生むことを重んぜずして、女を生むことを重んぜしむ。家園は原より児郎に与えず[47]」とある。『諸羅県志』にも、「女を生むことを重んじ、入り婿を迎える習わしがある。また、父親の家系には属さない。ゆえに女が生まれると「もうけがある」と言い、すなわち喜ばしいことである。男が生まれても入り婿となるので、「損をする」と言われる[48]」とある。さらには、清国時代に交わされた土地売買契約書にもその痕跡をうかがい知ることができ、土地の継承者の大半は女性が占めている[49]。

では、言語使用状況はどのようなものであったのか。この頃には、銀花は一族と同じように固有の言語をほぼ話せず、Ma（父親)、Na（母親)、Uran（雨)、Ibutun（福建人)、Zarun（水)、Tabin （靴)、Banu（海)、Zamarit（天の神）などの単語だけを理解することができ、みずからの言語を失いつつあった。言語面からも原住民族が同化されてゆく状況が読み取れるだろう。次項では、銀花の歩んだ半生の軌跡をたどることとしよう。

（二）主人公・潘銀花の半生の道のり

時は日本植民地時代の末期。主人公・潘銀花の実家は、台南の大地主である龔家から畑を借りている小作農だが、小作料を納めた後はほとんど残らず、むろん生活は楽

ではなかった。銀花はある日、シラヤ族の村で狩猟中に足をけがした龔家の二少爺（若だんな）・英哲に出くわし、彼を助けたことがきっかけで龔家へ奉公することとなる。やがて二少爺と恋仲となり身ごもる。龔英哲から求婚されるが、長男阿豊を出産後、銀花は乳飲み子を連れて龔家を出奔する。その後、いったん実家に身を寄せ、男やもめで、連れ子の娘がいる王土根と結婚する。しかし、仕事のさなか米軍の空爆にあい、王は命を落としてしまう。

未亡人となった銀花は王土根の残した財産や畑仕事で生計を立てながら、阿豊と王の連れ子・招治の子育てをする。時代は移り、二・二八事件が起きた際に、政治に疎い銀花は逃走中の若者・朱文煥をかくまうが、二人が結ばれた翌日には朱は連行される。それから一年が過ぎようとした頃、ある日、畑仕事をしていた時に、銀花は見知らぬ外省人の兵士に犯され、妊娠してしまう（後に出産し、阿松と名づける）。母親のすすめもあり、紹介された外省人の汪書安と再婚し、生活はますます安定した。ある時、漢族の高錦綢・錦緞姉妹と出会い（高錦綢の夫は二・二八事件で銃殺された犠牲者である）、身寄りのないふたりに同情した銀花は同居の話を持ちかけ、義姉妹の契りを結ぶ。その頃、銀花は甘藷やキャッサバなどの農作物の卸売りや雑貨商店を経営し、人手を必要とする事情もあったのだ。

こうして、潘銀花は五人の男と関係し、三人の子供を育てるかたわら漢族の義姉妹らとともに商店を営む。使用人も加え、十一名の大家族の主となった彼女はみずらの言語をほとんど失っているが、シラヤ族の末裔として逞しく生きる精神と肉体は受け継いでいるのである[50]。さらに、異なる出自の人々が大家族として暮らす設定にも注目したい。物語のエンディングは対立や分断ではなく、異なるエスニック・グループの共存で幕を閉じている。そこには作家が思い描く、多種族社会の台湾のあるべき姿を示唆しているのではないか。以上、シラヤ族固有の宗教や社会形態などに加え、主人公の半生の道のりについて概説したが、次節では、銀花の人生に影響を及ぼした五人の漢族男性に焦点をあてつつ論じてゆく。

第四節　五人の男たち

ある時、銀花は巫女の来春姨に運勢を占ってもらった。すると、来春姨には五つのUttin（男根）が見え、そのうちの二つはたちまち消えてしまったという。「銀花は自分の人生の中で、五人の男が存在していることがはっきりとわかった[51]」。本節では「男性性」の概念を参照しながら五人の男の形象を中心に整理し、作家が彼らに付与

したイメージや主人公との関係性について述べることとする。

（一）五人の漢人男性の形象

【一人目の男・龔英哲または二少爺（閩南人）】

潘銀花の初恋の相手であり、地主家庭の次男で、職業は医者である。ふたりは主僕関係にあったが、徐々にひかれあってゆく。「銀花の部落では女性は上位を占めていたので、彼女は天真爛漫で、二少爺と自分の性別をとりたてて気にすることもなかったし、ましてや自分が身分の低い召使いだということも自覚していなかった[52]」。母系社会で育った銀花には階層や性差の区別が存在しておらず、人間関係の捉え方がフラットである。かたや新式の高等教育を受けた二少爺も銀花を蔑視することはなかった。愛する女性に対し、対等に接する新しい時代の男性像が描かれている。銀花が妊娠したことを知ると、彼はプロポーズをするが、妾になることを嫌がった銀花はその求婚を断り、龔家を出奔する。

時は流れ、未亡人となった銀花は偶然にも二少爺と再会する。彼はすでに家柄のつりあう女性と結婚し、そして再度、銀花に妾となってくれるよう懇願する。

> 「また一緒に暮らす？でもあなたはもう奥さんをもらったじゃないの？」と、銀花は皮肉っぽく二少爺に言った。
>
> 「それとこれは別の話だ。一軒家を買って、お前と阿豊［銀花と二少爺の息子――筆者注］をそこに住まわせるよ。」[53]

高等教育を受けた植民地時代の知識人として描かれている一方、一夫一妻多妾制を容認する思想を有する言動から読み取れるように、封建的な父権社会の男性としての側面をも持ち合わせている人物だといえる。

【二人目の男・王土根（閩南人）】

龔家を離れた後、銀花は子連れで中年のやもめ男・王土根と結婚する。土根は日本統治期の時代背景を強くにじませた人物である。彼は粗野で醜いが、日本人の軍需工場で牛車を操る仕事をしており、収入はかなり多かったため、銀花は衣食住の悩みもなく満ち足りる日々をすごしていた。だが、幸せは長続きせず、別れは突然訪れた。

> ある日の朝、土根は弁当を持って仕事に出かけたきり、再び家に戻ってくること

はなかった。（中略）土根は重い鉄くずをめいっぱい牛車に載せ、台南に向かっていたところ、台南の郊外で米軍の B29 爆撃機の爆撃にあってしまったのだ。直撃ではなかったが、横から殴りつけるように飛んできた爆弾の破片で、土根と黄牛は粉々にされてしまった。[54]

土根は労働者階級に属する人物で、家庭内では稼得役割を一手に引き受けている。文中、銀花との両性間の描写において、女性蔑視の言動は見あたらない。

【三人目の男・朱文煥（閩南人）】

時は二･二八事件のさなか､未亡人となった銀花は倒れていたある若者をかくまう。だが、二人が結ばれた翌日には彼は特務に連れ去られてしまう。

意外にも朱文煥は落ち着いた様子で、しきりに振りむき銀花に感謝を伝えようとした。「銀花さん、どうもありがとう。いつかきっと恩返しに来ます。僕のためにいろいろとしてくれたこと、心から感謝しています。」（中略）このように、潘銀花の人生の第三番目の男は、マンゴー畑のはずれ、あたり一面野菊の花が咲き乱れる広野の中に消えていった。[55]

その後、二人は二度と会うことはなかった。朱文煥は主人公のうたかたの恋の相手であると同時に、二・二八事件で逮捕された犠牲者の姿が投影されている。

【四人目の男・見知らぬ兵士（外省人）】

暴行された銀花と外省人兵士は、被害者と加害者の関係性であるにもかかわらず、しばらく日が経つと、銀花は寛容的ともいえる思いを抱き始める。

その男はきっと労働者で貧乏な庶民だろうと思った。だって、大陸の人間は「よい鉄は釘にはならず、よい人間は兵隊にはならぬ」とよく言っているから。もしそうだとしたら、彼女に乱暴をはたらいた兵士も極悪人ではなく、餓えのあまり野獣になってしまったのだと彼女は直感的に思った。[56]

主人公の心情をどのように解釈すればよいのだろうか。戦後の台湾では、国民党一党独裁による強権政治の支配が長く続いたが、葉石濤によれば、主人公が外省人兵士に暴行されるというプロットには、国民党政府に迫害を受けた台湾の過去を暗喩する含意が込められているという[57]。作家のことばからは､台湾の複雑な歴史に起因する、

異なるエスニック・グループ間の感情の葛藤や軋轢を読み取ることができよう。

しかしながら、主人公は加害者の外省人兵士に対し激しい憎悪の感情を示していない。では、作家はなぜそのように叙述したのだろうか。台湾は多民族・多文化社会である一方、何義麟が指摘するように、長らくエスニック・グループ間には、社会的亀裂や歴史認識をめぐる対立の問題も横たわっている[58]。いわゆる「省籍問題」は台湾社会を分断する一因であるといわれてきたが、それらは決してたやすく解決できる課題ではないだろう。だからこそ本省人であり、白色テロ時代の被害者でもある葉は屈折した心理を抱えながらも、あえて加害者を断罪しない主人公を描いたと考えられまいか。多民族共生の道を模索する台湾社会への一つの提案として。

【五人目の男・汪書安（外省人）】

再婚を望む銀花には切実な理由が三つあるのだ。王土根亡きあと、銀花は「長い夜を過す方法がなくなった[59]」ことと、「男手がいない中で農業をするにはなにかと不都合で[60]」あり、「畑の収穫だけで五歳の阿豊と八歳の招治を育てるのはとても大変で、彼女は夫を見つける必要があった[61]」からだ。そこで、紹介された山東省出身の外省人・汪書安を入り婿として迎える。二人の力関係を象徴するかのようなジェンダー関係の倒置を示す場面をみてみよう。

> 汪書安は体格が大きく、まるで緑林の人間のように容貌魁偉であった。（中略）彼女は彼の優しいまなざしが気に入った。その眼は象のように無邪気だったからだ。銀花と向かいあうと、汪書安はもじもじと恥ずかしくて、頭をあげることもできず、まるで花嫁のようであった。確かに彼の立場は花嫁そのものだ。銀花のところへ入り婿になるのだから。[62]

また、「彼女は六分の畑を持っており、まわりの福建人の農民に比べても多かったので、もはや社会的弱者ではなかった[63]」。結婚後、金銭面も含め、全般的に銀花が実権を握っているが、彼女が経済的に自立していることも、二人の関係性に少なからずの影響を与えていると考えられる。

以上、銀花と五人の漢人男性との関係性や彼らの形象について整理したが、その内容をまとめよう。龔英哲は日本植民地時代のエリートという身分であるが、他方では封建的な思想を垣間みることができ、したがって新旧の二面性を内包する人物だといえる。労働者の王土根（日本植民地時代）や知識人の朱文煥（二・二八事件の受難者）は、それぞれに歴史の背景をにじませていることがうかがえる。また、銀花を乱暴し

た加害者の外省人兵士に対し、善悪などの二元論で断罪していない。作家は、台湾の歴史の過程で集積されてきたエスニック・グループ間の感情の複雑さをほのめかしつつ、他方、多元化社会のめざすべき選択肢を提案しているのではないか。そして、五人目の汪書安は漢人男性ではあるが、銀花の入り婿となり、伝統的な男性主権の家父長制社会から逸脱した存在だと考えられる。

（二）描出された「男性性」

前項でみたように、五人の男性の共通項は「漢族」だけであり、彼らに関する作中の叙述を個別にみると、職業や階級、学歴、思考様式、価値観（一人目の英哲と五人目の汪書安に代表されるように）などの違いが存在していることが浮かび上がる。これまで、前述の徐国明や馬嘉瑜のように、五人の漢族男性の相違点に着目した先行研究はあるものの、他方では彼ら五人を同一視し、家父長制社会の象徴として位置づけする論述も見受けられる。その証左として、本作は家父長社会対母系社会の文脈で論じられてきた。たとえば、黄聖閎は「男性的な覇権／女性的な包容、陽性／陰性をマッチアップすることにより、漢人社会（文明社会）と平埔族社会の二元対立を表現[64]」しているとの見解を示している。

本作を研究するうえで、この観点は有効に機能するところがあることは否めないが、しかしながら、五人の漢人男性を家父長制社会の代表格として定めるのならば、つぎの疑問点が残る。彼ら五人は漢族ではあるものの、たとえば銀花の入り婿となった汪書安のように、全員が支配者たる家長を志向していると断言することはできない。また、銀花と彼らとの両性間の関わり方を注意深くみると、銀花が主導権を握ることが多々あり、必ずしも父権社会にみる男性の優位な立場と女性の従属性が固定された構図ではないのである。これらの問題をいかに説明できようか。

この問いを考えるためには、「男性性（masculinity）」をめぐる視点を導入したい。まず、男性性の定義とは何か。「社会が男に対して「どうであるべきで、どうふるまうべきか」を要求し、この社会の期待に応えることで、初めて社会から男として認知される。あるいは個々の人間が男という社会的カテゴリーの構成員になっていくプロセスそのものを男性性ということもできる」と、高嶋航は述べている[65]。

「男性性」を分析するための概念として、頻繁に引用されるものの一つが、オーストラリアの社会学者であり、男性学者でもあるコンネル（Connell.R.W）の「ヘゲモニックな男性性（hegemonic masculinity）」であろう。川口遼によると、コンネルは、

「どんなときもある一つの形式の男性性が他の男性性よりも文化的優位にある」として、それを「ヘゲモニックな男性性」と名づける[66]。すなわち、当該社会でもっとも優位に立ち、中心的な位置を占める男性性である。また、ひとつの社会には複数の男性性が存在し、階層性をなしており、ほかの男性性を「共犯的男性性(complicit masculinity)」、「従属的な男性性(subordinated masculinity)」、「周縁化された男性性(marginalized masculinity)」と分類している[67]。

再び上述の問いに立ち返ってみよう。コンネルの概念に従い、五人の漢人男性を個々別々にみると、全員が当該社会で優位的な位置を占める存在である「ヘゲモニックな男性性」を有しているとはいえまい。換言すると、「漢人社会＝家父長制社会」という等式は成り立つにしても、「漢人男性＝ヘゲモニックな男性性」と断言することはできないだろう。そのうえで、前項で述べた五人の男性の言動や描写をふまえると、ヘゲモニックな男性性に区分できる人物は二少爺ひとりのみと思われる。彼は明らかに家父長社会で最も優位に立つ階級の人物であるからだ。

周知のごとく、漢族社会では、古くに確立した家父長権力は久しい間支配を続けてきたのである。仁井田陞によれば、「家長又は家父長は家族共同体の首長であり、その首長が家族共同体のために行う権力を家長権または家父長権力」と定義している[68]。繰り返しとなるが、裕福な地主家庭で生まれ育った二少爺は、銀花と再会したとき、すでに正妻がいたにもかかわらず、悪びれた様子もなく彼女に妾としておさまるよう持ちかける。一夫一妻多妾制を容認する封建的な思想の持ち主であり、強烈な自己主張をもできる当該社会の高階層の男性である。コンネルの定義に従えば、「ヘゲモニックな男性性」に分類できるのである。

二人目の男・王土根は労働者階級に属しているが、銀花と再婚する際、彼女の出自や子持ちであることを気に留めず、また、二人はほぼ対等的な立場であるため、王は「ヘゲモニックな男性性」に該当しないだろう。また、五人目の男・汪書安は、銀花の入り婿となったばかりでなく、家庭内での力関係は明らかに銀花より下位である。したがって、家父長社会の規定するジェンダー規範からはずれた存在だと考えられる。さらに、三人目の男・朱文煥と四人目の男・銀花を暴行した外省人兵士に対する描写をみても、彼らをヘゲモニックな男性性とする判断材料を視認できない。

かように、一概に漢族男性とはいえども、各々の男性性には差異がみられる。すでにふれたように、従来、本小説を「原住民族」と「漢族」、もしくは「母系社会」と対峙する「家父長社会」という構図や文脈に沿って論じる傾向もあるが、その背景には、銀花と関係した漢人男性を漢族社会の代表者として位置付けることに起因するのでは

ないか。しかしながら、彼らの「男性性」をみると、必ずしも全員がヘゲモニックな男性性の持ち主、すなわち当該社会で優位に立つ階層とはいえない。したがって、彼ら全員を家父長権力の代行者と捉えるのは妥当とは言い難いだろう。また、男性性の差異によって、漢族社会の内部に存在する高低差をも浮かび上がらせているのである。

ところで、五人の男との関係性を観察する過程において、主人公は常にみずからの意思にもとづき決断を行うことも明らかとなった。たとえば、相思相愛の龔英哲から求婚されたにもかかわらず、彼女は拒否して龔家を離れる。それゆえに、銀花はしばしば父権社会制度から逸脱した主体であり、母系社会の象徴としてみなされてきた。彼女の主体性の基底には、母系社会固有の価値観を含有しているが、他方、小説世界で述べられている銀花の言動はすべて母系社会のそれに則るかといえば、一貫性があると断言できぬ部分もある。次節では、この問題について述べてゆく。

第五節　潘銀花の価値観に潜むダブル・スタンダード

本節では、結婚や子供の親権に関する主人公の価値判断について検討を加えることとする。先にふれたとおり、銀花は母系社会で生まれ育った原住民であり、これまで母系社会のシンボリックな存在として捉えられてきたが、他方で漢人社会の影響を受けなかったかどうか、とりわけこの点に留意しながら論じてゆく。

初恋の相手である二少爺は銀花の妊娠を知り、はじめは彼女に中絶を勧めるが、しかし銀花は出産の決意をする。その後、二少爺は銀花にプロポーズをし、龔家からも妾としての手厚い待遇を持ちかけられるが、銀花は承諾しなかった。彼女はその理由をつぎのように語る。

> 「あなたは医者だし、読書人の家柄だから、私とはつりあわないわ。結婚したところで、お互いに面倒なことが増えてしまいそうで、この先も幸せにはなれないよ。（中略）それに、わたしの一族はあなたたちの考え方とは違って、Na（母親）は一家の主ではあるけど、Na（母親）と Ma（父親）は全く平等なの。」（中略）お前を妻にしようと彼が言った言葉にも銀花は心から感動した。でも、それは不可能だということもはっきりと知っていたのだ。たとえ二人の愛情が永遠に変わらなくても、まわりの人たちの心無い言葉や中傷を止めることはできない。[69]

日ごろより龔家の召使いたちから陰で「番仔（野蛮人）」と呼ばれ、銀花は腹立たし

く思っていた。また、なぜ金持ちの二少爺と結婚しないのかとうらみがましく言う母親に対し、銀花は苦しい胸中を打ち明ける。「他人がわたしたちをどんなふうに扱っているのかを考えてみたことはあるの？まるで家畜と同じよ。召使いたちは陰でわたしのことを平埔番と呼んでいるのよ。それにわたしは字を読めないし、日本語も話せないから、このまま龔家にいたらこの先もきっと苦労するに違いないわ[70]」。中野裕也が指摘しているように、「漢族社会には以前から原住民族に対する根深い偏見と差別も存在していた[71]」とは、この状況を指し示しているのであろう。銀花には明確な階層による区分が存在しなかったからこそ、両者間に横たわる懸隔を敏感に感じ取り、差別に対する反発心もあったのではないかと考えられる。

第二の理由として、妾としての手厚い待遇を持ちかけられても、「家畜と同じように飼育されている生活になりかねない。むろん家畜には餌の心配はないだろう。でもそれは自分が働いて得たものではない[72]」と考え、「両手を動かし、みずから働いてこそ天地に恥じないシラヤ人[73]」とも思っていた。彼女にはシラヤ族としてのプライドや進取に富む気性が培われており、自立志向や自尊心の高さがうかがえよう。母系社会固有の思考様式に加え、これらが主体性のある生き方の原動力となったのではないだろうか。

だが、漢民族思想の影響を全く受けなかったのかというと、そうではないようだ。つぎに別の角度から銀花の考え方を検討しておこう。一人目の子供を出産した際には、誰にも告げず、いささかのためらいもなく長男を連れて龔家を出奔する。彼女はシラヤ族の考え方に即して、「この子は自分の子供であるということこそが、何にもまして重要なことだ[74]」とし、子供の親権は母親に属すると捉えていたからにほかならない。

しかし、さらに詳しくみると、銀花は非常に子供の性別にこだわっていた。龔家は何度も次男・英哲の血筋を引く子供を引き取ろうと交渉するが、そのことを実家の両親から聞きつけた銀花は、「女の子なら龔家に返してもいいが、でも阿豊は男の子だからそうはいかない[75]」と答えるのだった。また、五人目の男・汪書安と結婚する前の協議では、「もし男の子が生まれたら潘姓とする。女の子なら汪姓でいいわ[76]」と伝えている。先述したように、母系社会では女性が上位を占めているため、子の性別においては、男ではなく、女の子が生まれることが重んじられ、喜ばしいこととされていた。だが、銀花は男子を重視していたのだ。それはなぜか。

ここでひとつの仮説をたてよう。銀花はシラヤ族の低劣な地位を明確に認識しており、漢族と掛け合うに際して、子が男であることの優位性を戦略的に捉えていたからこそ、性別にこだわっていたのである、と。しかしながら、彼女の言動を改めて確認

すると、出奔後、龔家はたびたび銀花サイドに良い条件を提示し、阿豊を返して欲しいと交渉を持ちかけていたが、彼女はそれに応じることは一切なく、龔家とは無縁な世界で生きていこうと決心するのだった。すなわち、銀花は交渉の有利なカードとして、子供を持ち出す意思はないと考えるのが適切であろう。また、汪書安との結婚生活にいたっては、一家の主は銀花であった。家庭内の主導権を握る銀花に、漢人男性の汪と立ち回る必要性はあるのだろうか。

母系社会の価値観に基づくのであれば、子の性別はむしろ女を重視すべきである。ところが、銀花の場合、「親権は母親に属する」という考え方は母系社会に則っているが、一方で「性別」に関していえば、封建的な漢人社会にみられる男尊女卑の思想が入り混じっている傾向が見てとれる。以上の分析から判断すると、彼女は母系社会独自の思考様式を固持しているとは言いがたいだろう。

従前、銀花は家父長制社会と対峙する母系社会のシンボルとして位置づけられてきたが、その理由は、彼女が父権社会と相反する母系社会制度の考え方を有する持ち主であり、銀花の生のありようは母系社会の価値観を体現しているからである。しかしながら、主人公の言動からは漢族の影響を受けている痕跡を読み取ることができ、彼女の判断基準はもはや母系社会固有のものではないことが浮き彫りとなった。この点を踏まえたうえで、本章第二節にて呈した疑問を再度ここで考えてみよう。葉石濤が作中で提示しようとした、平埔族が漢民族に「同化」される過程とは、単に通婚という制度的なものを意味するだけではないだろう。思考方式、判断基準、精神面などといった内面的な部分においても、漢族社会からの影響を受けながら、平埔族独自の価値観が変容し、融合されてゆく側面をも含むと考えられる。

かつて、シモーヌ・ド・ボーヴォワールが語った言葉を反芻せずにはいられない。「人は女に生まれない、女になるのだ[77]」。女性という存在は生得的なものではなく、社会で伝承された習慣や禁忌などによって人為的に作られたものだと喝破した。女性とは文化的・社会的・歴史的に生成されたものであるならば、漢人社会の周縁で生きてきた銀花の姿にもそのことを瞥見できるのではないか。

本節では、主人公の価値判断を明かすべく、親権や結婚の際にくだす決断を中心に考察した。その結果、主人公は母系社会独自の考え方やシラヤ族としての誇りを持つ一方、子供の性別について強くこだわるなど男尊女卑の思想も持ち合わせていることが露呈した。銀花は父権社会の対極にある母系社会の代名詞として語られてきたが、彼女の内面はファジーな部分をも含有していると考えられる。

第六節　「種族」と文学観との接続性

以上の論議を踏まえながら、本節ではテクストにみる、三大要素を含む葉石濤の文学観の反映について検討することにしたい。『西拉雅末裔潘銀花』において、「歴史」は物語の遠景に存しているものの、前面に押し出して描かれてはいない。小説世界内では「種族」と「風土」――とりわけ社会構造――をクローズアップし、叙述されていると考えられる。本作の主題は「種族」だといわれてきたように、文中、エスニック・グループにまつわる描写を散見する。第三節でみたように、殊にシラヤ族の信仰や言語、母系社会の思考様式を中心に述べられているほか、作中では生活習慣についての叙述をも散見する。

銀花が初めて漢人家庭で奉公することとなり、彼女の目には多くの事物が新鮮に映る。とりわけ、生活習慣の違いには驚くばかりであった。村にいたころは、時おり塩で歯磨きをしていただけだったが、漢人家庭では口臭防止のためにと、毎日欠かさず歯磨きをするよう言われる。また、銀花には「入浴」という概念はなく、彼女にとっての「入浴」は河に飛び込み泳ぐことであった。一方、奉公先では、「大きな木の桶を使い、お湯は厨房から運ぶ。そして体を洗い終わった後の汚い水は他の人に見られぬよう、夜の暗闇にまぎれて厨房の後ろの下水に捨てなければならない[78]」と教わる。そのほかにも、銀花のルーツを示す場面として、二少爺の部屋で歌う描写があるが、銀花は「一族の四方歌を歌うことができ、彼女が歌いだすとあたり一面、古代台湾の大自然の息吹に満ち満ちていた[79]」。

葉石濤は、自身の創作に「種族」に材を取る理由について、つぎのように語っている。「文学作品は歴史を反映するほか、地域独有の風土をも表現しなければならないだろう。台湾の場合は、異なる時期に異なる社会制度が存在し、異なる種族には異なる風習が存在する。（中略）このような社会背景があるゆえに、おのずと独自性を備わった文学風格が形成されることとなる[80]」。すなわち、「種族」に関する叙述は、台湾文学の固有性を表出する可能性を有しており、それゆえに、各エスニック・グループの「異なる風習」を重視するのである。この観点について、テーヌの概念とリンクしている部分もあるようだ。

> 文學作品といふものは、單なる想像の遊戯でも、熱し易い頭脳から生れる世と孤立した氣まぐれでもなく、周圍の風習の模寫であり、ある精神狀態の記号であることが發見された。そこから、文學上の記念碑的作品に依據して、數世紀以前人

間の感じ方や考へ方を再發見することができると結論された。それは實際に試みられ、かつ成功を見たのである。[81)]

葉は、「種族」の風習を描くことによって、台湾の独自性を示す可能性に言及しているのに対し、他方、テーヌは「種族」という観点に特定してはいないが、、文学創作において、「周圍の風習の模寫」は時を隔てた人々の「感じ方や考へ方を再發見」できうると論じているのである。いずれにせよ、両者ともに「風習」を重要視する存意がうかがえる。

また、「社会構造」に着目すると、前述したとおり、テクスト内には三種の「社会構造」が描出されていると考えられる。従来論じられてきた、漢族・家父長制社会と原住民族・母系社会、という二つの社会構造のほか、文中、シラヤ族に対する差別的な扱いの叙述が示すように、エスニック・グループ間の階層差、すなわち原住民族と漢族をめぐる構造的格差が述べられていた。第三に、「男性性」の概念を用いた分析から、漢族男性たちの男性性の差異が浮かびあがり、漢人社会の内部に存する階層秩序の構造の一端が露見したといえるのではないか。

小結

『西拉雅末裔潘銀花』を検討するうえで、切り口として二元論のみを用いることには限界があるのではないだろうか。本研究はかような問題意識から出発し、本小説を捉えなおそうとする試みである。では、なぜ本小説はこれまで二元対立論で語られることが多いのか。それは主人公を母系社会、そして彼女と関係した五人の漢族男性を家父長制社会の象徴としてみなすことに起因するためであろう。むろん、その言述は間違いではない。がしかし、二分法で区分し、二項対立を自明視するあまり、個々別々の差異を見落とす陥穽に陥りかねないのではないだろうか。

先述したとおり、五人の男性の相違点について、彼らの階級や種族のちがいを整理した馬嘉瑜らの先行研究があげられるが、本稿ではさらに「男性性」の観点から検討を加えることとした。五人の共通点は「漢族」であるが、種族（本省人と外省人）や階級だけでなく、男性性の中にも階層秩序があることを確認した。また、主人公の潘銀花の結婚や親権に対する考え方に着目し、彼女の判断基準の一貫性について検討した。母系社会を出自に持つ主人公は、人間関係において截然たる階層による区分の概念を持たず、その上、自尊心や自立志向を高く持っているため、隷属されることを拒

み、みずからの生き方を選択する人生を可能にしたことによって、自己の運命の主人となりえたのである。

しかしながら、他方では子供の親権問題にみるように、漢族思想の影響とおぼしき男尊女卑の考え方が表れている。従来、主人公は封建的な父権社会に対抗する女性だと語られてきたように、その一面を否定することはできまい。だが、判断基準などの内面的な部分においては、漢族社会の思想から影響を受け、母系社会独自の思考様式が変容していることも確かのようだ。さらに、原住民の銀花が外省人の夫や漢族の義姉妹らとともに大家族として暮らす設定は、二項対立による分断ではなく、むしろ異なるエスニック・グループが共存する多元社会のあり方を示唆しているのではないと考えられる。

以上の論議をふまえつつ、本小説における葉石濤の文学観の反映のありかたについて考えると、「種族」を表出するうえで、とりわけ宗教や言語、風習、価値観、生活様式などの側面に焦点をあてながら描写していることが特徴としてあげられる。台湾の「エスニック・グループ」や「社会制度」を叙述することによって、台湾文学の独自性を浮かび上がらせたい、という作家の創作意識を看取できるだろう。また、「風習」に重きを置く観点は、テーヌの説と類似点があることを確認した。さらに、社会構造に関していえば、三つの社会構造が叙述されていると考えられる。すなわち、①家父長制社会と母系社会②漢族とシラヤ族の二つの社会にみる、エスニックな階層性③男性性の高低差があらわす漢族社会の内部構造、である。

【註】

（1）王甫昌著、松葉隼・洪郁如訳『族群　現代台湾のエスニック・イマジネーション』、東方書店、2014 年、15 頁

（2）同上書、16 頁

（3）同上

（4）同上書、9－10 頁

（5）同上書、49 頁

（6）王甫昌著、田上智宜訳「現代台湾における族群概念の含意と起源」『日本台湾学報』第 10 号、2008 年、176－191 頁

（7）綾部恒雄監修、信濃毎日新聞社編『世界の民　光と影』上巻、明石書店、1993 年、

162 頁

（8）八木橋伸浩「台湾原住民角力事情覚書」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』第 7 号、2014 年、31 頁

（9）前掲書『世界の民　光と影』上巻、163 頁

（10）綾部恒雄監修、末成道男・曽士才編『世界の先住民族―ファースト・ピープルズの現在―01　東アジア』、明石書店、2005 年、110 頁

（11）小林岳二「伊能嘉矩の台湾原住民研究」『学習院史学』第 37 号、1999 年、74 頁

（12）前掲八木橋伸浩論文「台湾原住民族角力事情覚書」、32 頁

（13）台湾行政院原住民委員会公布資料をもとに筆者作成。原住民委員会全球資訊網ウエブサイト http://www.apc.gov.tw（2021 年 2 月 26 日筆者最終閲覧）

（14）日本統治時代にはすでに彼らの生活は漢人とほぼ同様で本来の姿が失われ、祖先祭祀などの時に伝統的な姿の一端が示されるのみとなった。詳しくは、殷允芃編、丸山勝訳『台湾の歴史―日台交渉の三百年』、藤原書店、1996 年、102 頁を参照されたい。

（15）王幼華『土地与霊魂』、九歌出版、1992 年。邦訳には、石其琳訳『土地と霊魂』、中国書店、2014 年がある。

（16）葉怜芳『鴛鴦渡水』、皇冠文学出版、1997 年

（17）王家祥『倒風内海』、玉山出版、1997 年

（18）陳秀卿・林玲玲「発現平埔―葉石濤与西拉雅族書写初探」『黄埔学報』第 64 期、2013 年、135 頁

（19）彭瑞金「出入人間錬火―葉石濤集序」、『葉石濤集』、前衛出版、1991 年、12 頁

（20）彭瑞金「試探葉石濤的多種族風貌台湾文学論」前掲書『駆除迷霧找回祖霊　台湾文学論文集』、97 頁

（21）前掲小林岳二論文、72 頁

（22）同上

（23）李貞元「論葉石濤小説中的＜台湾女人＞」『台湾時報』、1994 年 7 月 18 日

（24）杜偉瑛「従葉石濤小説《西拉雅族的末裔》系列談平埔族」、『淡水牛津台湾文学研究集刊』第 1 期、1998 年、53－96 頁。呉達芸「台湾阿媽的典型―潘銀花」『小説与戯劇』第 9 期、1997 年、7－12 頁

（25）陳玉玲「葉石濤小説中的女性原型」『台湾新聞報』、2001 年 12 月 17 日

（26）葉瓊霞「文学主体性的建立」『台湾新聞報』、1999 年 5 月 29 日

（27）徐国明「女性性欲的再現与批判――析論葉石濤『西拉雅末裔潘銀花』中的種族、性別与台湾意識」『台北教育大学語文集刊』第 14 期、2008 年、239－262 頁

（28）前掲馬嘉瑜論文

（29）葉石濤「彩陶」『中華日報』、1989 年 1 月 28 日。葉石濤「考古夢」『台湾新生報』、1990 年 6 月 22 日

（30）葉石濤「発現平埔族―我為什麽写《西拉雅末裔潘銀花》」、『文訊』178 期、2000 年、98 頁

（31）葉石濤「太白酒，乾杯」『台湾新生報』、1991 年 10 月 9 日。葉石濤「我和泰雅族」『民衆日報』、1998 年 2 月 8 日。葉石濤「流浪的小学校教師」『台湾新聞報』、1998 年 7 月 26 日～27 日

（32）清水純著、葉石濤訳「民主化後的平埔族」『民衆日報』、1996 年 4 月 27 日。小林岳二著、葉石濤訳「在泰雅族村落裡―原住民与日本」『民衆日報 1996 年 5 月 7 日～14 日。馬淵悟著、葉石濤訳「入贅的男人―原住民阿美族的婚姻」『更生日報』、1996 年 7 月 7 日。笠原政治著、葉石濤訳「留在魯凱族村落的「身分制度」『中華日報』、1996 年 7 月 28 日、などがある。

（33）葉石濤著、中島利郎訳『シラヤ族の末裔・潘銀花（葉石濤短篇集）台湾郷土文学選集Ⅳ』、研文出版、2014 年、「解説」234 頁

（34）蔡芬芳「葉石濤訪談記」前掲書『葉石濤全集 23』、341－342 頁

（35）前掲文、葉石濤「発現平埔族――我為什麽写《西拉雅末裔潘銀花》」、98 頁

（36）葉石濤『西拉雅末裔潘銀花』、草根出版、1996 年。本稿で使用するテクストは、前掲書『葉石濤全集４』（収録作品：「野菊花」、「西拉雅族的末裔」、「黎明的訣別」、「潘銀花的第五個男人」）、及び『葉石濤全集５』（収録作品「潘銀花的換帖姐妹們」）に拠る。また、日本語訳はすべて筆者によるものである。なお、邦訳は、註（33）を参照されたい。

（37）農地改革は三段階に分け行われ、改革に関する政策や条例の施行は以下の通りである。①「三七五減税」（1948 年）②「台湾省放領公有地扶植自耕農実施弁法」（1951 年）③「実施耕者有其田条例」（1953 年）

（38）「西拉雅族的末裔」、前掲書『葉石濤全集４』、194 頁

（39）金子昭「台湾先住民族とキリスト教伝道――とくにタイヤル族の長老教会について」『天理大学おやさと研究所年報』第 22 号、2016 年、23 頁

（40）陳秀卿「沿山地区哆囉国社群移住村落初探――以白水溪庄為例」『第二届南瀛研究国際学術研討会』、2008 年、137－152 頁

（41）「西拉雅族的末裔」、前掲書『葉石濤全集４』、203 頁

（42）コイエット著、谷河梅人訳『閑却されたる臺灣』、台湾日日新報社出版、1930 年

（43）呂依屏「台湾シラヤ族と夜祭とエスニシティの構築」『総研文化科学研究』第 16 号、

2020 年、5 頁

（44）同上、11 頁

（45）同上

（46）田中雅一・中谷文美編『ジェンダーで学ぶ文化人類学』、世界思想社、2005 年、59 頁

（47）郁永河『裨海紀遊』、『台湾文献叢刊第 44 種』、台湾銀行経済研究室、1962 年、44 頁

（48）周鍾瑄『諸羅県志』、『台湾文献叢刊第 141 種』、台湾銀行経済研究室、1962 年、169 頁

（49）林玉茹編『台南県平埔族古文書集』、台南県政府、2009 年、62－64 頁及び 180－210 頁。なお、註（47）、（48）、（49）に記載の史料に関する本稿の論述内容は、前掲陳秀卿・林玲玲論文「発現平埔――葉石濤与西拉雅族書写初探」の研究の成果を踏まえながら、再考察するものが多いのである。

（50）前掲書『台湾近現代文学史』、301 頁

（51）「野菊花」、前掲書『葉石濤全集４』、192 頁

（52）前掲「西拉雅族的末裔」、210 頁

（53）前掲「野菊花」、188 頁

（54）同上、186 頁

（55）「黎明的訣別」、前掲書『葉石濤全集４』、246 頁

（56）「潘銀花的第五個男人」、前掲書『葉石濤全集４』、218 頁

（57）蘇淑瑜「訪葉石濤」前掲書『葉石濤全集２３』、252 頁

（58）前掲書『台湾現代史――二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』、238 頁

（59）前掲「野菊花」、186 頁

（60）同上、191 頁

（61）前掲「潘銀花的第五個男人」、276 頁

（62）同上、286 頁

（63）同上、275 頁

（64）黄聖閎「論葉石濤『西拉雅末裔潘銀花』中的後殖民論述」『第 34 届南区八校中文系碩博士論文研討会』、2015 年、8 頁

（65）高嶋航「近代中国の男性性」小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子編『中国ジェンダー史研究入門』、京都大学学術出版会、2018 年、259 頁

（66）川口遼「R.W コンネルの男性性理論の批判的検討：ジェンダー構造の多元性に配慮

した男性性のヘゲモニー闘争の分析へ」『一橋社会科学』第 6 巻、2014 年、66 頁

（67）尾﨑俊也の整理に従えば、他の三つの男性性をつぎのように説明される。

①共犯的男性性は、ヘゲモニックな男性性を体現しない（できない）が、ヘゲモニックな男性性と共犯関係をもち、ヘゲモニックな男性から利益を得る画策をする男性である。

②従属的な男性性は、ヘゲモニックな男性性に対して逸脱し、従属的位置に置かれた男性性である。従属的な男性性は男らしくない、つまり、女性的とみなされる男性性である。たとえば同性愛男性が従属的な男性性の典型的な例とされる。

③周縁的な男性性は、エスニシティや人種などの要素との関連において周縁化された男性性を指している。白人優位な社会における黒人男性の男性性などがこれに当たると考えられる。詳しくは、尾﨑俊也「男性性を理解する分析概念の探求：ヘゲモニックな男性性とサラリーマン研究を事例に」『未来共生学』第 5 号、2018 年、229 頁を参照されたい。

（68）仁井田陞「中国の家父長権力の構造」『法社会学』1953 巻第 4 号、1953 年、1 頁。また、次の文献も参照した。溝口雄三・丸山松幸・池田知久編『中国思想文化事典』、東京大学出版会、2012 年、189－197 頁

（69）前掲「西拉雅族的末裔」、213 頁

（70）前掲「野菊花」、181 頁

（71）中野裕也「台湾原住民文学のパイオニア：トパス・ダナピマの世界」『藝文研究』第 62 号、1993 年、134 頁

（72）前掲「西拉雅族的末裔」、217 頁

（73）同上、217－218 頁

（74）同上、216 頁

（75）前掲「野菊花」、179 頁

（76）前掲「潘銀花的第五個男人」、286 頁

（77）ボーヴォワール著、生島遼一訳『第二の性（一）』、新潮社、1974 年、9 頁

（78）前掲「西拉雅的末裔」、205 頁

（79）同上書、210 頁

（80）前掲「葉石濤訪談稿」338－339 頁

（81）前掲書『英國文學史』、3 頁

第五章　「晴天和陰天」論

人間は笑う能力を与えられているが、我々はうれしい、楽しいなどといったポジティブな感情が生じたときにだけ笑うのだろうか。西洋ではいにしえより、「ヘラクレイトスは泣き、デモクリトスは笑った」といわれてきた。森下伸也が述べるように、古代ギリシアの哲学者として知られる二人だが、ヘラクレイトスが泣き、デモクリトスが笑ったのは、どちらも世の無常と不条理である。してみると、人間は同じことに対し気持ちの持ちようで笑うこともできれば泣くこともできるのだろう[1]。

事は文学においても例外ではない。作家はユーモアや諧謔的な表現を用いて、「世の無常と不条理」をはじめとする、望まぬ苦しみやかなしみが同居する人生を描くこともあろう。葉石濤もそのひとりである。1969 年に発表した「晴天和陰天（晴天と曇天）」[2]（以下「晴天和陰天」）は台湾の市井に生きる庶民の哀歓を描き、悲喜劇として造形されているが、長らくの間、ブラックユーモアの作風を色濃く帯びる作品と評されてきた。詳しくは次節で指摘するが、本小説を葉石濤文学の六十年代の代表作と説く主張はあるものの、管見の及ぶ限り、テクストに関する具体的な論考はあまり多いとはいえない。

ブラックユーモアの形式にのせて、物語世界にはどのような「笑い」と「かなしみ」が描出されているのだろうか。本稿の問題設定は以下のとおりである。第一に、テクストの喜劇的・悲劇的要素を拾い上げ、作中の「笑い」と「かなしみ」を論ずることとする。次いで、本作をブラックユーモア小説として当然視してきたがために、その射程からこぼれ落ちた観点がないかどうか、テクストの主題について考えてみたいと思う。そのうえで、葉石濤の文学観を参照し、作品と「風土性」の両者間はどのような関係を切り結んでいるのか、という側面に言及することにしたい。

第一節　先行研究及び創作背景について

本論に入る前に、まず「ブラックユーモア」の来歴及び定義を概説し、そのうえで、「晴天和陰天」に関する先行研究及び創作背景をみることとする。

今日ではしばしば用いられる「ブラックユーモア」という用語だが、橋本陽介によれば、「その源となっているのは、アンドレ・ブルトンが 1940 年に出版した『黒いユーモア選集』である」。ナチスドイツ占領下のフランスで、「ブルトンが「ブラックユーモア」と認定した作品を集め、厳しい現実に対して笑いで抵抗を示そうとするもの

であった[3]」。また、橋本はブルトンの提示するブラックユーモアの概念について次のように説明している。「①厳しい現実に対して絶望する気持ちがある。②それに対して反抗するためのユーモア」。すなわち、「どうにもならない現実に面して、笑い飛ばすしか方法がないから笑い飛ばすのが「ブラックユーモア」」であると総括している[4]。

前述したとおり、管見の限り、「晴天和陰天」に関する研究の蓄積は豊富とは言いがたい。たとえば、余昭玟や林秀蓉は本小説を葉石濤作品の六十年代の代表作だと評価し、葉は「意図的に諧謔と滑稽さに満ちた筆致を用いて、社会の底辺で生きる貧しい小人物を描くことにより、台湾人が直面した絶望や挫折を書きとどめた[5]」と分析している。余と林と相似する見解として、羅秀美の論説があげられる。羅は同様に「諧謔的かつユーモラスな創作技法を巧みに扱い、貧しく、厳しい運命を生きる無名の人々の生きざまを描出」した点に着目している。さらに、本小説は「人生の本質がいかに悲哀に満ち、荒誕であることをあらわにしている[6]」と論じた。

また、第一章において述べたように、彭瑞金は、六十年代における葉石濤の小説創作を「ブラックユーモア期」と位置づけしたうえで、「晴天和陰天」を含むこの時期の作風について、つぎのように言葉を継ぐ。

> 白色テロは、葉石濤の文学創作に取り返しがつかないほどの大きなダメージを与えてしまった。だが、それはまた彼が六十年代半ばに再度復帰した際に、創作技法を一変させる原動力にもなりえた。とりわけ葉を深く傷つけてしまった「政治」に対し、ブラックユーモアは白色テロに抗うための利器であったようだ。[7]

余昭玟や林秀蓉、羅秀美はユーモラスな描写や登場人物の造形に論及しており、他方、彭瑞金は政治的コンテクストから読み解き、文学手法の特色を指摘しているものの、四者ともテクストの諸側面に関する具体的な説明を加えておらず、小説世界の内奥まで踏み込んだ考察には至っていないといわざるを得ないだろう。なお、彭瑞金論文には「六十年代半ばに再度復帰した」とあるが、この点について改めて確認しておこう。先述したとおり、葉は 1951 年に政治犯として投獄され、この出来事が大きく影響し、以後約 14 年間筆を折るが、1965 年に再び台湾文壇に返り咲いたことをさしているのである。

実際のところ、葉石濤自身も「戒厳令が解除される 1987 年より以前は、再び逮捕されることを恐れたため、作品の多くはブラックユーモア小説である。社会の現実に触れることはできずにいた[8]」と自認している。また、創作当時は日本作家の梅崎春

生（1915～1965）から大きな影響を受け、「この作家から風刺と諧謔だけでなく、喜劇的な手法を用いて人生に存在する残酷な真実を表現するすべを学んだ[9]」とも述べている。

白色テロ時代がもたらす公的な権力による心理的圧力、制限の多い言語空間という抑圧的な現実にあって、ユーモアは時に精神を解き放つ装置となりうるのではないか。フロイトの、「ある人間がユーモア精神をわれとわが身に向け、それによって自分にふりかかってくるかもしれぬ苦悩を防ごうとする[10]」という言葉を想起させずにはおかない。それゆえに、作家はみずからの文学的営為に笑いのカタルシスを持ち込んだものだと考えられる。

以上、「晴天和陰天」にまつわる論述や創作背景をみてきたが、これらを顧みて幾つかの問題点を提起したい。ブラックユーモア小説という固定的な見解にはうなずくべきものがあり、この点について特段異論はない。しかしながら、ブラックユーモアはいうなれば本小説の文体や作風であり、従来、その中に盛り込まれている主題と思惟性は詳細に検討されていない。また、作中では登場人物たちの滑稽な言動ばかりでなく、苦難に翻弄される生のありようをも描かれている。したがって、先行研究で指摘されているように、小説世界は「笑い」と「かなしみ」の両者によって構成されていると考えるのが適切であろう。しかしながら、殊に作品の悲劇性に関してはいまだ論議尽くされていない感もある。再考すべき最大の課題の一つは、表出している「笑い」と表裏一体をなす「かなしみ」の要義ではないか。さらに、物語は濃厚な風土色を帯びているにもかかあらず、これまで等閑視されてきたきらいがあるといえよう。

本稿はこうした問題意識から出発し、「晴天和陰天」について考察するものである。以下では、まず小説世界の背景をなす風土性について整理し、そのうえで、描写方法や表現に注目しつつ、「笑い」を引き起こす要素を明らかにする。また、作中でクローズアップして叙述されている不条理性に焦点を絞り、「かなしみ」のゆえんを抉り出すことを試みたい。人間社会においてはアクチュアルなテーマでありうる貧困や不条理だが、その中で生きる作中人物らの生のありようを通して、本小説の主題について論じてゆく。

第二節　作品梗概及び小説世界の風土性

（一）物語の大要

まずあらすじをみておこう。「晴天和陰天」における物語の構造は、台湾の南部の農村に住む貧しいふた家族の交流を骨子として展開される。主要な登場人物は語り手である「私」こと呉嵐山と魏土柏一家であり、次のような物語内容からなる。「私」は怠けているわけでもないのに職にあぶれ、しがない暮らしを長らく続けてきた。現在は、打狗県と台南県の県境に位置する「牛埔村」の墓守小屋に住まいを構えているが、なぜここに落ち着いたかといえば、少し込み入った事情があったのだ。牛埔村には村民の共同墓地があり、二年前に墓守の老人が亡くなって以来、後任者が見つからず、二軒の小屋は空き家となっていた。「私」と妻の崔金鳳は困窮のあまり路頭に迷っていたところ、見かねた牛埔村の村長・林冬瓜の好意で住まわせてもらえることとなった。

かろうじて住まいを確保できたものの、生活は一向に楽にならず、「米びつはいつも底が見えている[11)]」ほど暮らしにつまっていた。とうとう、耐えかねた妻の崔金鳳は夜逃げをしてしまう。そこで「私」はようやく一念発起し、親類に借金をして養鶏業を始めた次第である。旧暦の 7 月 1 日に、「私」の住む墓守小屋の隣に魏土柏一家が引っ越してくるが、魏家も貧しさにあえぐ境遇にあり、一家は長女の笙衿の稼ぎで糊口をしのぐ。彼らは一ヵ月後に再び転居し、この地から去ってしまう。

（二）風土性の表象

前項にて「晴天和陰天」の梗概をみてきたが、次いで、テクストの「風土」の側面にフォーカスを合わせながら述べることとしたい。先述のごとく、本小説はきわめてローカルな色彩に富む作品であるが、なぜそのようにいえるのか。斉邦媛が指摘するとおり、「作者の細やかな叙述によって、台湾の六十年代の田舎町における日常や風貌を活写した[12)]」ことが一因だと考えられる。では、作者はどのような「叙述」を取り入れて台湾の「田舎町」を活写し、小説世界の風土色を描出しているのだろうか。従来この疑問について、委曲を尽くした説明がなされていない。したがって本論では、作中の風土性を表出するために、具体的にいかなる描写が用いられたのか、という問題を明らかにできるよう試みたい。

この問いを論じる前に、まず、「風土」に関する定義を再度確認しておこう。すでにふれたとおり、葉石濤は「風土」を「自然環境と社会構造」（第一章第四節参照）と規定しているが、ここではさらに林正子の定義を参照し、上述の問いを追尋するための補助線として用いることとする。

一般的に想起されるのは、ある地域＝〈場所〉特有のものとして感得される風景であり、気候であり、そしてそのような表象や雰囲気の固有性が投影された、その地域＝〈場所〉ならではの伝統的な慣習や生活文化であると表現できるだろう。[13]（下線部は筆者によるもの）

また、風土とは「ある地域＝〈場所〉の自然環境にとどまらず、その自然環境によって育まれた人間文化もまた〈風土〉の重要な要素である[14]」と論じている。

風土性をめぐる定義について、例えば「自然環境」のように、両者の解釈は類似点も多々あるが、一方、葉の定義と比較すると、林は「社会構造」にはふれておらず、なおかつ「自然」に関してはより細分化しつつ次の五項目をあげている。すなわち、①「風景」②「気候」③「伝統的な慣習や生活文化」④「自然環境」⑤「自然環境によって育まれた人間文化」、である。一方で、それらは「ある地域＝〈場所〉」だけに属すものが前提となっており、それゆえに、その場所ならではの「表象や雰囲気の固有性」を保有するものであるという。

葉や林の定義をふまえれば、作中の「風土性」に関する記述を次の三方向から検討することができる。第一に、本小説で使用している「地名」に着目したい。物語の舞台は「打狗県と台南県に位置する牛埔村」であり、先に紹介した斉が述べるとおり、「台湾の田舎町」である。いずれも実在する地名だが、「牛埔村」は現在の台南市竜崎区牛埔里であり、また、「打狗県」は現・高雄県の旧名である。かつて、高雄の一帯は原住民族の「マカタオ族」（第四章第一節参照）の居住地域であったが、彼らの集落名「TAKAU」にちなみ、漢民族によって「打狗」という漢字があてられた。陳正祥と孫得雄が指摘するように、台湾の地名は原住民族の言語から転化したものが多く存在するが[15]、日本殖民地時代に、地名改正により「高雄州」となったのである。

ここで注意すべきは、現行で一般的に定着している「高雄県」ではなく、「打狗県」という古称で表記していることであろう。それはなぜか。古称を用いることは、読み手に「ある地域」に根付く歴史や固有の来歴を連想させる可能性が高まるのではないだろうか。換言すると、その地域の独自性をより強調したいという、作者の意図が暗に込められていると推論するのである。なお、先述したごとく、葉石濤は台南市の出身だが、1965 年に高雄市に転居し、終のすみかとしているため、双方の地域の地理に通じているものと推察する。

第二に、気象等の自然環境に関する描写をみておこう。作中、主人公の「私」の回想によると、「去年の夏は台風などの天災はほぼ皆無に等しく、順調な天候が続いたた

め、マンゴー、竜眼やバナナの価格が暴落した[16]」といい、台湾では、夏季に台風が発生しないのはきわめてまれな現象ので、「私」は特筆すべ出来事として、その一件を語っているのである。台風に見舞われなかったがために、フルーツの「価格が暴落した」とあるが、自然現象がその土地に及ぼす影響をいささかなりとも読みとることができよう。また、高雄県と台南県は台南平原の南部を占め、かねてより農業は南部地域の中核的産業であった。とりわけ台南は果実の集散地でもあり、文中にみる「マンゴー、竜眼」は現在もなお地域の特産物として知られている[17]。このように、天候だけでなく、地域固有の産業にも言い及ぶ点に基づけば、台湾南部の主要都市である高雄市と台南市の地域色をさらに強めた描写といえるのではないか。

第三に、繰り返すが、本小説は旧暦 7 月 1 日を起点に、一ヵ月間に起きた出来事を多く述べており、旧暦 7 月はいわば物語進行の主要な時間軸の一つである。だが、旧暦 7 月の担う役割はそれだけにとどまらない。台湾において、旧暦 7 月の一ヵ月間は「鬼月」とよばれる時期であり、この期間中は、遵守すべき禁忌や習わしがあるとされている。なお、「鬼月」の詳細については第四節で改めて後述するが、それらはまさしく「その地域ならではの伝統的慣習や生活文化」が投影された、「ある場所特有」の固有性を強く具有するものといえるだろう。換言すると、「鬼月」にまつわる描写は、小説の舞台／場所を特定させる手がかりの一つになりうると考えられる。

以上、葉と林の説く定義を参照しつつ、作中の「風土性」に関する内容を整理したが、おもに次の三点をあげることができる。すなわち、①実在する地名の使用（古称をも含む）②天候・地域産業等の地理的要素の記述③台湾の「鬼月」にみる地域固有の伝統的な風習や文化に関する描写。いずれも特定のある地域・場所の独自性と固有性を強調する事項であるがゆえに、これらの叙述により、小説世界内の濃厚の風土性を表出することを可能にしたのではないか。

ここまでみてきたように、本小説の舞台設定と、物語時間の進行軸の一つである「鬼月」は台湾の風土性を含有したものといえる。それは同時に、登場人物たちの日常生活と人生を展開する「場」／「時間」が、特有の風土によって包摂されていることをも意味する。なぜなら、登場人物らは物語の舞台と時間の中で各々の人生を繰り広げているからだ。むろん、舞台設定と物語時間はテクストを構成する重要な要素といってよいだろう。両者はいずれも「風土」と関連性を持つため、作中の風土の描き方を理解することは、とりもなおさずストーリーの全体像を把握する一助になると考え、それゆえに、まず本項にて「風土性」を取りあげて論じた次第である。一方で、風土と作中人物の両者間には何らかの結節点を見いだすことができるのだろうか。この疑

問についてはのちに述べることとしたい。

繰り返すが、先行研究で言及されたように、台湾南部の田舎町で暮らす小人物たちは、厳しい運命をたどることとなる。次節以降は、「笑い」（第三節）と「かなしみ」（第四節）の二つの側面から、「晴天和陰天」で描かれた生のありようをみておこう。

第三節　笑いの淵源

前節では、作品の梗概と風土性について整理したが、登場人物らが生を営むべき場所としての「物語舞台」や、彼らが人生を展開するうえでの「物語時間」の一部は、いずれも濃厚な風土色によって点綴されていることが明らかとなった。かような「風土」の中で生き、貧困にあえぐ主人公の「私」と隣人・魏土柏一家の人生の断片がユーモラスな筆致で描出されているのである。また、先に引用した彭瑞金らの主張に従えば、本小説はユーモアを基調とする作品といえるが、しかしながら、従来、作品の「笑い」を引き起こす要素に関する分析はなされていない。

そもそもユーモアとは何か。端的にいえば、「ユーモアは人を笑いへと誘う要因となるもの」という理解に収斂できよう。菅野ゆりかが指摘しているよう、「その中には、ブラックユーモアなど攻撃性を含んだものや愉快で滑稽なもの、さらに優しさや情を込めたものなど[18]」、さまざまなものがあげられる。「晴天和陰天」では、登場人物たちを通じて、どのような「笑い」が創出されているのだろうか。本節では描写手法にスポットをあてながら、小説世界内の笑いの源泉をたどることとする。

（一）落差

作品全体を通して特徴的だと思われるのは、登場人物の風貌に関する描写である。窮迫した暮らしが続く中で、「私」は妻の体型の変化をつぎのように叙述している。「マイワイフ崔金鳳はもとよりマリリン・モンローもどきのふくよかな美女だったが、三度の食事にありつけない日が続き、ついには骨皮筋右衛門よろしくやせ細り、目はくぼみ、風が吹けば飛ばされるような弱々しい林黛玉に変わり果ててしまった[19]」。また、魏土柏一家が引っ越してきた初日に、「私」と魏の妻が初めて出会う場面に注目してみよう。

引越しのさなかであるにもかかわらず、彼女はその一大事をまったく気にかけて

いない様子で、悠然と破けた扇子をあおぎながら涼を取っていた。そして、あたかもルイ 14 世の時代に生きるフランスの貴婦人のごとく、気品に満ちた優雅なたたずまいで私の飼っているニワトリを眺めているのではないか。[20]

金鳳と魏の妻、彼女たちの実際の容貌や体型はどのようなものであろうか。金鳳は容姿端麗とはいいがたく、凡庸な顔立ちの女性として描かれている。また、魏の妻は「全身贅肉だらけで、幾重にも重なり合う福々しい下あご[21]」が目立ち、「象のような大きな体つき[22]」の持ち主である。彼女たちの身体の可視的特徴をみる限り、美女として知られる「マリリン・モンロー」や「林黛玉」、そして「フランスの貴婦人」になぞらえるのは、実情とははなはだしくかけ離れた比喩であることは明白であろう。すなわち誇張化した表現を用いて、描写対象をデフォルメしているのである。かように、現実と描写の落差が笑いやおかしみを誘う要因のひとつではないかと考えられる。

（二） 風刺

ある朝、魏土柏は「私」の鶏舎の前でデッサンをしていた。魏は没落した地主家庭の長男であり、かつて「日本の武蔵野美術学院」にも留学したことのある人物だ。みずからを画家と称しているものの、その才能は日の目をみることはない。

「おれは生命の神秘を描き出そうと思っているんだ。」魏土柏はまるで、私のような門外漢とは絵画の奥深い技巧に関する討論を繰り広げたくない様子で手短に答えた。注意深く彼の描いた絵を見ると、ほぼ空白のキャンパスの中に数個の楕円が重なり合っているだけで、ほかには何も描かれてはいなかった。「はあはあ、これがいわゆる生命の神秘？うーん。」ぽかんとする私は目がかすむほど絵を眺めたものの、一向に理解できずにいることを残念で恥ずかしく思った。「やはりそうか、君には何もわからないのか。まあ、それは予期していたよ。まったく、なぜこの躍動する生命のリズムが見てとれないのかな？」（中略）「これは、たまごのように見えるのだが」と、私はおそるおそる答えたが、とうてい生命の萌芽については解せなかった。「おれの絵は独自性に満ち溢れており、誰よりも遠く、そして速く前進しているから、落後している今の画壇にはおれのポジションがないのだ。これも天才が背負うべき十字架だろう。運命だと思うことにしたぜ。」[23]

作中、魏土柏が絵筆をとる描写はこの一場面のみである。彼はひごろ創作活動に勤しむのでもなく、長らく無職であり、これまでに売れたたった一枚の絵画は、急死した地元の有力者の母親のために描いた遺影である。ふたりのちぐはぐな会話が示すように、両者の差異が際立ち、芸術に疎い「私」に対し、彼はことさら芸術家ゆえの高い精神性を強調する。だが、はたして魏がいうように、シュールで前衛的な画風であるがために周囲に理解されないのだろうか。

「落後している今の画壇」という豪語は、画家として大成できず、居場所のない人間の索漠たる疎外感や孤独感が滲み出ており、蹉跌と敗北がないまぜとなった心情や屈折した内面を読み取ることができよう。また、この場面は、芸術に対する独自の理想を抱く一方、とりたてて画家としての実績がないことを虚勢でごまかそうとする、そんな魏に向けたアイロニーとおきかえて読むことも可能ではないか。笑いは時として他者に対する風刺や批判となりうるのである。

（三） 自嘲

貧困から脱出すべく養鶏業を始めた「私」だが、千羽ちかくのニワトリの世話をする自身の日常をどのように語っているのだろうか。

> 私はまぎれもなく、正真正銘の「ニワトリのしもべ」である。（中略）彼らのあくなき食欲を満たすため方々を駆けずり回り、エサを集めて持ち帰っては汗だくになりながら食べさせている。いつだって目が回るほどの忙しさだ。（中略）くつがえって考えてみると、われわれ人類はあたかも多くの自由を享受できているようだが、でもこの自由を所有したところで、腹いっぱい食べる願いすらかなわない。時おり、ニワトリどもがうらやましくて仕方ないのだ。できることならば、私とてニワトリに生まれ変わりたい。[24]

鶏舎に閉じ込められ、自由が制限されている「ニワトリ」に対し、人間である「私」は「自由を享受できる」一方、満足に食事を取れないほど困窮しているがゆえに、「ニワトリに生まれ変わりたい」と嘆く。本来ならば比較の対象にはならないであろう「ニワトリ」を羨望するが、そこには、貧しさや煩悶と隣り合わせの人生を歩む「私」のいかんともしがたい思いが見え透くのである。

また、ニワトリを「鶏大人（ニワトリ殿）」、みずからを「鶏奴（ニワトリのしもべ）」

と呼び、「彼らは小屋の中で何の心配もなくただひたすら食べては排泄し、抜きん出て優秀な人類であられるこの呉嵐山[25]」が鶏糞を清掃する。そしてそんな「私」に対し、「気分をよくしたニワトリの面々はかまびすしい鳴き声をとどろかせ、労をねぎらって[26]」くれたと擬人法を用いて描写している。人でないものを人に擬してあらわすことによって、両者の従属関係の逆転がよりいっそう鮮明となる。アンリ・ベルクソンの『笑い』には、「ひっくり返し」の理論について以下のように述べられている。

> 一定の情況の中にある若干の人物を説明してみたまえ。その情況を裏表にし、かつ役割があべこべになるようにすれば、諸君は一つの喜劇的場面を得られるであろう。（中略）我々は裁判官に訓戒する刑事被告人を、親たちを意見しようとする子供を、つまり「逆さの世の中」という見出しの下に分類できるものを笑うのである。[27]

ベルクソンの説く「逆さの世の中」は、「私」と「ニワトリ」の関係性そのものをいみじくも説明している。すなわち、飼い主と家畜の立場が逆転する、という意外性に笑いが引き起こされるのである。

さらに、自嘲――自己を客観視しつつみずからを嘲笑する表現にも留意したい。あくせく働く「私」の姿は、郷坪敏幸の表現を借りていえば「悲劇の滑稽性」といい表すことができるだろう。悲劇的な状況に遭遇した人間の必死の行為は、かえって滑稽に見えるという皮肉な現実を指すのである[28]。「私」はニワトリに仕える自分自身をあざけり笑い、揶揄し、いわば諧謔的な表現を重ねることで自虐的な笑いを生み出している。

本節では、小説世界に流露する「笑い」を整理したが、人物描写にみる誇張や風刺などがおかしみを誘発する要因であると考えられる。なぜなら、そこには現実との大きな落差が生じているからだ。また、語り手である「私」は自身の境遇を皮肉ることによって、自虐的な笑いをかもし出すが、語られる状況の滑稽さのうらには陰影があり、笑いとペーソスがオーバーラップする様相を呈している。それはなぜか。すでにふれたように、「私」は貧しさゆえに家庭生活が破綻し、意に染まない生業につく。魏土柏一家もしかり。ともに貧窮の苦しみに膝を屈する人間同士であり、とうてい笑えない境遇のさなかにいる。意のままならぬ人生を笑いに転化したことにより、かような複雑な笑いが生まれるのであろう。次節では、本小説の別の側面である「かなしみ」について検討することにしたい。

第四節 「かなしみ」のゆえん

上述したごとく、「私」の住む墓守小屋の隣家に、旧暦の 7 月 1 日に魏土柏一家が引っ越してきた。彼らも「私」と同様に村長のはからいでこの地にやってきたが（以前、村長の生家は魏家の小作農である）、7 月 31 日には新たな住まいへと転居してしまう。繰り返すが、物語はこの一ヵ月間の出来事を多く述べており、なかんずく魏家の次女の夭折という悲劇に焦点を絞っている。ここで注意すべきは、期間を旧暦の 7 月 1 日から 7 月末日――台湾では「鬼月」と称される時期に設定していることである。第一節にてふれたように、「鬼月」は物語進行の時間軸と小説世界の風土性の表象という役割を担うが、本節では、そのほかに「鬼月」は何を象徴し、どんなイメージが認められるのか、という問題を考えることとしたい。さらに、テクストのかなしみを分析するうえで、手がかりとなる「不条理」の描き方について論じてゆく。

（一）時間標識としての「鬼月」

最初に「鬼月」について概説しておこう。台湾では旧暦 7 月を「鬼月」と呼び、7 月 1 日には「鬼門（霊界の門）」が開き、そこからの一ヵ月間は先祖や「好兄弟（いわゆる餓鬼や無縁仏であるが、彼らを不快にさせないため、このように称する）」が現世に舞い戻るとされる。こうした霊たちに供え物をして供養するために、旧暦 7 月 15 日の中元節に「普渡（あまねく済度する）」の儀礼を行うしきたりがある[29]。なお、松本浩一によれば、「「中元」という言葉は道教の三元の思想に由来している。三元とは上元、中元、下元で、それぞれ正月 15 日、7 月 15 日、10 月 15 日にあてられ、この日に天官、地官、水官が人々の功過罪福を記録したものを集めて校閲し、処置を下す日であるから、この日には謝罪の法を行うべきである」と考えられていた。また、中元節の日が、祖先や孤魂などの亡魂の供養が行われるようになったのは宋代からといわれており、漢民族の中元節は地方によって違いもみられる[30]。

つぎに、「鬼月」に関する文中の描写をみてみよう。旧暦の 7 月 1 日に、村人の烏蕃嫂は肥料用の鶏糞を取りに「私」の自宅にやってきた。烏蕃嫂が持っていたかごの中に魚や肉などのごちそうが入っていたので、私は「今日は誰かの誕生日ですか」と尋ねた。すると、

烏蕃嫂は血相を変え、「無駄口をたたくもんじゃないよ。南無阿弥陀仏。なんてば

ちあたりなことを口にするんだ、お前さんは。今日が誕生日だと？まあ、あんたは奥さんに逃げられてしまったから、今日が７月１日〔旧暦――筆者注〕、地獄の扉が開く初日だということも忘れてしまったのかい。各家庭では普渡の儀式の用意をするんだよ」と答えた。[31)]

不吉のことばを最も忌み嫌う烏蕃嫂にひたすら謝る「私」に対し、彼女はさらに話し続けた。「7 月中には引越しや結婚式をあげる人はどこにもいやしない。遠出するのも気をつけなくちゃいけないんだよ[32)]」と教え諭すように言った。

烏蕃嫂の話にあるように、鬼月には「好兄弟」たちが人間界でさまよっているため、引越しや旅行などを控えなければならないといったタブーも多く存在している[33)]。「鬼月」の期間中は日常でない違和感や緊張感が現世に充満しているばかりでなく、死後世界からやってきた「好兄弟」らによって、人間の命、安全をおびやかし、支配するイメージがあるといっても過言ではなかろう。すなわち、「鬼月」は不条理性を喚起する上で、必要不可欠な象徴としての機能が備わるものと考えられる。言い換えれば、物語世界に不条理性を導入する際、「中元節」は客観的に特定できる明確な時の指標でもある。

また、池上良正は異なる側面から興味深い指摘をしている。「多くの庶民にとって、餓鬼道とは決して中空に浮かぶような六道輪廻の中にあったわけではない。それはむしろ現世での飽くなき欲望という自らの周囲に広がる生活の実感として受け止められた」と述べている。さらには、「餓鬼道で「苦しむ者」とは欲得の世界に「苦しむ生者」の投影である」と分析する[34)]。要点を敷衍すれば、人間から恐れられている「好兄弟」は敵対的な存在ではなく、現世でもがき苦しむ人間、あるいは人間がおかれている条件そのものを表すメタファーとしてとらえることもできよう。

さて、「引越しをしてはならない」という禁忌を破り、旧暦の７月１日に「私」の隣家にやってきた魏土柏一家だったが、村長の林冬瓜の自宅で「普渡」の宴席が開かれ、そこへ招かれることとなる。めったに食べることのできないごちそうが用意されていると聞き、次女の小娟ははしゃぎながら父親とともに出かけたが、たちまち悲劇は起きてしまう。「あの世の扉が開き、おなかをすかせた亡者たちが犠牲者を捕らえにこの世にやってくる鬼月[35)]」に何の前触れもなく、永遠の別れは突然訪れた。

（二） 不条理の提示

宴席の翌日、小娟は高熱を出し、ひごろの栄養失調がたたって肺炎をこじらせてしまい、わずか6歳で帰らぬ人となってしまった。幼い愛娘の死を受け入れられない魏土柏夫妻は、亡くなった小娟を葬ろうとしない。運命に抗議するかのように魏土柏は大声で、「神がいるなら、こんなふうにあっけなく死んでしまうはずがない[36)]」と怒鳴るかたわらで、小娟の母親は半狂乱になっていた。

> 「そうよ、小娟はずっと私たちと眠るのよ、そっと揺らしながら、朝まで一緒に眠るの。私が死ぬ時までそうするのよ！」と、奥さんはすっかりと取り乱し、支離滅裂なことを口走りながら、太った手で小娟のなきがらをさすり続けていた。（中略）小娟はあたかも眠ってしまったかのように、安らかな表情を浮かべ、黄ばんだ顔は日ざしを浴びていた。両目を閉じ、くちびるはかすかに開いており、まるで今にも「おなかすいたよ」と言いながら起き上がってしまうかのようだった。笙衿と私のとめどなく溢れる涙は、ぽたりぽたりと小娟の顔にこぼれ落ちたが、二度とその目を開けさせることはできなかった。[37)]

赤貧の魏家は葬式を出すことはおろか、ひつぎすらも用意できずにいた。みかねた「私」は、鶏舎を建てる際に残っていた木材を使って小さなひつぎを作り、小娟を弔う。テクストでは、幼女の突然の死という悲劇によって、不条理性を読者に感知させているのと同時に、死がもたらす虚無感や絶望的な感情、言いようのないかなしみ、生と死の永遠の乖離をも浮き彫りにしている。

少し目を転じて、「不条理」にまつわる解釈をみておこう。松本陽正によると、不条理という言葉は古来より多くの思想家によって用いられてきたが、哲学的な意味が付与されたのは20世紀になってからのことであるという。たとえばアンドレ・マルローは、「人間は不条理を受け入れて生きることはできるが、不条理の中を生きることはできない」と述べており、また、ジャン＝ポール・サルトルは、「不条理を相対化し、他の関係において捉えるのではなく、「絶対的な存在」として、つまり説明不能な「存在」そのもの（嘔吐感といってもいい）と同義の意味合いで捉えているのである[38)]」。かように、めいめいが説明する意味に微妙な差異が生じていたが、アルベール・カミュによって明確に概念化されたのである。カミュは、不条理とは世界と人間の対峙から生じるものとして位置づけ、さらに一般的には二つのものからの比較・対立から生じるとし、「比較の両項間のずれが増大すればするほど、それだけ不条理性は大きくなる[39)]」と定義している[40)]。「比較の両項」とは、生と死にもあてはまることではあるま

いか。生と死の乖離が示すように、両者には鴻溝が横たわっているがゆえに不条理性がより増幅するものと思われる。

翻って小説世界の「死」を考えると、小娟はなぜ6歳で死ななければならないのか。なぜ肺炎で命を落とさなければならなかったのか。彼女の死について正答を導くことはできるのだろうか。そこには、道理にかなう正当な理由などあろうはずもないのではないか。再びカミュにいわせれば、「世界はひとつの巨大な非合理なもの[41)]」とした上で、「理性では説明のつかぬものにみちみちて[42)]」おり、「不条理とは本質的に相容れぬこと[43)]」であると述べている。自明のことながら、生者にとって死は万人に開かれた不可避なことであり、そして生は死によって終わる。生と「相容れぬ」死は、まさしく不条理の権化そのものといえよう。

本節では、テクストの「かなしみ」を織りなす要素についてみてきた。幼女の死という悲劇により不条理性が提示され、また、それを導入するうえで、「鬼月」が明確な時間標識として機能していることがみてとれる。さらにカミュの措定した不条理の概念を援用し、生と対峙する死における両者の懸隔など、死と向き合う際に浮かび上がる不条理性について論じた。しかるに、貧困や不条理の桎梏の中で生きる登場人物らは、みずからの苦しき生に直面する際にどのような態度で接し、また、彼らには自己救済のすべはあるのだろうか。そう問うた時に、「晴天和陰天」に伏流する主題が浮上してくるのではあるまいか。次節ではこの問いを考えることで、締めくくりの論議に移りたいと思う。

第五節　絶望の彼岸にみえるもの

第四節において述べたとおり、本小説のかなしみを醸成する悲劇的要素は「死」という不条理であり、その内容について具体的にみてきた。その中で困難な生を生きる作中人物たちに希望の転移の光は照射されるのだろうか。

幼い愛娘を亡くしてから、半月あまりで魏夫妻はすっかり憔悴してしまった。「目には見えぬ愁いとかなしみが彼らの心を蝕んでいた。それに家計が苦しく、食うや食わずの生活が続いていたので、ふたりとも見るに忍びないほど骨と皮ばかりに痩せこけてしまい、彼らを見るにつけ、私はたいそう心を痛めた[44)]」。そこで傷心な魏夫妻を慰めようと、「私」は大事に飼っていたニワトリを絞め、一席を設ける。魏土柏の奥さんは「貴重」なニワトリを目の前にして夢中になって食べ、とうとう「むさぼるようにニワトリの頭をかじり、その中に固まっていた灰色のミソまできれいに吸いつくし

[45]」た。そのかたわらでは、

> 私と魏土柏は米酒［米を原料とした蒸留酒――筆者注］をちびりちびりとのんでいたが、のめばのむほど悲しみは増すばかりだった。「嵐さんよ、生きていくのはほんとにつらいことだな。」（中略）「ああ、まったくその通りだよ！オギャーと生まれてきても、所詮苦しみを受けるだけだ」と、感傷的になった私は同感しつつそう答えた。「う―う―」魏土柏はまるで、ばらばらに砕け散った心が少しでも癒えるよう、ますます大声で泣き続けた。泣きながら、「イヤー」と大きな口を開けて一本の手羽先を骨ごと噛み砕いて飲みこみ、それからまたむせび泣いた。（中略）われわれ三人は酒と涙に浸り、ついには流れる涙も枯れ、ひとまず心にあったすべてのかなしみを吐き出した。みなぐったりと疲れ果て、あくびをしながらうとうとしては、しばし眠りこんでしまった。[46]

わけても注目をひくのは、魏土柏夫妻の「食べる」行為が戯画的な表現で描写されていることである。繰り返してもなお咀嚼しきれないかなしみとともに浮き彫りとなるのは、運命に抗うのではなく、与えられた生を自己の生として生きようとする――運命を甘受する諦念にも似た態度ではあるまいか。また、食べることが生きることに相対するとすれば、この場面は「生」の肯定をほのめかしていると考えられよう。

その後、魏土柏はようやく清掃員の仕事にありつけ、かくして一家は新天地へと去ってゆく。別れ際、魏土柏の妻は「私」に、時には小娟のお墓に行ってあげて欲しいと懇願しながら滂沱の涙を流す。「私たちはみな再び涙の谷に沈んだ。流れる涙は衣を濡らし、心の奥底をも濡らした。だが、暖かな秋の日ざしにじんわりと乾かされ、白雲ただよう青空のもとに横たわる静かな墓地が眼間に浮かんだ[47]」。

げんにみてきたように、「私」は金に窮したあげく、妻に夜逃げされ、意にそぐわない仕事をしながら己の不運をかこつ。魏土柏も貧苦に追いうちが加わり、幼いわが子に先立たれ、絶望の深淵に突き落とされてしまう。評価などといった既成の価値観が存する世界において、おそらく彼らは富裕ではなく貧困であり、成功ではなく失敗であり、幸福ではなく不幸であり、頂点ではなく底辺にいる――すなわち否定的な側に区分されてしまうだろう。もし彼らに自己救済の方途があるとしたら、はたしてそれは何か。テクストの基底には困難な生をいかに生きぬくか、という普遍的かつ根源的な問いが置かれていると考えられる。

人生が続くなかで、さまざまなかなしみを抱えながら生きていかねばならないこと

もあろう。人生につまずき、失意のさなかにいながらも、「私」は現実にそむくことなく、みずからを奮い立たせるように、「曇天ばかりが続くわけではない。いつかは晴天になるさ[48]」と語る。また、次女の夭折の悲劇に見舞われ、「彼らの心は血がぽたぽたとしたたり、その傷口が癒える日は永遠にやってこない[49]」という魏土柏ではあるが、清掃員の仕事につき、再び歩みだそうとするその姿は、人生の更新可能性を示唆しているといえよう。むろん、彼らのそれは雄々しく立ち向かう姿勢ではないにせよ、どこかフリードリヒ・ニーチェの説く「運命愛」を彷彿させるものがあるのではないだろうか。

ドイツの哲学者であり、実存主義の先駆者といわれるニーチェは、人間の認識や評価以前の世界と人生を運命としてあるがままに肯定し、受容する勇気を説いていることは、菊池惠善をはじめ、これまで多くの先行研究でつとに指摘されてきたとおりである[50]。ニーチェの根本思想のひとつとされる「運命愛」とは、「たとえ世界が無意味で無目的な繰り返しであっても、自己の運命をみつめ、それを自己のものとして愛し、受け入れることにほかならない。運命を自己のものとして受容するためには、自己を取り戻しつつ自らの運命を愛し、耐え抜くこと」によって、運命と一体となる境地に達することが必要という[51]。長谷川晃は、「運命愛を形式的に見れば、まずこのような自己即運命としての運命への愛[52]」と分析している。すなわち、かぎりなく人生を引き受けて生きぬこうとする、たくましく肯定的な態度が「運命愛」である[47]。

考えてみるに、本小説では登場人物たちの幸せはことごとく欠如しているばかりでなく、絶望の向こう岸には煌々と輝く希望の光は照らされておらず、円満な結末も用意されてはいない。彼らの生のありようを通して、物語は「あるべき生の姿とはなにか」、「困難な生をいかにいきるべきか」という普遍的な問いを投げかけつつ、その答えを読者に委ねるように開かれた終わり方をしている。さりながら、望まぬ苦しき生であったとしても、人生には絶えざる更新可能性があり、人間があくまでも人間として生きぬく勇気がほのみえるのではないだろうか。

小結

本章は、これまでブラックユーモア小説に分類されてきた「晴天和陰天」について検討するものである。具体的には、小説世界に表出している「笑い」の側面に傾斜することなく、従来、嘱目されていなかったテクストに内包する「かなしみ」や主題、風土性の描写をも明らかにすることを研究目的とした。

考察に際し、笑いの描写方法にフォーカスを合わせ、笑いを誘発する要素として誇張や風刺、アイロニー、デフォルメなどの手法がみられた。だが、それらは単純明快な滑稽さばかりではなく、自身の境遇をも笑うという視点を用いた自嘲のように、どこやら卑屈な思いや哀愁の色合いがにじみでている複雑な笑いも含まれている。他方、かなしみの端緒は、幼女の死という不条理によって描出されており、不条理性を導入する上で、「鬼月」が客観的な時間標識の役割を有することが明らかとなった。その悲劇は哀切きわまりない調べとなり、物語の通奏低音として流れている。また、カミュの説く不条理をキー概念として援用し、生と死の両項間に生じる懸隔が不条理性を増幅するのではないかと論じた。

そのうえで、貧しさや不条理の中に身を置く登場人物らの生のありようを通して、テクストの基底には不確かで困難な生をいかに生きるべきか、という普遍的かつ根源的な問いが主題として伏流していると考えるのである。運命を甘受する彼らの姿には、与えられた一切を自己の運命として引き受け、たとえどんなことがあろうとも、みずからの運命を愛しつつ生きぬいてゆくと説くニーチェの「運命愛」に似かよった点があるのではないだろうか。

さらには、小説世界の背景は、濃厚な「風土性」によって点綴されていることも看過できないであろう。なぜなら、登場人物らの人生が展開される場には台湾独自の「風土」が存しているからである。さきに整理した、作中にみる風土性に関する記述をあげておこう。テクストの風土性を表出するための具体的な事項として、三点をあげることができる。第一に、物語の舞台は台湾の実在する地名で設定されているが、古称が用いられている点も注目に値すべきだろう。第二に、気候と農産物についての記述は、台湾の地理的事象をわかりやすく伝えるトピックの一つといえる。第三に、旧暦7 月とよばれる「鬼月」は不条理性を示す時間標識のほか、中元節や普渡の儀式、民間の禁忌などの描写にみるように、台湾という地の固有性を表象する役割をも担う。

上述の事例の描写を通じて、葉石濤は、台湾独自の自然環境や伝統的な慣習、生活文化を含む「風土性」を具像化し、小説世界内に描出したのである。だが、彼が表現したい「風土」はそれだけだろうか。ここで、本章第二節にて呈した問いを考えておこう。繰り返すが、「風土」をめぐる定義のなかで、葉は、台湾の自然環境はこの島に住む人々の気質形成に少なからずの影響を与えていると論じ、その影響によって培われた精神性とは、「屈することなく、忍耐強さと力強さが備わる」気風であるという。

台湾は温暖な気候や豊かな自然に恵まれる一方、時として生命を脅かす台風、地震などの自然災害にも見舞われてきた。かような自然環境の中で、台湾人の人間的な性

格や気質が形成されたと、作家は主張しているのである。すなわち、風土と人間精神の形成の両者間には、直接的な連続関係を有するということであるが、それはなぜか。テーヌがいみじくも述べるとおり、生きとし生けるものは「棲息を始めるや否や、その環境に適應しなければなら」ないため、おのずと居住する環境に順応した「気質や性格を習得する」からであろう[54]。

再び前述の問い――作家が「風土」の描写に込めた深意とは何か――を考えると、作家は外在的風土ばかりでなく、風土によって培われた台湾人の内面的精神性をも描いたと推察するのである。例えば作中人物の一人である、愛娘に先立たれ魏土柏のように、みずからの不条理の生を引き受けながら生き続ける姿に、忍耐強さを内包した精神性を投影しているのではないだろうか。だとすれば、テクストで述べられている「風土」は自然環境そのものだけでなく、かの地で生きる人間の精神性が溶け込み、混然一体となる側面をも含有すると考えられよう。

以上の論議を踏まえながら総括すると、「晴天和陰天」は「笑い」・「悲しみ」・「不条理の生」・「風土性」という四つの要素によって形作られていると結論づけられるのではないか。まず、テクストの基部には「不条理の生をいかに生きるべきか」という主題が据えられている。意のままならぬ生のありようを「笑い」と「かなしみ」の側面から叙述しているため、「笑い」と「かなしみ」はいわば、本小説を構成する二本の主柱といえる。また、小説世界を包摂する風土性は、自然環境や文化、風習などの表層的描写ばかりでなく、その風土の中で生きる人間の内面的精神性をも示唆していると考えられる。

最後に、「喜劇的な手法を用いて」世の不条理を描いた作家のことばを引き、本章を閉じることとしよう。

> 人生の本質は苦しむことにほかならず、人として生まれた以上、誰しもこの残酷な真実を避けて通ることはできまい。ただ、平然と、淡々とみずからの苦しみを受け入れ、それらを心の奥底にしまいこみながら、時おり反芻してみる。さすれば、勇者のごとく含蓄のあるほほえみをたたえることができるだろう。[55]

【註】

（1）森下伸也「総論：人はなぜ笑うのか」、公益財団法人長寿科学振興財団ウエブサイト健康長寿ネット https://www.tyojyu.or.jp（2020 年 10 月 5 日筆者最終閲覧）

（2）初出は、『台湾新生報』1969 年 1 月 17 日～2 月 13 日。なお、本稿で使用するテクストは、前掲書『葉石濤全集 2』、427－490 頁に拠る。また、日本語訳はすべて筆者によるものである。

（3）橋本陽介『越境する小説文体――意識の流れ、魔術的リアリズム、ブラックユーモア』、水声社、2017 年、244 頁

（4）同上書、245 頁。また、ブラックユーモアを取りあげる前掲林鎮山論文もあわせて参照されたい。

（5）余昭玟・林秀蓉『小説選読』、五南出版、2016 年、17 頁

（6）羅秀美『台湾都市文学簡史』、国立台湾文学館、2013 年、59 頁

（7）彭瑞金「食夢獣的文学旅程――葉石濤的小説創作」、前掲書『葉石濤全集 1 』、47 頁

（8）孫鈴「葉石濤訪談録」、前掲書『葉石濤全集 23』、324 頁。また、葉石濤によると、刑期を終え、出所後も毎週、居住地の派出所に出頭することを義務付けられており、監視や尾行をされることもあったと述懐している。詳しくは、前掲書『葉石濤評傳』、165 頁を参照されたい。

（9）葉石濤「鍾肇政与我」民衆日報、1980 年 3 月 24 日～26 日

（１０）フロイト著、高橋義孝ほか訳『フロイト著作集３　文化・芸術論』、人文書院、1969 年、411 頁

（１１）前掲書『葉石濤全集２』、429 頁

（１２）斉邦媛『霧漸漸散的時候』、九歌出版、1998 年、71 頁

（１３）林正子「文学における「場所」の力：故郷の「風土」を視座とする地域文化論構築に向けて」『岐阜大学地域科学部研究報告』第 22 巻、2008 年、20 頁

（１４）同上

（１５）陳正祥・孫得雄「台湾の地名」『人文地理』第 12 巻（5）、1960 年、33－47 頁

（１６）前掲書『葉石濤全集２』、440 頁

（１７）台南市政府農業局ウエブサイト https://agron.tainan.gow.tw（2020 年 10 月 8 日筆者最終閲覧）

（１８）菅野ゆりか「外国語学習とユーモア理解」『大阪女学院紀要』第 8 号、2012 年、185 頁

（１９）前掲書、『葉石濤全集２』、429 頁

（２０）同上書、437 頁
（２１）同上書、448 頁
（２２）同上書、439 頁
（２３）同上書、460 頁
（２４）同上書、430 頁
（２５）同上書、431 頁
（２６）同上
（２７）ベルクソン著、林達夫訳『笑い』、岩波書店、2006 年、90－91 頁
（２８）郷坪敏幸「俳句における滑稽性」『尾道大学日本文学論叢』第 3 号、2007 年 12 月、97－98 頁
（２９）詳しくは、李秀娥『図解台湾民族節慶：嶄新呈現一年四季歳時節俗的民族意涵与祭祀文化』、晨星出版、2015 年、185－188 頁。李秀娥『祀天祭地』、博揚出版、1999 年を参照されたい。
（３０）松本浩一「中元節の成立について――普渡文献の成立を中心に――」『現代中国学方法論とその文化的視野［方法論・文化篇］』所収、愛知大学国際中国学研究センター、2006 年、135 頁
（３１）前掲書『葉石濤全集２』、432 頁
（３２）同上
（３３）地域によっても異なるが、そのほかにも、7 月中は夜にはあまり外出せず、椅子を外に置いたり、洗濯物を干したりしない、水辺に近づかない、などのタブーがあるといわれる。詳しくは、前掲松本浩一論文、133 頁を参照されたい。
（３４）池上良正「宗教学の研究課題としての「施餓鬼」」駒澤大学『文化』第 32 号、2015 年 3 月、81 頁
（３５）前掲書『葉石濤全集２』、465 頁
（３６）同上書、468－469 頁
（３７）同上
（３８）松本陽正「アルベール・カミュにおける不条理について―『異邦人』を中心にして―」『広島大学フランス文学研究』第 26 号、2007 年、31－32 頁
（３９）カミュ著、清水徹訳『シーシュポスの神話』新潮社、1969 年、47 頁。なお、付言するものとして、文学評論家でもある葉石濤は 1966 年にカミュの著作に関する論考を発表している。『異邦人』には、カミュ自身が当時の社会情勢や「人生についての省察をめぐらした結論が含まれており、その結論とはいわば「不条理の哲学」であり、カミュ文学

を読み解くかぎでもある」と分析している。さらには、『異邦人』の半年後に出版されたカミュの哲学エッセー『シーシュポスの神話』にもいい及び、作中にみる「不条理」とは、「生と死の対立、自然と人類の対立、この不合理な世界と、愛や光を希求してやまない熱き願望との対立」と述べている。詳しくは、葉石濤「卡謬論」『台湾文芸』第 3 巻 10 期、1966 年を参照されたい。

（４０）前掲松本陽正論文、33 頁。また、カミュは不条理を、世界の「不合理性と人間の最も深いところで訴えが鳴り響いている明晰への激しい欲求との対峙」と定義する。すなわち、「人間はすべてのことに意味や理由を求め、「なぜ」という問いを発するが、世界は決してその問いに答えないということである」。詳しくは、東浦弘樹「ムルソーは異邦人か――カミュの『異邦人』をめぐって」『人文論究』第 59 巻、2009 年 5 月、136 頁をあわせて参照されたい。

（４１）前掲書『シーシュポスの神話』、43 頁

（４２）同上

（４３）同上書、47 頁

（４４）前掲書『葉石濤全集 2』、472－473 頁

（４５）同上書、475 頁

（４６）同上書、475－476 頁

（４７）同上書、489 頁

（４８）同上書、429 頁

（４９）同上書、472 頁

（５０）菊池惠善「荘子とニーチェ」『哲學年報』第 69 巻、2010 年 3 月、2 頁。また、木本伸「中期ニーチェの研究―「自由精神」による「確信」からの解放―」『ドイツ文学論集』第 32 号、1999 年 10 月、21－30 頁などを参照されたい。

（５１）小寺聡編『もういちど読む山川哲学　ことばと用語』、山川出版、2015 年、200 頁

（５２）渡邊二郎、西尾幹二編『ニーチェを知る事典　その深淵と多面的世界』、ちくま書房、2013 年、410－411 頁

（５３）ニーチェの説く「運命愛」に関する筆者の理解と解釈については、おもにつぎの文献を参照した。山中浩司「運命愛―ニーチェの根本思想―」『經濟論叢』第 135 巻第 4 号、1985 年 4 月、323－340 頁。恒吉良隆「ニーチェの「運命愛」:「永遠回帰」との関連において」『文芸と思想』第 38 巻、1974 年 2 月、53－68 頁。五郎丸仁美「ニーチェ哲学における「自由と必然」――中期作品『ツァラトゥストラ』を中心として――」『人文科学

研究（キリスト教と文化)』第 43 号、2012 年 3 月、77－108 頁。周国平『尼采：在世紀的転折点』、香港中和出版、2014 年

（５４）前掲書『英國文學史』、27 頁

（５５）葉石濤「作家的座右銘」『中国時報』、1980 年 4 月 24 日

終章

まとめと今後の課題

本論文のめざすところは、台湾戦後第一世代作家・葉石濤の標榜する文学観――「種族、風土、歴史」という視座を立脚点に、葉の小説作品にみる文学表象の具体像の把捉を試みることだった。

先に述べたように、葉の文学観はテーヌの文学理論から強い影響を受けたものとされる。すなわち、文学作品を生み出す三大基本法則とは「種族、環境、時代」であるが、葉はこれらを「種族、風土（自然環境・社会構造）、歴史」と言いかえている。三大要素はいわば、葉石濤文学を読み解くためのひとつの鍵であり、また、その作品を敷衍できる概念ともいえるだろう。なぜなら、葉は作中に「種族、風土、歴史」を積極的に描出しており、それゆえに、葉の文学世界を理解するうえで、三大要素は避けて通れないと考えられる。この作家が掲げる文学のかたちを三大要素から考えてみたい、という問題意識が本稿の出発点である。

管見の及ぶ限り、これまで、葉の文学史観に言及し、または三大主題と小説作品の両者を連関する体系として論じた研究はあるが、他方、葉がテーヌ理論をどのように受容し、あるいは変容しながら自らの文学観として再構築しているのか、という問題については十分な説明がなされていない。したがって、本研究ではまずこの問いを明らかにしたうえで、作品の具体的な分析を進めたのである。

以下に各章ごとの要旨を示すこととする。

本研究の導入部分として設けた第一章では、主に①葉石濤の人物②小説創作活動の概略③葉石濤の文学観の形成、以上の三点について論じた。まず、葉石濤の人生の軌跡をたどると、言語転換や政治犯として投獄されるなど、さまざまな困難に直面してきたことが浮かび上がる。台湾の歴史や政治情勢にみずからの人生を翻弄され、彼は身をもって生の不条理を体験してきたといえよう。次に、彭瑞金の区分にならいつつ葉の小説創作活動の時期を三期に区切ったうえで、各時期にみる作風の傾向と発表作品数等について整理した。第一ピーク期（1946～1950）は耽美的な描写を特色とし、第二ピーク期（1965～1971）では、従前ブラックユーモアの作風が嘱目されてきたが、文学技法の新しい試みを行うようすもみられる。第三ピーク期（1987～2006）においては、台湾社会の民主化というファクターが加わったことにより、題材選択と創作空間の広がりがもたらされたのである。通観すると、作風に変遷はみられるものの、一

貫して作中に三大要素――「種族・風土・歴史」――を繰り返し題材に用いる傾向がうかがえる。

次いで、テーヌの文学概念が明治日本や中国、植民地台湾に与えた影響や葉におけるテーヌ理論の受容のありかたについて検討した。各々の地において、テーヌの学説に関する受け止め方や感化の度合いは一様ではないが、一方、「民族的特殊性・固有性」を表出し、文学論を構築するための方法論としての一定の役割を具備していたと考えられる。また、葉はテーヌ理論の受容に際し、三大要素をフレームワークとして援用しているが、その枠組みのなかには、台湾の「種族、風土、歴史」に関する諸事象をあてはめ、置きかえる作業を行っていることを指摘した。葉の文学観は総じてテーヌ理論とほぼ同じ方向性を志向しているものの、若干の違いもみられる。たとえば、「種族」という要素では、テーヌは先天的、遺伝的な諸傾向を主張しているのに対し、葉は、台湾のエスニック・グループ間に存する母語や文化の違いに着目するなど、両者には相違点があることを述べた。さらに、台湾の文学者・黄得時が与えた影響についても言及し、黄の論述から、主に「台湾を主体とする」視座を継承したといえる。

第二章では、二・二八事件と白色テロ時代を背景とする『台湾男子簡阿淘（台湾男子簡阿淘）』の作品分析を行った。本小説は、作家の個人的な体験と歴史的な出来事が絡みあう作品であるが、「喪失」と「再生」を手がかりに考察を加えた。小説世界内には二種の喪失体験が叙述されており、第一の喪失は主人公が臨む他者の死であり、死は生の消滅として描かれている。第二の喪失とは、主人公が直面する危機により、既存の人生の土台や自己の中核をなすアイデンティティを瓦解させるものであった。これらの喪失を通じて人間世界の不条理性や不安定さを浮き彫りにしていることを明らかにした。相次ぐ苦難に直面する主人公ではあるが、なおも強靭に生き延びながら再生の道のりをたどってゆく姿には、人間の持つレジリエンスを垣間みることができるのではないか。では、葉は自身の文学観において重要視する「台湾の歴史に宿す複雑さ」をどう反映したのだろうか。二・二八事件や白色テロ時代の背景には国民党一党独裁による圧政が存しているのだが、作家は声高に糾弾するのではなく、喪失と再生を内包する一個人の体験にそれらを投影したのである。したがって、「個」の物語であるはずの本小説は、世代記憶や歴史状況を映し出し、なおかつ台湾の人々に共有される大きな物語としての普遍性や特殊性を含有するのである。

第三章では、日本植民地時代を描いた「獄中記（獄中記）」を取りあげ、「日本表象」という観点から分析し、とりわけ作品中に表れる日本の地名・場所や『万葉集』の和歌に着目しつつ考察した。前者は楽しさや安らぎなどの感情が溢れる「場所」として

描かれており、作中人物の記憶を再現する装置としての機能を有している点を明らかにした。また、主人公の精神性についてみると、抗日組織の工作員という設定に反するかのように、古典和歌に深く共鳴し、感動をあらわにするなど、日本的な感性を内に秘める人物像が浮かび上がる。和歌を引用することによって、主人公のアンビバレットな特徴がより鮮明となることを指摘した。小説世界内で表象された「日本」は輻輳的なものであり、否定だけでなく、肯定をも述べられている。文中、二律背反の叙述が随所にみられる理由として、重層性を帯びた歴史が物語のベースとして存在しているためだと考えられる。

また、台湾人エリート青年であるにもかかわらず、抗日組織に身を投じた主人公の経歴や造形にも留意すべきだろう。外来政権による支配という「歴史」や「社会構造」、その支配下で生きる台湾人という「種族」の生のありよう。彼のライフストーリーを通じて、三要素が浮揚するように構成されているのである。さらに、政治的情勢により制約の多い六十年代の台湾という場において、本小説が書かれた意味を追尋すると、台湾の現実社会からかけ離れることなく、台湾で生きる人々の声や姿を反映したい、という作家の文学的信念や創作意識を読み取れると論じた。

第四章では、エスニシティの主題を扱った『西拉雅末裔潘銀花（シラヤ族の末裔・潘銀花）』について考察した。主人公・潘銀花の出自は台湾の少数原住民族・シラヤ族であるが、彼女は十六歳の時に漢人家庭で奉公し、その後、五人の漢族男性と関わりあいながら家父長制度の漢人社会の周縁で生きることとなる。文中、銀花は漢民族の伝統的な文化や思考様式の枠組みに収まらい異質な存在として描かれており、従前、母系社会のシンボリックな存在として語られてきた。しかしながら、銀花の価値観を再考すると、子の性別に関する彼女の判断基準には、漢族社会の影響とおぼしき男尊女卑の思想が入り混じる傾向があることを指摘した。また、「男性性」概念を援用し、同質性が強調される五人の漢族男性の男性性についてみると、たとえば銀花の入り婿となった汪書安のように、家父長制度のジェンダー規範から逸脱した漢人男性も存在するため、彼らは一様にヘゲモニック男性性（当該社会で最も優位的な位置にある男性性）を志向しているとはいえまい。したがって、作中の漢人男性を家父長制社会の代行者と等号で結ぶことはできないと考えられる。

葉の創作において、「種族」を表現するうえで、とりわけ宗教や言語、思考様式などを含む社会形態にフォーカスしつつ描写していることが特徴であるが、台湾社会の固有性と多様性を呈示する意図があるのだろう。ここで注目に値すべきことは、作家はそれらを優劣で論じるのではなく、互いの違いを相対的にみてゆくというスタンスを

貫いているのである。また、社会構造に関する叙述では、①漢族・家父長制社会とシラヤ族・母系社会にみる異なる二つの社会形態②原住民族に対する差別や不平等の構造、すなわち漢民族と原住民族のエスニックな階層差③漢人男性をめぐる「男性性」の階層秩序、以上の三項目が描出されていることを指摘した。

第五章では、ブラックユーモア小説として位置づけられてきた「晴天和陰天（晴天と曇天)」を取り上げ、小説世界に流露する「笑い」と「かなしみ」の二つの側面について考察した。「笑い」を誘発する要因として誇張や風刺、アイロニーなどの技法が用いられており、他方、「かなしみ」は幼女の夭折という悲劇によって提示されていることを明らかにした。さらに、作品の基底には、「ままならぬ困難な生をいかに生きるべきか」という主題が伏流しているのである。また、小説世界を包摂する風土性について分析を加えた。風土性のリアリティを示すために、旧暦七月――「鬼月」――のイメージを巧みに用いたことや、物語の舞台設定にみる古い地名の使用、地理的要素の描写は一定の機能を果たしているといえる。だが、作家は外在的風土を表象したばかりではないだろう。与えられた生を全うする作中人物たちの生のありようを通じて、台湾の風土によって培われた台湾人の内在的な精神性をも反映していると考えられる。

以上、本稿で論じた葉石濤作品の考察内容に基づき、作中における三要素の実践のあり方と特徴を次のように整理できる。第一に、「種族」では、各エスニック・グループの差異を相対的に捉え、各々の文化や言語、思考様式等の側面に光をあてながら叙述している。他方、台湾のエスニック・グループ間の感情の軋轢をめぐる描写もみられた。第二に、「風土」においては、自然環境よりも社会構造に関する記述の比重が高い。また、外在的自然環境だけでなく、風土の影響によって形成された内面の精神性をも描出していると考えられる。第三に「歴史」を前面に押し出して描くのではなく、その中で生きる個人的な体験とライフストーリーを通して、歴史を映し出す手法を多用している。輻輳的な台湾の歴史の重層性を強調する作家の創作意識が読み取れるのである。概括すると、一つの作品の中に、三要素は相互に結びつけられることが多いといえよう。

ここまでみてきたように、三大法則は不可欠な題材として用いられているだけでなく、作家はみずからの文学観で意識し続けてきた観点を創作に反映、実践したと考えられる。また、作品様態や文学技法、主題等を明らかにしたことにより、作品中において三要素がどのように実践されているのか、序論で呈示した問題をいささかなりとも述べることができたとのはないだろうか。

さらに、葉石濤文学に通底する特色として次の二項目があげられる。まず、「個」に

重きを置き、その内面に焦点をあてながら描くことである。文学は政治やイデオロギーではなく、人間世界や人間の内面を述べるべきだという、作家の基本的態度にも如実にあらわれている。では、作家はなぜ「個」とその内面に注目するのか。この問いを考えるうえで、次に紹介するテーヌのことばは何らかの示唆を与えてくれるだろう。

> 我々の認識しなければならないのは、まさしくこの個人自身である。（中略）情熱を具え、習慣を身につけ、特有の聲音と顔附をもち、特有の身振りをし、特有の服装をした、生きて動いてゐる人間、つい今しがた街上で別れてきた人間の様に明白で完全な人間を、歴史家が時間の隔たりをのり越えて識別する時に至つて始めて、真の歴史が現れるのである。[1)]

また、テーヌは人間の外面ばかりでなく、さらに重視すべきは人間の内側の感情と精神だと指摘する。なぜなら、「夫々の魂が無限に多種多様であり、驚嘆すべきほど複雑を極め」、「一民族、一時代の精神構造が、植物の一科、動物の一目の物質的構造に劣らぬほど特殊なものであ[2)]」るからだ。そのうえ、「文學の本来の役目は、感情を記録すること[3)]」であり、文学作品を通して、「一時代又は一種族のすべての感覺、すべての概念に固有な何らかの特徴[4)]」[)]」を見いだすことができうるとも述べている。

テーヌと葉の共通点は、「一個人」と「個の内面」を重視し、なおかつ、それにより「一民族、一時代」の「固有な何らかの特徴」と「特殊」性を導きだすことではなかろうか。言い換えれば、可視化できる「外側」（外見）だけでなく、「内側」（感情や精神性）をも含む個別の表象を通じて、人間に存在する「多種多様」な差異を把握することに眼目を置くのである。なぜなら、その「差異」こそが「種族・風土・歴史」の固有性と独自性を顕著に表出しているからにほかならない。

第二に、葉石濤の描出する小説世界にはしばしば二律背反の叙述がみられ、たとえば、「獄中記」にみる両価的な感情描写。「晴天和陰天」で流露する表裏一体をなす「笑い」と「かなしみ」。あるいは『台湾男子簡阿淘汰』で叙述した「喪失」の先に続き「再生」のように、作家は単一の解釈に収斂するという書き方をしなかったのである。したがって、葉石濤作品を特徴づけるものとして「両義性」をあげることができよう。

半世紀以上にわたる文学活動のなかで、葉はあくまでも「台湾」から離れないかたちで創作に取り組み続けてきた。彼の文学世界の根底に伏流するものとして、「台湾や台湾人」をめぐる思索や問題意識を提示し続けてきた証左ともいえるだろう。葉が三大要素を創作の実践方法として援用したのは、台湾社会の現実や諸相を小説作品のな

かで取り扱うためだとすれば、作家にとり小説創作とは、自身の文学観を体現し、凝縮させる営みでもあるのではないか。

ただし、「種族、風土、歴史」――三大基本法則は作品の多くを貫く主題ではあるものの、葉石濤文学の実質は決して一枚岩で捉えるべきではないだろう。作家は自身の小説作品の素材を台湾固有の歴史や社会・政治情勢、風土などに求める一方、台湾の市井に生きる人々の哀歓を凝視し、叙述してきた。小説世界の舞台や設定の多くは台湾に限定しているが、たとえば第二章『台湾男子簡阿淘』や第五章「晴天和陰天」において触れたように、実存に由来するアイデンティティの喪失、人間世界や生のはらむ不条理性などといった、人類が抱える普遍的かつ根源的な不安、憂患や危機意識の問題をも述べられている。また、第四章『西拉雅末裔潘銀花』で描かれている異なるエスニック・グループの共存や、多様性・寛容性を重んじる社会への提案は、分断が進む今日の世界になんらかのサジェスチョンを与えるものではないだろうか。

本研究を通し、葉石濤の文学的営為の系譜を考えるうえで、作家の文学観を切り口とする視座は一つの有力な手がかりとなりうることを、少しでも提示できていれば幸いである。しかしながら、本稿において検討した作品はごく一部であり、わけても第二ピーク期（1965～1971）の作品に関する先行研究はいまだ手薄の状態である。それらについては今後の課題とし、葉石濤文学の深層にある本質をさらに掘り下げてゆきたい。

【註】

（１）前掲書『英國文學史』、５－６頁

（２）同上書、１３頁

（３）同上書、４９頁

（４）同上書、１９頁

参考文献一覧

【全集・叢書】

（1）高木市之助・五味智英・大野晋校注『日本古典文学大系　万葉集四』、岩波書店、1962年

（2）フロイト，S 著、井村恒郎・小此木啓吾ほか訳『フロイト著作集』第 6 巻、人文書院、1970 年

（3）小林秀雄『小林秀雄全集』第 3 巻、新潮社、2001 年

（4）彭瑞金主編『葉石濤全集１』～『葉石濤全集５』、高雄市政府文化局・国家台湾文学館籌備処共同出版、2006 年

・彭瑞金「食夢獣的文学旅程――葉石濤的小説創作」『葉石濤全集１』

・本稿第二章より第五章において引用、参照した葉石濤の小説作品を以下に記す。

なお、第一章で言及した作品については、初出及び掲載文献を第一章にて明記しており、あわせて参照されたい。

＜第二章＞

・「夜襲」『葉石濤全集 4』

・「鋼琴和香肉」『葉石濤全集４』

・「紅靴子」『葉石濤全集４』

・「牆」『葉石濤全集４』

・「鉄檻裡的慕情」『葉石濤全集４』

・「鹿窟哀歌」『葉石濤全集４』

・「吃猪皮的日子」『葉石濤全集３』

・「邂逅」『葉石濤全集４』

・「「約談」『葉石濤全集４』

＜第三章＞

・「獄中記」『葉石濤全集１』

＜第四章＞

・「西拉雅族的末裔」『葉石濤全集４』

・「野菊花」『葉石濤全集４』

・「黎明的訣別」『葉石濤全集４』

・「潘銀花的第五個男人」『葉石濤全集４』

・「潘銀花的換帖姐妹們」『葉石濤全集５』

＜第五章＞
・「晴天和陰天」『葉石濤全集２』
（５）彭瑞金主編『葉石濤全集６』～『葉石濤全集２０』、国立台湾文学館・高雄市政府文化局共同出版、2008 年
・葉石濤「一個老朽台湾作家的告白」『葉石濤全集１０』
（６）彭瑞金主編『葉石濤全集２１』～『葉石濤全集２３』、高雄市政府文化局・国立台湾文学館共同出版、2009 年
・彭瑞金「府城之星・旧城之月――葉石濤的文学歳月」『葉石濤全集２３』
・陳萬益・余昭文・張恆豪・鄭清文・藍博洲。記録者心平「台湾苦難的反芻―葉石濤『台湾男子簡阿淘』討論会紀実」『葉石濤全集２３』
・蘇淑瑜「訪葉石濤」『葉石濤全集２３』
（７）彭瑞金編選『台湾現当代作家作家研究資料彙編１５　葉石濤』、国立台湾文学館、2011 年
・李昂「紛争的時代　葉石濤訪問記」」
【新聞・雑誌】
（１）葉石濤「我与『紅楼夢』」『台湾日報』、1977 年 8 月 24 日
（２）葉石濤「『文芸台湾』及其周辺」『民衆日報』、1979 年 8 月 27 日～28 日
（３）葉石濤「作家的座右銘」『中国時報』、1980 年 4 月 24 日
（４）葉石濤「中国文学与台湾文学」『台湾時報』、1988 年 1 月 1 日
（５）葉石濤「彩陶」『中華日報』、1989 年 1 月 28 日
（６）葉石濤「台湾文学的困境」『首都早報』、1989 年 10 月 6 日
（７）葉石濤「一個台湾老朽作家的幼・少年時代」『自立早報』、1989 年 10 月 18 日
（８）葉石濤「一個台湾老朽作家的五十年代――郷村教師」『民衆日報』、1990 年 4 月 19 日～20 日
（９）葉石濤「考古夢」『台湾新生報』、1990 年 6 月 22 日
（１０）葉石濤「太白酒，乾杯」『台湾新生報』、1991 年 10 月 9 日
（１１）葉石濤「説日語的那段童年生活」『中央日報』、1991 年 11 月 21 日
（１２）葉石濤「東京物語」『自立晩報』、1992 年 1 月 27 日
（１３）葉石濤「不完美的旅程」『台湾新聞報』、1992 年 4 月 22 日
（１４）李貞元「論葉石濤小説中的〈台湾女人〉」『台湾時報』、1994 年 7 月 18 日
（１５）清水純著、葉石濤訳「民主化後的平埔族」『民衆日報』、1996 年 4 月 27 日
（１６）小林岳二著、葉石濤訳「在泰雅族村落裡――原住民与日本」『民衆日報』、1996 年 5

月 7 日～14 日
（１７）馬淵悟著、葉石濤訳「入贅的男人―原住民阿美族的婚姻」『更生日報』、1996 年 7 月 7 日
（１８）笠原政治著、葉石濤訳「留在魯凱族村落的「身分制度」」『中華日報』、1996 年 7 月 28 日
（１９）葉石濤「台湾文学的多種族課題」『聯合報』、1997 年 12 月 24 日
（２０）葉石濤「巨大的脚歩―黄得時未完成的《台湾文学史》」『台湾日報』、1998 年 9 月 17 日
（２１）葉石濤「我和泰雅族」『民衆日報』、1998 年 2 月 8 日
（２２）葉石濤「流浪的小学教師」『台湾新聞報』、1998 年 7 月 26～27 日
（２３）葉瓊霞「文学主体性的建立」『台湾新聞報』、1999 年 5 月 29 日
（２４）陳芳明「一個耽美左派的一生」『中国時報』、2000 年 2 月 18 日
（２５）葉石濤「発現平埔族――我為什麽写《西拉雅末裔潘銀花》」『文訊』178 期、2000 年
（２６）林鎮山「牡丹与雛菊的伝奇　葉石濤小説的女性／書写」『台湾新聞報』、2001 年 12 月 10 日
（２７）陳玉玲「葉石濤小説中的女性原型」『台湾新聞報』、2001 年 12 月 17 日

【論文】

（中国語）

（1）黄得時「台湾文学史序説」『台湾文学』第 3 巻第 3 号、1943 年
（2）葉石濤「卡謬論」『台湾文芸』第 3 巻 10 期、1966 年
（3）葉石濤「台湾郷土文学史導論」『夏潮』二巻五期、1977 年
（4）呉達芸「台湾阿媽的典型―潘銀花」『小説与戯劇』第 9 期、1997 年
（5）杜偉瑛「従葉石濤小説『西拉雅族的末裔』系列談平埔族」『淡水牛津台湾文学研究集刊』第 1 期、1998 年
（6）張文豊「戒厳後葉石濤文学之研究」国立高雄師範大学修士論文、1999 年
（7）陳明柔「夢獣葉石濤」『台湾文学館通訊』第 5 期、2004 年
（8）林玲玲「葉石濤及其台湾文学論的建構」国立成功大学博士論文、2007 年
（9）徐国明「女性性慾的再現与批判――析論葉石濤『西拉雅末裔潘銀花』中的種族、性別与台湾意識」『台北教育大学語文集刊』第 14 期、2008 年
（１０）陳秀卿「沿山地区哆囉国社群移住村落初探――以白水溪為例」『第二届南瀛研究国際学術研討会』、2008 年
（１１）林玲玲「戒厳後「台湾意識」的重塑――以葉石濤『紅靴子』等回憶性小説為例」『黄埔

軍報』第五十六期、2009 年
（１２）陳芳明「葉石濤与陳映真――八十年代台湾左翼小説的両個面相」『台湾文学学報』第十七期、2010 年
（１３）郭漢辰「重建台湾植民記憶――葉石濤小説特質探究」国立成功大学修士論文、2010 年
（１４）廖淑芳「空間語境与歴史暴力――論葉石濤 1965 後復出階段的鬼魅書写」『台湾文学研究学報』十三期、2011 年
（１５）陳秀卿・林玲玲「発現平埔―葉石濤与西拉雅族書写初探」『黄埔学報』第 64 期、2013 年
（１６）馬嘉瑜「葉石濤小説中的両性関係研究」国立中正大学修士論文、2013 年
（１７）林巾力「建構「台湾」文学――日治時代批評対泰納理論的挪用、改写及其意義」『臺大文史哲学報』第八十三期、2015 年
（１８）黄聖閎「論葉石濤《西拉雅末裔潘銀花》中的後殖民論述」『第 34 届南区中文系碩博士論文研討会』、2015 年
（１９）宋澤来「葉石濤的長編小説《西拉雅末裔潘銀花》―公元 2000 年、浪漫文学潮流的到来」『鹽分地帯文学』、2018 年
（日本語）
（1）仁井田陞「中国の家父長権力の構造」『法社会学』1953 第 4 号、1953 年
（2）陳正祥・孫得雄「台湾の地名」『人文地理』第 12 巻（5）、1960 年
（3）恒吉良隆「ニーチェの運命愛 :「永遠回帰」との関連において」『文芸と思想』第 38 巻、1974 年
（4）山中浩司「運命愛―ニーチェの根本思想―」『經濟論叢』第 135 巻第 4 号、1985 年
（5）中野裕也「台湾原住民文学のパイオニア：トパス・ダナピマの世界」『藝文研究』第 62 号、1993 年
（6）根岸宗一郎「周作人におけるハント、テーヌの受容と文学観の形成」『日本中国学報』第四十九集、1997 年
（7）三枝充悳「生老病死と仏教」『東洋学術研究』第 39 巻 1 号、1998 年
（8）松永正義「台湾の日本語文学と台湾語文学」『一橋論叢』第 119 巻第 3 号、1998 年
（9）松田純子「イーフー・トゥアンの「場所」理論について」『文化女子大学紀要・服装学・生活造形学研究』30 号、1999 年
（１０）小林岳二「伊能嘉矩の台湾原住民研究」『学習院史学』第 37 号、1999 年
（１１）木本伸「中期ニーチェの研究―「自由精神」による「確信」からの解放―」『ドイツ文学論集』第 32 号、1999 年

（１２）河路由佳「日本統治下の台湾における日本語教育と短歌―孤蓬万里編著『台湾万葉集』の考察―」『人間と社会』11 号、東京農工大学、2000 年
（１３）大城直樹「「場所」の力の理解へむけて――方法論的整理の試み」『南太平洋海域調査研究報告』第 35 巻、2001 年
（１４）岡本祐子「中年のアイデンティティ危機をキャリア発達に生かす―個としての自分・かかわりの中での自分―」『finansurance』第 40 号、Vol.10、NO4、2002 年
（１５）張原銘「台湾におけるポストコロニアル研究の現状と課題の一考察」『立命館産業社会論集』第 39 巻、2003 年
（１６）戸田一康「葉石濤作品に見られる日本文学の影響―太宰治を中心に―」『日本台湾学報』第八号、2006 年
（１７）窪井俊之「自己喪失とスピリチュアリティ：自己を求めて」『先端社会研究』第 4 号、2006 年
（１８）郷坪敏幸「俳句における滑稽性」『尾道大学日本文学論叢』第 3 号、2007 年
（１９）松本陽正「アルベール・カミュにおける不条理について―『異邦人』を中心にして―」『広島大学フランス文学研究』第 26 号、2007 年
（２０）笹沼暁俊「ドナルド・キーンと戦後日本――日本文学研究とアメリカの影」『文学研究論集』第 25 巻、2007 年
（２１）李ハイ蓉 (LII Peijung)「国内植民地としての台湾と台湾二・二八事件』『Core ethics：コア・エシックス』第 4 巻、2008 年
（２２）王甫昌著、田上智宜訳「現代台湾における族群概念の含意と起源」『日本台湾学報』第 10 号、2008 年
（２３）林正子「文学における「場所」の力：「故郷」の「風土」を視座とする地域文化論構築に向けて」『岐阜大学地域科学部研究報告』第 22 巻、2008 年
（２４）斉藤和貴・岡安孝弘「最近のレジリエンス研究の動向と課題」『明治大学心理社会学研究』第 4 号、2009 年
（２５）東浦弘樹「ムルソーは異邦人か――カミュの『異邦人』をめぐって」『人文論究』第 59 巻、2009 年
（２６）菊池惠善「荘子とニーチェ」『哲學年報』第 69 巻、2010 年
（２７）三須祐介「漂泊するアイデンティティと台湾の文化―台湾で考えたこと、台湾を考えるということ―」『広島経済大学研究論集』第 34 巻第 2 号、2011 年
（２８）黄意雯「台湾作品に見る日本語借用現象の量的推移」『計量国語学会』28 巻 5 号、2012 年

（２９）洪郁如「読み書きと植民地：台湾の識字問題」『言語文化』49 巻、2012 年
（３０）菅野ゆりか「外国語学習とユーモア理解」『大阪女学院紀要』第 8 号、2012 年
（３１）五郎丸仁美「ニーチェ哲学における「自由と必然」――中期作品『ツァラトゥストラ』を中心として――」『人文科学研究（キリスト教と文化)』第 43 号、2012 年
（３２）張文薫「帝国アカデミーの知と 1940 年代台湾文学の成立――『台大文学』と「東洋学」を中心に――」『日本台湾学会報』第十四号、2012 年
（３３）大谷華「場所と個人の情動的なつながり―場所愛着、場所アイデンティティ、場所感覚―」『環境心理学』第 1 巻第 1 号、2013 年
（３４）今井久登「潜在記憶における想起意識の位置づけとその変遷」『研究年報』、2013 年
（３５）本多遥「小林秀雄「私小説論」考（上）:「リアリズム」と「文学リアリティ」をめぐって」『日本文芸論叢』第 23 号、2014 年
（３６）八木橋伸浩「台湾原住民角力事情覚書」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』第 7 号、2014 年、31 頁
（３７）川口遼「R.W コンネルの男性性理論の批判的検討：ジェンダー構造の多元性に配慮した男性性のヘゲモニー闘争の分析へ」『一橋社会科学』第 6 巻、2014 年
（３８）浜渦辰二「グリーフケアのために―臨床哲学からのアプローチ―」『グリーフケア』第 4 号、2015 年
（３９）池上良正「宗教学の研究課題としての「施餓鬼」」駒澤大学『文化』第 32 号、2015 年
（４０）金子昭「台湾先住民族とキリスト教伝道――とくにタイヤル族の長老教会について」『天理大学おやさと研究所年報』第 22 号、2016 年
（４１）磯田一雄「戦後台湾俳句小史（１）戦前期台湾の国語教育と俳句・短歌――生活表現の「日本化」・「近代化」」『成城文藝』239 号、2017 年
（４２）姜海守「「同義」言説と植民地におけるナショナル・アイデンティティ」『国際基督教大学学報 3－a・アジア文化研究』第 43 号、2017 年
（４３）張芸「夏目漱石の「文学」という問い―東西文学の分離から新たな文学の創出へ―」『言語・地域文化研究』23 巻、2017 年
（４４）尾﨑俊也「男性性を理解する分析概念の探求：ヘゲモニックな男性性とサラリーマン研究を事例に」『未来共生学』第 5 号、2018 年
（４５）毛利郁子「『こころ』における決定論と自由意思論―イッポリット・テーヌとポール・ブールジェとの関連で―」『九大日文』第 33 巻、2019 年
（４６）大井奈美「意味の回復による喪失体験の価値の反転――心的システムの発達モデル」

『社会情報学』第 8 巻 1 号、2019 年
（４７）渡辺絢夏「台湾におけるナショナル・アイデンティティ：日本統治下における「台湾」の萌芽」『国際日本研究』第 11 巻、2019 年
（４８）呂依屏「台湾シラヤ族と夜祭とエスニシティの構築」『総研文化科学研究』第 16 号、2020 年

【単行書】

（中国語）

（１）呉濁流『無花果』、林白出版社、1970 年
（２）朱西甯『中国現代文学大系』第 1 巻、巨人出版、1972 年
（３）張素貞『細読現代小説』、東大図書、1986 年
（４）葉石濤『台湾文学史綱』、文学界雑誌出版、1987 年
（５）林双不編『二二八台湾小説選』、自立晩報出版、1987 年
（６）呉濁流著、鍾肇政訳『台湾連翹』、台湾文芸社、1987 年
（７）中央研究院近代史研究所『口述歴史』編輯委員会編『口述歴史』、中央研究院、1989 年
（８）葉石濤『台湾男子簡阿淘』、前衛出版、1990 年
（９）鍾肇政『怒濤』、前衛出版、1991 年
（１０）彭瑞金「出入人間錬火―葉石濤集序」、葉石濤『葉石濤集』、前衛出版、1991 年
（１１）葉石濤『台湾文学的困境』、派色文化出版、1992 年
（１２）王幼華『土地与霊魂』、九歌出版、1992 年
（１３）陳伝興『従四十年代到九十年代：両岸三辺華文小説研討会論文集』、時報文化出版、1994 年
（１４）李喬『埋冤一九四七埋冤』、海洋台湾出版、1995 年
（１５）葉石濤『台湾男子簡阿淘』、草根出版、1996 年
（１６）葉石濤『西拉雅末裔潘銀花』、草根出版、1996 年
（１７）李俊勇『傷口之花』、玉山社出版、1997 年
（１８）葉怜芳『鴛鴦渡水』、皇冠文学出版、1997 年
（１９）王家祥『倒風内海』、玉山出版、1997 年
（２０）斉邦媛『霧漸漸散的時候』、九歌出版、1998 年
（２１）張良澤『葉石濤文学会議論文集』、台北淡水工商管理学院、1998 年
（２２）彭瑞金『葉石濤評伝』、春暉出版、1999 年
（２３）李秀娥『祀天祭地』、博揚出版、1999 年
（２４）彭瑞金『植民地経験与台湾文学』、遠流出版、2000 年

（２５）聖厳法師『四聖諦講記―随身経典 18』、法鼓文法、2000 年
（２６）彭瑞金『駆除迷霧找回祖霊　台湾文学論文集』、春暉出版、2000 年
（２７）陳玉玲『越浪前行的一代：葉石濤与同時代作家文学国際学術研討会論文集』、春暉出版、2002 年
（２８）戴燕『文学史的権力』、北京大学出版、2002 年
（２９）古継堂『台湾小説発展史』、文史哲出版、2003 年
（３０）陳培豊『跨領域的台湾文学研究学術研討会論文集』、国家台湾文学館、2006 年
（３１）陳建忠『被呪詛的文学：戦後初期台湾文学論集』、五南図書出版、2007 年
（３２）黄文成『関不住的繆思：台湾監獄文学縦横論』、秀威資訊科技、2008 年
（３３）陳平原『中国小説叙事模式的転変』、北京大学出版、2010 年
（３４）宋秀葵『地方空間与生存：段義孚生態文化研究思想』、中国社会科学出版、2012 年
（３５）羅秀美『台湾都市文学簡史』、国立台湾文学館、2013 年
（３６）陳沛然『佛家哲理通析』、東大出版、2014 年
（３７）周国平『尼采：在世紀的転折点上』、香港中和出版、2014 年
（３８）計璧瑞『被植民者的精神印記：殖民時期台湾新文学論』、秀威資訊科技、2014 年
（３９）彭瑞金・藍建春・阮美慧・王鈺婷『台湾文学史小事典』、国立台湾文学館、2014 年
（４０）李秀娥『図解台湾民族節慶：嶄新呈現一年四季歳時節俗的民族意涵与祭祀文化』、晨星出版、2015 年
（４１）余昭玟・林秀蓉『小説選読』、五南出版、2016 年

（日本語）

（1）コイエット著、谷河梅人訳『閑却されたる臺灣』、台湾日日新報社、1930 年
（2）テーヌ著、平岡昇訳『英國文學史』、創元社、1945 年
（3）イポリエイト・テエヌ著、瀬沼茂樹訳『文学史の方法』、岩波書店、1953 年
（4）カミュ著、清水徹訳『シーシュポスの神話』、新潮社、1969 年
（5）ボーヴォワール著、生島遼一訳『第二の性（一）』、新潮社、1974 年
（6）湯田豊『宗教学入門』、南窓社、1977 年
（7）平岡昇『プロポⅡ』、白水社、1982 年
（8）三上参次・高津鍬三郎『日本文学史』、日本図書センター、1982 年
（9）市古貞次・小田切進編『日本の文学古典編　万葉集三』、ほるぷ出版、1987 年
（１０）ジェラール・ジュネット著、花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール：方法論の試み』、水声舎、1985 年
（１１）伊藤潔『台湾』、中公新書、1993 年

（１２）イーフー・トゥアン著、山本浩訳『空間の経験』、ちくま学芸文庫、1993 年
（１３）綾部恒雄監修、信濃毎日新聞社編『世界の民　光と影上』、明石書店、1993 年
（１４）孤蓬万里『「台湾万葉集」物語』、岩波ブックレット、1994 年
（１５）孤蓬万里編著『台湾万葉集』、集英社、1994 年
（１６）孤蓬万里編著『台湾万葉集　続編』、集英社、1995 年
（１７）殷允芃編、丸山勝訳『台湾の歴史―日台交渉の三百年』、藤原書店、1996 年
（１８）孤蓬万里編著『孤蓬万里半世紀』、集英社、1997 年
（１９）イポリット・テーヌ著、手塚リリ子・手塚喬介『英国文学史――古典主義時代』、白水社、1998 年
（２０）葉石濤著、下村作次郎訳「台湾文学の多様性」台湾文学論集刊行委員会編『台湾文学研究の現在』、緑蔭書房、1999 年
（２１）陳芳明著、井手勇訳「植民地主義と民族主義――台湾作家葉石濤的苦境、一九四〇～一九五〇」、同上書『台湾文学研究の現在』
（２２）葉石濤著、中島利郎・澤井律之訳『台湾文学史』、研文出版、2000 年
（２３）井上毅・佐藤浩一『日常認知の心理学』、北大路書房、2002 年
（２４）綾部恒雄監修、末成道雄・曽士才編『世界の先住民族―ファースト・ピープルズの現在―01　東アジア』、明石書店、2005 年
（２５）田中雅一・中谷文美編『ジェンダーで学ぶ人類学』、世界思想社、2005 年
（２６）ベルクソン著、林達夫訳『笑い』、岩波書店、2006 年
（２７）松本浩一「中元節の成立について―普渡文献の成立を中心に―」『現代中国学方法論とその文化的視野［方法論・文化篇］』、愛知大学国際中国学研究センター、2006 年
（２８）周婉窈著、濱島敦俊監訳、石川豪・中西美貴・中村平訳『増補版　図説台湾の歴史』、平凡社、2007 年
（２９）子安宣邦『日本ナショナリズムの読解』、白澤社、2007 年
（３０）伊藤一彦『月の夜声』、元阿弥書店、2009 年
（３１）中川仁『戦後台湾の言語政策：北京語同化政策と多言語主義』、東方書店、2009 年
（３２）アンヌ・チャン著、志野好伸・中島隆博、廣瀬玲子訳『中国思想史』、知泉書館、2010 年
（３３）溝口雄三・丸山松幸・池田知久編『中国思想文化事典』、東京大学出版会、2012 年
（３４）土田知則･青柳悦子・伊藤直哉『現代文学理論　テクスト・読み・世界』、新曜社、2013 年
（３５）織世万里江「リーガルエイリアン」郭南燕編『バイリンガルな日本語文学』、三元社、

2013 年
（３６）渡邊二郎・西尾幹二編『ニーチェを知る事典　その深淵と多面的世界』、ちくま書房、2013 年
（３７）王幼華著、石其琳訳『土地と霊魂』、中国書店、2014 年
（３８）清水正之『日本思想全史』、ちくま新書、2014 年
（３９）中島利郎・河原功・下村作次郎編『台湾近現代文学史』、研文出版、2014 年
（４０）何義麟『台湾現代史――二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』、平凡社、2014 年
（４１）葉石濤著、中島利郎訳『シラヤ族の末裔・潘銀花　葉石濤短篇集　台湾郷土文学選集Ⅳ』、研文出版、2014 年
（４２）王甫昌著、松葉隼・洪郁如訳『族群　現代台湾のエスニック・イマジネーション』東方書店、2014 年
（４３）陳芳明著、下村作次郎・野間信幸・三木直大・垂水千恵・池上貞子訳『台湾新文学史』上・下巻、東方書店、2015 年
（４４）藤田主一・板垣文彦編『新しい心理学ゼミナール―基礎から応用まで―』、福村出版、2015 年
（４５）安藤宏『「私」をつくる　近代小説の試み』、岩波新書、2015 年
（４６）小寺聡編『もう一度読む山川哲学　ことばと用語』、山川出版、2015 年
（４７）鈴木宏昭『教養としての認知科学』、東京大学出版会、2016 年
（４８）陳培豊「植民地体制下の台湾の民謡――民謡に見る「場所」と「空間」」所澤潤・林初梅編『台湾のなかの日本記憶』、三元社、2016 年
（４９）松永正義「戦後台湾における日本語と日本イメージ」前掲書『台湾のなかの日本記憶』
（５０）橋本陽介『越境する小説文体――意識の流れ、魔術的リアリズム、ブラックユーモア』、水声社、2017 年
（５１）葉石濤著、西田勝訳『台湾男子簡阿淘』、台湾国家人権博物館、台南市文化局、法政大学出版局共同出版、2020 年

【古典文献】

（1）『晋書』、中華書局、1974 年
（2）郁永河『裨海紀遊』、『台湾文献叢刊第 44 種』、台湾銀行経済研究室、1962 年
（3）周鍾瑄『諸羅県志』台湾文献叢刊第 141 種』、台湾銀行経済研究室、1962 年
（4）林玉茹編『台南県平埔族古文書集』、台南県政府、2009 年

【ウエブサイト】

（1）原住民委員会全球資訊網ウエブサイト http://www.apc.gow.tw（2021 年 2 月 26 日筆者

最終閲覧）
（２）20 世紀・シネマ・パラダイスウエブサイト https://cinepara.iinaa.net（2020 年 10 月 14 日筆者最終閲覧）
（３）公益財団法人長寿科学振興財団ウエブサイト https://www.tyojyu.or.jp（2020 年 10 月 5 日筆者最終閲覧）
（４）台南市政府農業局ウエブサイト https://agron.tainan.gow.tw（2020 年 10 月 8 日筆者最終閲覧）

謝辞

——卻顧所來徑　蒼蒼横翠微——（李白「下終南山過斛斯山人宿置酒」）

この研究の道はいつから始まったのだろうかと考えると、約三十年前、筆者が大学生だった頃に、みずからの学びをより深めたいという思いが芽生えたことがスタート地点だったかもしれない。諸般の事情により、一度はついえてしまった大学院進学への夢だったが、あきらめきれぬ志を叶えるべく、不惑の年に聴講生として本学の門を叩いたのである。

ここにたどり着くまでに、感謝すべき方々はあまりにも多いが、そのなかでも特に入学と研究の機会を与えてくださった本学と宮尾正樹先生、和田英信先生、伊藤さとみ先生、そして 2020 年 3 月にご退官された伊藤美重子先生に衷心より深謝の意を表したい。先生方のお導きなくしては、今日まで続く道はなく、目標を結実させることもかなわなかっただろう。ことに、指導教員の宮尾正樹先生には何度お礼を申しあげても足りないほどである。遅々として進まぬ筆者の研究を忍耐強くご指導くださり、困難な時期には示唆に富むご教示やご助言だけでなく、思いやりのこもった励ましの言葉を頂戴した。また、和田英信先生には前期課程で修士論文のご指導をいただくなど、長きにわたってお世話になり、改めて感謝を申し上げる次第である。

『お茶の水女子大学中国文学会報』や『人間文化創成科学論叢』に投稿した際、匿名の審査員の先生方から、多くの有益なコメントとご指摘をいただいた。この場を借りて心から御礼申しあげたい。大学院の諸先輩や同窓たち、幼なじみの友人らは惜しみもなく励まし続けてくださり、実にありがたいお力添えであった。葉石濤文学作品は筆者に研究の道をさし示し、研究への愛を抱かせてくれた。

最後に、いつも愛情をもって支えてくれた家族にも深く感謝の意をあらわしたい。本稿には彼らの存在が宿っている。そして、もし死者に生者の気持ちが通じるのならば、張乾勲と長峰一夫、という二つの名で人生を生きた祖父に言い尽くせぬ感謝とともに小論を捧げたいと思う。